
超常科学研究会 - 未来少女エビアン -

な-こ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超常科学研究会 - 未来少女エビアン -

【Nコード】

N2216X

【作者名】

なーこ

【あらすじ】

俺は1年前の春、新入生のエビちゃんが発明品『タイムマシン的なもの』によって意識不明の重症となった。目が覚めると同級生だった憧れのタミちゃんが上級生となり、下級生だったエビちゃんが同級生になっていた。確かに、意識のなかった俺は、みんなの1年間を一瞬にして飛び越えて未来の世界に来たわけだが…。

星歓高校超常科学研究会を舞台に繰り広げられる、空想科学ファンタジー。主人公のゴロ助は、未来少女エビアンの発明品の実験体となりながら、様々な事件に巻き込まれていく。ゴロ助の周囲には、

天然キャラのタミちゃん、頭脳派のドリル、肉体派の花クジラ、そして新入生でアイドル歌手の星野ユリら研究会メンバーのほか、エスパー（かぶれ）タミ、赤ヘルのユウ子など謎のヒロインも登場予定。【挿絵ON推奨】

テレパシー的なもの

俺は、高校生活3度目となる春を1学年下級生と過ごすことになって、正直言つてウンザリした気持ちで校門をくぐるようになった。一緒に入学したはずの同級生(だった友人)は、大学受験の勉強に忙しく、俺が1年間休学していたことなど、もう忘れてしまったのか、誰一人出迎えすらしてくれなかった。

「1年ぶりの登校を暖かく迎えてくる友人なんて、まったく期待しなかつたぜ・・・と言えば、ウソになる。いやいや、すごく期待していた気がするし、せめて研究会の連中だけでも、俺を出迎えるべきじゃねーのか？　そもそも休学の原因は、研究会での事故が原因だったわけだからさー！」

い、いかん、下級生(今日から同級生)の教室で、思わず心の叫びを声に出してしまった。この癖だけは、絶対に封印せねば、単なるアホで落ちこぼれたと思われてしまう。そうでなくても、新学期から2週間が過ぎて初登校の俺は、「あれ？　アイツ今頃なんで初登校なの？　転校生かよ」的な奇異な目に晒されているはずだ。あ、クラスメイトの視線が痛い、いつそ本当に別の高校に転校してしまえば、こんな気苦労せずに済んだかもしれないが、1年間の眠りから目覚めたのが一昨日で、時期が時期だけに転入手続きも難しかったんだよ。

それに、ここ私立星^{せいかん}歓高校には、猛勉強の末に補欠入学したのであつて、今更ほかの高校なんて、絶対に見つけることが出来ない。とはいえ、とてつもない進学校ではないし、特別なカリキュラムがあるわけでもないので悪しからず。第一志望だった理由は・・・まあ、憧れの同級生(今日から先輩)と同じ星^{せいかん}歓高校に通いたかつたという、不純な動機で頑張つたわけですよ。

「この教室にゴロちゃんいる？」

い、いますよ、後藤^{ごとう}六助^{むすけ}は、貴女のために地獄の底から舞い戻つ

てきました。教室のドアを勢いよく開けて、俺の名前を叫んだ彼女こそ、憧れの先輩（順応中）であり、我が超常科学研究会のマドンナ、タミちゃんこと遠田多美代さん。おんたみよ

「は、はい、ここにいますナリ」

「あー！ 本当に復学したんだね、1年間も意識不明だったから、もう死んじゃったと思ったよ」

あ、なんか今、過去の人みたいな扱いされた気がする・・・うん、きつと気のせいだな。

「どうにか、こうにか生きております」

「意識が戻ったのが一昨日の4月20日だから、ちょうど事故から1年間で目覚めたのね」

「研究会での事故からは、365日と12時間だったと記憶しております」

「ゴロちゃんは、相変わらず細かいこと気にするね」

オマケの12時間は、事故からジャスト365日後の午後7時に一度目が覚めたけど、誰も病室にいなかったため、そのまま朝まで二度寝みたいな感じで過ごしただけ。

「それよりタミちゃん先輩は、研究会の活動を続けておるのでしょ
うか？」

「うん、超常科学研究会の会員は、ゴロちゃんが寝ている間に総勢5名になったので、な、な、なんと専用の部室が与えられましたよ」

「5名集まったのですか？」

「えーと、さつきから敬語を使っているけど、使い方間違ってる気がする。もしかして、私の方が上級生だから、気を使ってるつもりなの？」

俺は、憧れの（元）クラスメイトが、憧れの先輩になったわけですから、敬語の一つも使いますよ。一昨日から続く、こんな環境にもヤサグレてるし、俺の知らない1年間を過ごしてきた彼女に嫉妬もありますとも、1年見ない間に色んなところが成長しやがって。

なんか、後輩気取って、年上の先輩に甘えるような感じで……はい、くだらない妄想は、ここで終了します。

「しかし会員5名ということは、俺と、タミちゃん先輩、ドリル、花クジラ……. 昨年の新入生かな？」

「ブー！ ことし新入生が1名追加になりました」

「あれ？ 総勢6名だよな？」

なるほど、休学中の俺は、タミちゃん先輩の中でノーカウント（いない人）だったのね。ついでに研究会の（知っている）えいかくようじ会員を紹介しておく、ドリルことはなたまたま花クジラこと花田正巳。もう一人、去年の新入生だったニューじゃないハーフの女子高生……. 新入生歓迎会で一度会ったきりなので、名前も顔も正直あまり覚えていないが、モデルの『エビちゃん』に似ていた気がする。そんな美人だったのか、よく覚えていないけれど、タミちゃん先輩が「エビちゃんに、クリソツだよ」と言っていたのを記憶している。

「でね、でね、本日放課後に、新人歓迎会を開催することになったので、ぜひ、ぜひゴロちゃんも、参加してほしいのよ」

「うっ、新人歓迎会ですか……」

「ことしの新人さんは、超可愛い女の子なのですよ」

「超常科学研究会の新人歓迎会には、強烈なトラウマがあるのだが……. 可愛い後輩とは、お近づきになりたいかな」

「ゴロちゃんの復帰祝いも兼ねて、ぜったーいに誘うように、会長から頼まれてんだ」

おやおや、タミちゃん先輩の色香に騙されて入会した、ドリルや花クジラが会長職を引き受けたのは、ちょっと意外な気がした。二人のうち会長職を受けるなら、頭脳派のドリルかな、肉体派の花クジラに理系研究会の会長職は似合わない。

「てつきり会長は、タミちゃん先輩がやっていると聞いた。しかし、タミちゃん先輩を使い走りにするとは、ドリルの奴も酷い奴だね」

「うっん、ドリルは、会長じゃないよ」

「花クジラ？」

「ブー！ 昨年の新入生のこと覚えている？」

「確かエビちゃんに似ている・・・いや、じつは、あまり思い出したくない」

エビちゃん似の女のことを思い出すのは、目覚めてから意識的に避けていた。彼女のことを語るには、研究会での事故について説明する必要がある。俺たちは、昨年4月20日放課後、新人歓迎会と称して研究会のメンバーで集まって馬鹿騒ぎした。新人歓迎会とはお題目だけで馬鹿騒ぎが目的だったので、主役の新入生そっちのけで楽しんでいた。そこに遅れてやってきたエビちゃん似の女（うる覚え）は、『タイムマシンのなもの』だと言って、訳の解らん装置の付いたヘルメットを持参した。

俺は「こんな工事現場のヘルメットがタイムマシンだとお！ なめとんのか！」と、とにかく夏休みの工作みたいな『タイムマシンのなもの』を小馬鹿にすると、エビちゃん似の女は、機械的で無機質な声で挑発してきた。こうして1年前の出来事を振り返れば、彼女の挑発行為でヘルメットを被った結果、こんな事態に陥ったわけです。確かに、病院のベッドで意識のなかった俺には、この1年間が時空を超えた時間旅行だったけれど、意識だけ飛ばす『タイムマシンのなもの』って反則ですよ。

「俺と昨年の新入生は、事件の被害者と加害者ですから・・・そういえば、意識が回復してから、まだ謝りにも来やしない・・・いや、ちよつと待てよ、まさか会長って、アイツが会長なのか？」

「私は、かけもちのビリヤード部も忙しいし、それに3年生は、受験勉強で忙しいからね。ことしからエビちゃんが、超常科学研究会の会長さんです」

タミちゃん先輩は、昨年の新入生を「エビちゃん」と呼んでいたので、「エビちゃんに似ていた」という俺の記憶は、正しかったようだ。

「そっか・・・あれから1年経ったのだから俺と昨年の新入生は、同級生ってことか」

「うん、しかも同じ2年B組だね、ここ会長の教室だもの」

「なんですと！ 同じクラスメイトなのに、わざわざ上級生を通して、復帰祝いを伝えてくるとは、どんだけシャイガールなんですか？ つうか、どいつが俺を1年後にタイムスリップさせた犯人だあああ！」

俺は、教室中に響き渡る大声で叫ぶと、面倒事に関わるものかと目を背けるクラスメイトの一人一人、じつくりと睨み付けた。うーん、もう完全にイカれた男だと思われた。確かエビちゃんは、ハーフで赤毛だったはずだ。俺は「赤毛、赤毛、赤毛、ハーフ、ハーフ、ハーフ、エビちゃん、エビちゃん、エビちゃん」と念じるように呟くと、一番前のだ真ん中の席に座っていた、赤毛の女が立ち上がった。

赤毛の女の後ろ姿は、腰まで伸びた髪的先だけを団子のように結んでおり、2本アホ毛がピコピコと風に揺れていた。そう、まるで寿司ネタになった、赤く蒸した海老^{えび}が頭に乗った感じだ……。

「まんま海老やないかぁー！ー！ーい！」

俺の魂の叫びに、静まる教室。

ま、待てよ、俺のせいちゃうやろ？

あんな海老頭している、寿司ネタ女が滑ってるだろっ？

「ウチの会長は、海老（節足動物門・甲殻亜門・軟甲綱・十脚目属）扱いされんの嫌がるから……ゴロちゃん、早く謝った方がいいよ」
タミちゃん先輩は、滑りまくりクリステイ（ここでも滑ってる……）で傷心の俺に、止めを刺すように言った。俺は、クラスメイトの熱い眼差しの中、空気を読まないわけにもいかず、棒立ちになっていた寿司ネタ女に近付いた。

「なんか悪かったな……いきなり海老扱いして叫んじゃって……ごめんなあ」

とりあえず謝ってみたけれど、いつの間立場が逆転したんだろ？ そもそも寿司ネタ女は、俺を1年後にタイムスリップした加害者で、俺が被害者だったはずだ。俺は「これで貸し借りなしにしよう

うぜー！」と、親指を立ててみたものの、まったく振り返る素振りもなかった。

「元はと言えば、お前が変なヘルメットを被せたから、こんな事態になったわけだろう。俺と同級生になって、同じクラスになったのは、お前の落ち度なわけだね・・・俺に落ち度は、まったくないと思うんだよ」

寿司ネタ女は、カチカチカチカチカチとシャーペンの芯を出していた。なんか、嫌な予感しかしないのだが、まさかシャーペンの芯を凶器に、俺に襲い掛かる気じゃないだろうか？

「よし、解った！ お前に落ち度はない、すべて俺の落ち度だ・・・これで満足だろう？ エ、エビちゃん？」

その刹那、振り向いたエビちゃんのシャープペンが、俺の左こめかみにグツサリと突き刺さり、炭素質のシャープペンの芯が吸い込まれるように、何処かに消えて行った。何処か？ いや完全に俺の脳に消えていった。クラスメイトからは、単なる脅しでシャーペンを突き当てられたように、見えていたかもしれないが、このシャープペンの先には、極限まで出し切った芯があったはず・・・今は、俺の頭の中だけ。

「な、なんちゆうことを・・・お前・・・」

「あー、あー、テスト、テスト、私の声が聞こえているか？ 聞えているのなら、右手を挙げてちょうだい」

はじめて聞いたエビちゃんの声は、頭の中に響くような声だった。俺は、彼女に従って右手を挙げると、「何の意味があるの？」と聞いたが、彼女は口も開かず「今度は、左手も挙げてちょうだい」と指示してきた。指示してきたと言うか、ロボットに指令を出してきた感じだが、俺が左手を挙げると、満足したように口角を上げて笑った。正確に表現すれば、笑ったように見えた。笑ってくれたのなら、寿司ネタ女扱いしたことを許してくれたのだろう。

「寿司ネタ女？」

「い、いいや、そんなマグロ女、赤貝女みたいな、失礼な魚介系の

アダ名、君みたいな可愛い娘に付けるはずがないじゃない・・・って、また心の叫びを声に出しちゃった？」

俺は、タミちゃん先輩の顔を見たが、何のことやらと首を傾げていた。じつは、気が付いていたのだけれど、エビちゃんの吹き出しだけ『二重かぎかつこ』なんだよね。これって、口も開いてなかったし、たぶん心の声というか、テレパシー的な表現方法ですよ。

『テレパシーとは、原理が違うのよ。貴方に打ち込んだ特殊な炭素^{ナノカーボン}芯は、脳内のシグナル伝達を波形に変換して、周囲の同一波形と送受信を行っているのよ。同一波形を持つ思考は、お互いに共有化できる。私の発明品『テレパシー的なもの』は、テレパシーを疑似体験できるものなの・・・凄いでしょ？』

「す、すごいよ、『テレパシー的なもの』と言うか、もう完全にテレパシーだよー！」

俺を『タイムマシンのなもの』で、1年後の未来までタイムスリップさせたエビちゃんは、お笑い芸人だった宮崎県知事のように「それメガネの意味あるの？」ぐらい、ずり落ちたメガネのフレームの上から、青色の瞳で見つめている・・・近い・・・鼻息がかかるくらいに密着してきた。

『シグナル伝達の共有化有効範囲は、30センチかな・・・もつと強い想いなら、もう少し離れても届くかも。まだまだ『テレパシー的なもの』は、改良の余地があるわね』

「30センチなら、直接話しちゃった方が、手っ取り早いですね」もつと早く気が付くべきだったのだが、このときエビちゃんは、一言も発していないので、クラスメイトやタミちゃん先輩には、俺が独り言を呟いている電波野郎に見えていた。因縁浅からぬ男女が至近距離で見つめ合いながら、無言で睨み付ける女に、一方的に話しかける男。口を手で覆い隠すように、事の成り行きを見守るタミちゃん先輩の目は、俺がイカれたと思っっているようだ。

俺は、左こめかみを指差して「これ、抜いてもらえます？」と、恐る恐る切り出すと『それ、一生抜けない』と、予想通りの酷い回

答が返ってきた。

「おい、あの留年生・・・いま、エビちゃんに、何か抜いてくれて・・・」

「そういえば、さつきマグロ女とか、赤貝とか卑猥なこと口走ってたぞ」

「朝っぱらから教室で、何やらかそうとしてんだ？」

そりゃザワつくでしょうね、朝の学活前に異分子である俺が、君たちと1年間過ごしてきたクラスメイトの女子生徒と、突然見つめ合ってるわけですから。男子生徒の「俺たちのエビちゃんに、何してくれんだ？」みたいな視線は、この状況を上手く切り抜けなければ、“イジメの対象”にされかねない雰囲気だ。

シャーペンの芯を脳に突き刺された被害者の俺が、なぜかレイプ犯罪の加害者扱いされているのは、あまりに不条理だ。それに、これが脳内に留まっている限り、強制的に思考を読まれる可能性もある・・・そもそも俺の考えは、エビちゃんに読まれているのに、なぜ俺には、エビちゃんの思考が読めないんだ？

『私は、ヘアピンで送受信しているから、シグナル伝達の送信が弱いんだ』

「なぜ俺が埋め込み式で、お前が外付けなんだ？」

「入れるとき、ちよつと痛いし・・・それに、なんだか怖いから」

俺は、頬を赤らめながら照れくさそうに答えたエビちゃんに、心にトキメクものがあった。はじめて口から、本当の声を聞いた。きつと性格は、最悪だけれど、仕草や声は、最高に可愛い。

「おい、エビちゃん・・・いま、アイツに、入れたら痛いとか怖いって・・・」

「朝っぱらから教室で、何やらかそうとしてんだ？」

わ、わざとだ！　なんで『二重かぎかつこ』使わねーんだよ！

わざと誤解を招くように仕組んだに違いない。エビちゃん、恐るべき女だ。

「抜けないと、なんか問題あるのか？」

「わ、わかった・・・俺が全面的に降伏しようじゃないか・・・だから、これ以上、タミちゃん先輩やクラスメイトに、誤解を招くことを止めてほしい」

俺は、完全に誤解をしていたらう、真っ赤な顔を両手で隠しているタミちゃん先輩を覗き見ると、エビちゃんとの『テレパシー的なもの』送信距離を保つため顔を近付けた。俺の切ない気持ちを伝えるためだ。

「おい！ 留年生さん、エビちゃんに近付いて、キスでもするつもりか！」

数人の下級生（今日からクラスメイト）に羽交い絞めされた俺は、強制的にエビちゃんから引き剥がされた。

「俺は、無実だ！ お前ら騙されてるぞ！ 俺は、被害者なんだつてばよ！」

「俺たちのエビちゃんに酷いことした拳句、俺たちのナルトまで汚しやがって！」

殺気立つクラスメイトは、俺の言葉に耳を貸しやがらない。それどころか「てばよ」の3文字にまで、気に食わないと、殴りかかる勢いだ。

「おやめ！」

エビちゃんが姐さん口調で、黒板を叩きつけると、クラスメイトの男子たちが一斉に片膝をついた。その様子は、悪の組織の女幹部に平伏す戦闘員が如くだ。

「この寿司ネタ女のくせに、俺様を玩具にしてくれたな、ゆ、許さんぞ、この恨み晴らすぞおくべきか」

地面に押し付けられた俺は、エビちゃんのタータンチェックの制服のスカートから、スラリと伸びる生足ハイソックスを見上げて・・・あつ、このポジション悪くないかもと思った。がつ、次の瞬間、俺の顔面を彼女のエナメル質の靴が、顎の下から脳天まで突き上げた。

俺は、薄れゆく意識の中で「黒い下着は、反則だらう」と断末魔

タイムマシンのなもの 前篇

「・・・ゴロちゃん・・・大丈夫?・・・」

タミちゃん先輩の声に起こされた俺は、保健室のような白いカーテンに仕切られたベッドの上で目が覚めた。朦朧もろろとした意識の中で辺りを見回したが、コンクリートの打ちっぱなしの壁面や天井、病院や保健室のような独特の薬品的な臭いがしないので、ここが星歡高校の部室棟の一室だと解った。

「会長のエビちゃんとは、色々あったから私が事前説明に行ったのに、いきなり喧嘩したら駄目でしょう。それに、エビちゃんを海老扱いしたら怒られるって、忠告したのに“寿司ネタ女”とか叫べば、蹴飛ばされても文句言えないよ」

そうか、タミちゃん先輩は、俺たちが直接話せば喧嘩になると、わざわざ教室まで来てくれたのか。血の気の多い俺は、彼女の好意を無駄にってしまったようだ。

「ところで、ここは、何処なの?」

「ここが超常科学研究会の活動拠点、星歡高校部室棟13号室です」

「そうか、我々の城ってわけだな。13号室とは、不吉な気もするが・・・俺は、どれくらい意識を失っていた?」

「もう放課後だよ。初登校だったのに、授業受けなくて残念だったね」

「タミちゃん先輩が看病してくれていたの?」

と、俺が言うと白いカーテンが解放されて、エビちゃんが仁王立ちしていた。

「わ、私の責任だから、私が看病した」

俺は、感謝するのもおかしいが「そうか有難う」と言つて、ベッドから立ち上がった。しかし、なんで研究室にベッドなんて持ち込んでいるのだろう、俺が寝ていた1年間、まさか如何わしい行為と

が行われる、如何わしい研究会に変貌したとか？

「ベッドは、人体実験用に持ち込んだのだ。床に寝かせて実験するのは、忍びないからね」

エビちゃんは、俺の思考を読み取ったのか、しれっと言ったが、人体実験なんて高校生の同好会レベルの研究で行うことか？ ちよつと待てよ、俺は、放課後まで半日間、この研究室で彼女と二人きりだったわけだが、仮面のライダーみたいな、改造的なことをされていないのか？ 俺は、ヘソの辺りに感じる違和感に気付いて、制服のワイシャツを脱ぎ捨てて上半身裸になった。

「おい、貴様ら・・・俺の腹に巻かれている、変身ベルトみたいなやつは、一体なんだ？」

俺は、腰に巻かれたチャンピオンベルトみたいな、よく解らん装置を指差した。

「寝てるだけでは、時間が勿体ないから低周波装置で腹筋を鍛えておいた・・・市販のEMSだから、大袈裟に騒ぐな」

「なんじゃこりゃ、見事に腹筋が割れとる！ がッ、この程度の改造なら、むしろ嬉しい」

「そうか、その程度の償いで許されるのなら、こちらも助かるわ」
「たった半日で腹筋が割れるのは、なかなか画期的な気がするぞ」

俺が遅しくなった自分の腹筋に見惚れていると、タミちゃん先輩がクスクスと笑った。

「ゴロちゃん、半日で腹筋が割れるわけじゃない。病院で寝ていた1年間、私たち研究会のメンバーが交代しながら、意識のないゴロちゃんのリハビリしてたのよ」

「せ、先輩、余計なことを言うな、リハビリじゃない、人体実験だ、改造だ」

あつ、なるほど、みんな意識不明になった俺の看病をしてくれたのか・・・どおりでウチの両親が、こいつら研究会のメンバーを悪く言わなかったはずだ。そうかドリルや花クジラ、それにエビちゃんも俺の看病してくれていたのか。いい奴らじゃないか・・・

なのに、出迎えに来ないとか、薄情な奴らだと罵った俺は、なんて心が狭い男なのだ。

「そうか、みんな俺の看病をしてくれていたのか」

「うん、とくにエビちゃんは、毎日通ってお世話してたよ」

「せ、先輩、この男が意識不明になったのは、私の発明品のせいだし、タイムスリープ中の被験者の経過観察したかったからよ」

そうか、エビちゃんは、毎日通ってくれていたのか、思ったより良い娘だな。しかし、上半身裸体の俺を見ている女子二人は、思春期独特の「やだー、早く服着てよー、エッチー」みたいな反応をしないこと、腹筋だけが以上過ぎるくらい鍛えられているのは、どういう意味なんだろう？

「お前の裸体は、一年間で見慣れたからな・・・男は、腹筋が割れた方がカッコイイぞ」

「あと、ゴロちゃんをお風呂入れたり、お化粧して2人で遊んだよね。あつ3人かな？」

タミちゃん先輩は、てへっと笑ったが。

「み、見慣れたじゃねーよ！ てへっじゃねーよ！」

「角野卓造？」

「角野卓造じゃねーよ！ って、じゃねーよに絡むんじゃねーよ！ お前ら、寝てる俺を、どんだけ玩具にしたんだよおお！ なんでも3人で遊んだことにして、こっそり俺も仲間入りさせてんだよ！俺の人権は？ 俺の基本的人権はなかったの？」

「ない（きつぱり）」

「ないです（きつぱり）」

あ、あれ？ 二人とも否定しなかったよ・・・エビちゃんは、解るけど、タミちゃん先輩まで否定しなかったよ。俺は、玩具決定なのか？

「美少女二人に弄ばれるなんて、高校生男子には、なかなか羨ましいシチュエーションだぞ」

確かに、羨ましがられるシチュエーションだ。がッ、それは、俺

の意識があつたならばこそそのシチュエーションだ。忘れない・・・覚えていないが、もう嫌なことは、全て忘れない。落ち込んでいる俺に、タミちゃん先輩は、優しく微笑んで「ウソよ」と言ってくれた。

「な、なんだ、冗談かよ。焦らせやがって・・・」

と、安心した俺は、エビちゃんの不敵な笑みを見なかったことにした。たぶん、奴だけは、本当にやりやがったに違いない。

「さてと、私は、ドリルたちと新人歓迎会の買い出しに行くから、エビちゃんとゴロちゃんは、二人で留守番していてね。もしかすると、ことしの新入生が来るかもしれないから」

タミちゃん先輩が俺たち二人を残して、研究室を出て行ったが、入院中のエピソードを聞かされた後、何もかも見られてしまったエビちゃんと二人きりにされて、気まずさが倍増した。しかし、1年前の事故では、俺が挑発に乗って自爆したのが真相で、彼女だけを加害者扱いするのは、フェアじゃなかった。

「私を呼ぶときは、エヴィとVを意識して、ナチュラルな感じで、エビと呼べ。もしくは、会長だ」

「はあ？」

「お前の発音だと、海老に聞こえる」

「海老と呼ばれたくなければ、その髪型を変えろよ」

「こ、この髪型は、巫女さんを意識しているのだ。けして、海老を意識しているわけではないぞ。お前のクラゲの足ように広がった、ボサボサ頭の方が見苦しいから直せ」

確かに長い髪の前だけ結んでいるのは、神社で見る巫女さんへアにも見える。赤毛の巫女さんは、あまり見かけたことがないが。それと俺の髪型は、一年間寝ていた寝癖であって、俺が一年間生きてきた唯一の証だから、当分このままで行く決めてる。

「ならば、俺のことは、六助さんと呼べ。もしくは、先輩だ。同級生とはいえ、年長者を敬え」

「私は、ことしで19歳だから、お前より年上だぞ？ お前のこと

の世に掃いて捨てるほどいるから・・・いやいや、いねーだろ、桜月院なんて御大層な名字の家族は、たぶん日本で一大家族、世界でも一大家族だよ。

「エビちゃん、いや、エビアンさんは、あ・の・桜月院家の娘さんなのかい？」

「ど・の・桜月院家かは、存じませんが、そ・の・桜月院家のことでしょうね」

や、やばいぞ俺、エビちゃんが桜月院の御息女だったら、これまでの無礼の数々で、ウチの家族がこの街に住めなくなるかもしれない。どうする？　ここは、土下座して無礼な言動を詫びるべきか？

「私は、桜月院の実子ではないから、気にする必要はないぞ」

「そ、そうか・・・って、また、心の中を覗きやがったな、いいか金輪際、俺の30センチ以内に近付くんじゃないぞ」

エビちゃんは、俺から離れた椅子に腰かけており、思考共有化の有効範囲にいなかった。彼女は、俺の思考を読んだわけではなく、俺の怪訝な表情を読みとっていたのだ。悲しげな表情で頷いた彼女を見たとき、桜月院の名前の大きさが、あしかせ足枷あしかせになっていることに気付いた。

「お、俺にも、エビアンの気持ちが解る気がする。悪かったな、家のことなんて、ツマランこと気にしちゃって・・・許してくれるか？」

俺の左こめかみに埋め込まれた『テレパシー的なもの』は、エビちゃんの重苦しい思考を拾ったようだ。彼女は『わかった・・・』と、鬱々とした重々しいまでの感情が、俺の脳に流れ込んできた。

これが思考を共有するということか、彼女は、俺の辛い気持ちや、寂しかった気持ちを理解しようと、こんな装置を埋め込んだのだろう。今なら、そんな彼女を理解できる気がした。

『わかった振りして、ウザいんだよ』

エビちゃんは、『二重かきかっこ』で訂正してきた。そして「スイッチ切り忘れた」と、ヘアピンのスイッチをオフにした。

「おい、そのヘアピン寄せ。そんなもので、俺の頭の中を覗かれるのは、やはり許しておけない」

「嫌だ、このヘアピンは、私の思い出の品だからな」

「どんな思い出か知らんが、寄こさないと言うのなら、お前たちが改造した、この肉体を行使することになる」

「えっ？ そ、それは不味いだろ」

俺は、北斗の神拳のように、手をボキボキ鳴らすと、EMSに鍛え上げられた筋肉でポージングを決めた。どうだ、この肉体美に、どんな女も俺の要求を拒むことが出来ないだろう。

「どうしたエビアン？ お前の作り上げた筋肉だ」

俺は、何度もマツチヨポーズを取りながら、手を差し出してヘアピンを要求したが、エビちゃんがヘアピンを手渡すことがなかった。「おいゴロ助、私には、男性ストリッパーが、客にチップを要求しているように見えるぞ？」

「さあ、強情を張らずにヘアピンを寄せ」

どうやらエビちゃんには、色仕掛けが通じないらしい。俺は、ワイシャツを着ながら恥かしさに耐えられず、思わず照れ笑いで誤魔化した。

「まあ、その気恥ずかしさも、もうすぐ忘れてしまうのだから、あまり騒ぐことないぞ」

「忘れるとは、どういう意味だ？」

「私がゴロ助の病院に毎日通っていたのは、私の作った『タイムマシンのなもの』に、どんな欠陥があったのか、それを確認していた言っただろう？ 精神だけでなく、肉体も時間を越えねば『タイムマシンのなもの』は、欠陥品の失敗作だからな」

エビちゃんは、座っていた椅子の後ろにあった段ボールを自分の膝の上に乗せると、中から見覚えのあるヘルメットを取り出した。

一年前の4月20日、新人歓迎会で俺が被ったまま、意識不明させられた『タイムマシンのもの』だ。ヘルメットの横には、可愛い丸文字で『ばくじょん2 可逆式』と書かれていた。可逆式と

は、回転方向が一方向の非可逆モーターに対して、正回転と逆回転の出来るモーターのことだ。

「新バージョンは、可逆式で過去にもタイムスリップが可能なのだぞ・・・ただ、どうやら肉体に関するデータは、アカシックレコード（人類の魂の活動記録）にあるようで、やはり精神のみの時間逆行しかで出来なかった」

俺は、エビちゃんの実験台にされると理解した。

「俺は、過去に帰れるのか？」

「そうだ、ゴロ助が過去に帰れば、今日の出来事は、存在しなかった未来になる・・・脳に突き刺さった『テレパシー的なもの』も、EMSで改造された肉体も、全て存在しない未来の出来事になり、肉体も1年前の状態となるのだ。ただし、お前の精神は、1年前に戻ったとしても記憶に存在する」

「その機械は、ちゃんと安全性が確かめられているのか？」

「未来行きは、何度か私も寝る前に試したが、問題なく朝スツキリ目覚めた。過去行きは、理論上の問題があつて試してない」

「朝スツキリ目覚めたとは、単なる安眠機能しか試したらんのだな・・・理論上の問題つてなんだ？」

「『タイムマシンのなもの』は、これ1台しか存在してない。もしも私が過去行きを試して、これが存在しない過去になってしまつては、ゴロ助を過去に帰せなくなる」

「それを一緒に過去に持つていくことは、出来ないのか？」

「過去に行けるのは、精神だけだから、この発明品自体が存在しない未来に、置き去りにされる可能性がある」

「存在しなくなつたら、同じものを作ればいいだろう？」

「私は、設計図に頼らず直感で作るから、発明品は、全てワンオフだ」

「過去行きを試せるのは、一度きりだと言うことか」

「みんなが戻つてくる前に、今すぐ試すか？ 会えば、この時代の人間との別れが、名残惜しくなるだろう？」

エビちゃんは、そう言っていると俺に『タイムマシンのなもの』を前屈みに手渡した。そのとき、膝に置かれていた段ボールが俺の足元に転がり、さらに彼女が窮屈に前屈みになると、俺の下腹部にアホ毛が触れてくすぐったかった。ぞわぞわとして気持ちいい。

『ゴロスケべ〜』

お、おい、ヘアピンの電源切ってねーのかよ！

おまけ【設定2】

> i 3 2 2 0 5 | 3 7 0 8 <

上 後藤六助ごとう りくすけ
下左 鋭角浩次えいかく こうじ
下右 花田正巳はなだ まさみ

タイムマシンのなもの 後篇

昨年の超常科学研究会新人歓迎会は、主役である新入生が揃わぬうちに、俺の乾杯の発声で幕を開けた。星歡高校では、同好会の会員5名で100室ある部室棟に専用部屋が与えられるのだが、我が会も新入生を迎えることで、やっと条件を満たすことが出来るのだから、このときの俺たちのはしゃぎ様は、たぶん会創設以来だったと思う。

我が会の創設は、オカルト好きのタミちゃん（当時同級生）が、幼稚園来の幼馴染である俺に「オカルト研究会を作るのなら、ビリヤード部とかけもちで参加してもいいよ」と言った、その一言でオカルト同好会を立ち上げるべく、同好会のメンバーを募集したことに端を発する。

「オカルトに興味ある？」

俺は、人目を惹くためにビキニパンツ1枚で、校門に立つて募集ビラを撒いたものの、寄って来たのが、そっち系の奴らばかりで、マジでオカルト的な現象だった。そりゃ、そうだ、可愛い女子高生がバニーガールの格好しても団員が集まらないのに、俺がパンツでビラ撒きしたって、会員が集まるわけがない。そんな落胆する俺の前に、相撲部への入部届を破り捨てた、花クジラが声をかけてくれた。

「おいどんは、お前みたいな奴が好きでござす」

「オカルトが好きなのか？」

「俺の大好物だ・・・食べちゃいたい」

「そうか大好物か、会員第1号だな」

「ごっちゃんです」

花クジラの奴とは、会話が噛み合わなかったが、俺のビキニパンツで訴える姿に感動したらしく、その場で制服を脱ぎ捨てると、俺の後ろで鼻息荒く四股を踏んでくれた。あまりに鼻息が荒く、小刻

みに四股を踏むものだから、思わず殺気を感じたくらいだ。花クジラとの出会いは、一人でも多くの会員を欲している俺にとって、まさに幸運な出会いだった。

俺と花クジラの肛門（正：校門）での活動も虚しく、寄ってくるのは、ますます、そっち系の奴らばかりになった。この高校は「そっち系しかないのか！」と、俺は、ビラ撒きを切上げることにした。俺のビキニパンツ姿では、花クジラ以上の逸材を見つけることが難しいと思った。

ならば、最終手段としてPRビデオを撮影することにした。ビキニパンツの俺が、プールで格好よく泳ぐ姿を、同じ中学校だったドリルに撮影してもらい、それを昼の校内放送でハードリピートするのだ。運が良ければ、飛び込み台に謎の美少女が現れて、なんとなく仲間になってくれるって手筈だ。

ただ問題は、この手の勧誘方法で部員獲得に成功する、アニメを深夜に見ていたのだが、残念なことになる覚えで、その後どんな展開を向えたのか、つまみ食いだから解らない。謎の美少女は、ちゃんと水泳部の活動していたのだろうか？ なんとなく脇道に逸れていって、最終的にロボットのなるもので、敵的なものと戦っていた気がする。俺は、そんなハードな展開を望んでいないから、このアイデアは、実行すべきではないと判断した。

だが、このPRビデオを依頼する変わりに、ドリルの撮っている映画に出演することを約束していたため、花クジラと俺は、ドリル監督の映画撮影に付き合うことになってしまった。ドリルの奴は、中学時代から変わった奴だったが、出演者が男二人なのに、恋愛映画を撮るとぬかしやがった。しかも、河原に呼び出された俺たちには、衣装の一つも用意していないときたもんだ。

「おい！ ドリル監督さん、衣装も付けずに、男二人で恋愛映画なんて、どうやって撮るつもりだ！」

さすがに鈍い俺だって、このときばかりは気が付いたよ。いきなり濡れ場は、違っただろうとね。俺の的確な指摘には、ドリルが照れ

くさそうに笑いながら「いいんだよ、これは芸術なんだからね」と、腕が無いのを芸術だと言って誤魔化した。

「なんでもかんでも芸術で誤魔化すな」

「ゴロちゃんの言うとおりでござす」

「いいから、黙って絡めばいいんだよ！」

「俺は、ストーリー性こだわってるんだよ」

「おいどんも、ゴロちゃんの意見に賛成だ」

「お前ら男優の意見なんざ、聞いちゃいねーよ（笑）」

俺は、ドリルのニヤけた顔を2、3発殴りつけると、続いて4、5発、6、7発と、ドリルがオカルト同好会の入会届に、泣いて入会させてくださいと、サインするまで殴り続けた。今では、良い思い出だと、よく三人集まってサウナで汗を流しながら語り合っている。

ちなみに、今の話は、嘘だ。

花クジラは、語尾に「ござす」とか、自分のことを「おいどん」と、言ったことは一度もない。キャラ分けしておかないと、自分の思い出でも誰がサオで、誰がタチか、混乱してしまうので脳内を最適化したのだ。相撲部に入部直前だった花クジラは、力士っぽいイメージで保存されているだけだ。

実際は、ビラ撒きの際に泣きついて入会してもらった、お人よしの花クジラと、俺の頼み事を断れないドリルに土下座して入会してもらった。こうして新規同好会の立ち上げに必要な、3名が集まったのだった。

しかし、ここで更なる問題が浮上した。既にオカルト同好会なるものが、星歡高校に存在していたのだ。先に調べておけば、無駄な努力をせずに済んだのに・・・俺は、悔し紛れに花クジラの横っ面を張り倒すと、2倍の張り手が返ってきた。俺は、本当に迂闊だった、力士マンの花クジラに張り手勝負を挑むなんて、せめてローキックで沈めてから、肘を入れてやべきだった。

そんな傷付いた俺にタミちゃんは、ハンカチを渡してくれた。

「4人でオカルト同好会（既存）に入会しよう」

タミちゃんは、傷付いて落ち込んでいた俺たち3人に、満面の笑みを浮かべながら。オカルト同好会に誘ってくれたのだ。俺たち4人は、オカルト同好会の入会書にサインした・・・がッ、それでは意味がないのだ。俺が目指した同好会は、オカルトではなく、タミちゃんと仲良く、いちやいちゃ出来る同好会なのだ。既存の同好会では、キザな先輩たちにタミちゃんを奪われる危険性があるので、せっかく集まった4人で、新規の同好会を作らねば意味がないのだ。俺は、ほかの3人からオカルト同好会の入会届を預かると、同好会名を『超常科学研究会』と書き直して、生徒会に提出した。

これが我が会の創設の瞬間だった・・・後にタミちゃんからは、大目玉を喰らったのは言うまでもないが、俺が土下座で乗り切ったことも言うまでもない。

「・・・」
俺は、研究室で『タイムマシンのなもの』を両手に抱えながら、念願だった研究室でエビちゃんに、我が会の創設史を熱く語っていた。彼女の感想は、先ほどの「・・・」だ。

「つまり昨年の新人歓迎会は、エビちゃんの加入で5名の会員が揃って、研究室がもらえるはずだった、非常にテンションの上がる催しだったのだ」

「・・・」

「聞くところによれば、俺がヘルメット被って休学したせいで、欠員1名で処理された結果、研究室をもらえなかったらしいね」

「去年は、4名に戻ったから根無し草で活動してたぞ」

「俺が手にしているのは、因縁深いヘルメットなんですよ」

「そもそも私は、昨年の新人歓迎会で入会を断るつもりだったのだ。研究室は、ゴロ助が休学せずとも、手に入れることが出来なかっただろう」

「えっ？ どういう意味ですか」

「この研究会は、超常（常識を超えた）科学を研究する会だと思っ

たから、入会を希望したのだが、活動内容は、肝試し大会だとか、心霊写真ツアーとか、ほとんどオカルト分野の研究ばかりじゃないか

「そりゃ、当たり前だろ」

「どう当たり前なんだ？」

「我が会は、“超常現象が好きなタミちゃんを科学的に研究する会”略して、超常科学研究会だもん」

エビちゃんが頭を抱えていたので、俺は「だから、超常現象が好きなタミちゃんを応援する団だもん」と若干のアレンジを加えてみたものの、エビちゃんの苦悩の色が増したので、俺は「すまん、団じゃないよな」と詫びてみた。

「解った・・・とりあえず、私も過去1年間の出来事をリセットしたいから、さっさと過去に戻ってくれよ。ゴロ助がタイムスリップしてから、今日までの1年間の出来事を、存在しない未来にしてくれよ」

「そうか、つい、嬉しくてツマラン話を聞かせてしまったな」

「何が嬉しくて、嘘話を聞かせるんだ？」

「俺にとつては、3日前まで研究会のみんなと馬鹿騒ぎして、楽しかったんだよ。なかなか会員も集まらなくて、色んなイベント企画したり・・・ピラ撒きだって、本当の話なんだぜ」

「くだらない研究会だから会員集めるのは、大変だろうね」

「必至に走り抜けた1年間、やっと迎えた新入生ですよ」

「わ、私のことか？」

「そりゃ浮かれますよ、浮かれた拳句に、この体たらくです」

「ゴロ助は、浮かれ過ぎると周りが見えなくなるタイプだね」

「気が付いたら、一緒に頑張ってきた仲間は、受験戦争まっただ中、未来に来たはずの俺だけ、置いてけ堀だよ。未来に来たはずなのに・・・」

「なんか抽象的な話だけどゴロ助は、寂しいってことかい？」

こんなときは、ヘアピンの電源を入れておけ、空気読めよエビち

やん。俺が、何を悩んでいるのか、どんだけ悩んでいるのか、そんなこと天才のエビちゃんなら理解できるはずだろう？ 俺が過去に戻って、この1年間をやり直した場合、存在しない未来に残される研究会のメンバーは、一体どうなっちまうんだ？ 教えてくれよエビちゃん。

「な、なんで泣いてるんだ？」

「おで、泣いでる？」

「泣いてるよ」

「鼻水が出るだけじゃない？ おで、花粉症だから」

「と、とにかく私がイジメてるみたいだから、鼻をかめ」

俺は、エビちゃんからティッシュをもらうと、大量の鼻水をかんだ。とりあえず、しゃっくりが出ていないので、鼻さえ通れば聞き苦しくない程度に回復できる。

「さつきから気になることがあるんだ・・・このヘルメットで過去に戻れるのは、一度きりなんだろう？ このヘルメットは、俺が過去に戻るためエビちゃんが作ったから、俺が過去に戻って昨年の4月20日にヘルメットを被らなければ、このヘルメットが存在しない未来になる」

「まんざら馬鹿じゃないんだな・・・そのとおり、ゴロ助が過去に戻った場合、この未来がパラレルワールドとして、存在し続ける可能性が低いね。ゴロ助の精神だけが未来に来たのが、肉体が時間軸に固定されている証拠だ。精神だけが、時間軸を超越できるが、肉体は、時間を超越できない。つまり私の作った『タイムマシンのもの』では、100年後の未来に行くことも、100年過去に遡ることも出来ない」

「だから俺が過去に戻れば、この1年間、俺に関わった人間は、まったく違う人生を歩むことになり、存在そのものが抹消される・・・」

「べつに消えてなくなるわけじゃない、私たちの精神だけが1年間巻き戻されるだけだ」

「けれど、エビちゃんが毎日EMSで鍛えてくれた腹筋もなかったことになる・・・毎日、俺の看病してくれた記録（存在）は、なくなっちゃうんだよね？」

「・・・まあ、あまり楽しい思い出でもなかったし、ゴロ助と無関係な人間にとつては、ほとんど今と同じ歴史を歩むことになるだろう・・・あまり気にするな」

「気にするよ！ ドリルや花クジラは、まだ一度も顔を見せてないけれど、俺の判断を鈍らせないように、わざと会わずにいるんだろう？ タイムスリップ前に面識のなかった、エビちゃんが俺に接触してるのは、今日1日だけのクラスメイトなら、俺の判断が鈍らせることがないと思ってるんだ！ 今日会ったタミちゃん先輩は、俺が過去に戻ったら、もう存在しない未来になっちゃうんだ。過去に戻ったら、単なるクラスメイトのタミちゃんだ！ 俺一人のエゴのために、大切な仲間が築いてきた1年間の思い出を砂塵に帰すつもりはないのだ！」

俺は、なんか格好の良いことを言っている気がした。エビちゃん、相変わらず元宮崎県知事のようにメガネの上から俺を覗いているが、その目に見下した雰囲気が消えていた。俺は、きつと格好が良い先輩に映っているはずだ。

『いいや、ちよつと意外な気がして』

「つて、ヘアピンの電源いつ入れたんだよおおお！」

「ゴロ助、ちよつと見直した・・・」

「それに・・・俺が過去に戻ったら、エビちゃん入会を断るんだろっ？」

「うん、絶対に断る」

「こんな面白道具を作り出す逸材を、俺が手放すと思ったか？」

「私の発明品が面白いのか？」

「じつに面白い！ がッ、『タイムマシンのなもの』は、却下だ！」

俺は、これでもかとヘルメットを壁に叩きつけた。これでもかだ

！俺は、馬鹿じゃなーーーーーい！俺は、馬鹿じゃなーーーー

「……い！ その様子を呆然と見ていたエビちゃんだったが、砕け散るヘルメットのドガシャーン！ って音を聞いた途端に、立ち上がって俺の頬をグーでパンチした。」

「貴様は、大馬鹿もんだああああああ！ これ作るのに、どれだけ苦労したと思ってるんだあああああ！」

え、エビちゃん……それで良いんだよ、本当に良い右ストレートだよ、それでこそ超常科学研究会の正式メンバーだ。俺は、研究室のドアまで投げ飛ばされたが、誰かに背中を支えてもらって、ドアへの直撃を免れた。この大きな手には、見覚えがあるぞ……そして、その様子を撮影する男にも……。

「花クジラあああ、ドリルううう」

「ゴロちゃんお帰り」

花束を用意していたタミちゃん先輩は、それを手渡すと男3人が抱き合つて、再会を祝うのを見て拍手をした。パチパチ、パチパチ、パチパチ、パチパチ。

「おめでとう、おめでとう」

「ありがとう、ありがとう」

父に有難う、母にさようなら、全ての……いや、これ以上は、感動の再会に水を差しそうだから止めておこう。

「ゴロちゃんが俺たちの未来を奪わないと、信じていたぜ」

「そうか、そうだよな」

花クジラは、泣きながら俺の手を握った。

「俺だつて信じてたぜ」

「そうか、ドリルも信じてくれたか」

ビデオカメラで撮影していたドリルは、親指を突き立てた。

「ああ俺たち二人は、ゴロちゃんが、この世界に残ると信じていた……タミちゃんは、信じ切れていなかったけどな」

ナヌ！ タミちゃんが信じていなかったとな？ なるほど、だから俺に名残惜しくさせるために、あんなに優しく接していたのか……タミちゃん、恐るべし。でも、大好きだから許す、てへっ（笑）。

そう言えば、『タイムマシンのなもの（可逆式）』なんて作ったエビちゃんは、どんな気持ちだったの？

『責任感だ』

なるほど、俺への責任感でしたか。

「しかし、みんな大袈裟だな。俺にとっては、みんなと別れたのは、たった3日前のことなんだぜ」

しまった！俺の一言に波が引くように感動が消えた。タミちゃん先輩は、ビリヤードのキューを片手に、鼻歌混じりに研究室を出て行った。花クジラとドリルは「あっ、塾の時間だわ」とぬかして出て行った。

「どうしよう?」

「新人歓迎会があるから、どうせブラフだぞ」

慌てる俺と対照的にエビちゃんは、冷静な判断をしていた。

「先輩方々お戻りください」

「ゴロ助が過去に戻れ・・・」

俺は、過去に戻るより、この愛すべき馬鹿たちと未来を生きようと思った。

おまけ【設定3】

> i32206 | 3708 <

おんただみよ
遠田多美代

透明人間的なもの 前篇

改めて研究室を見渡した俺は、設立から2年目（ゴロ助の感覚では1年目）に、校内で手に入れた専用部屋の感慨に浸っていた。俺が過去に戻って1年間の出来事がリセットされれば、脱会すると断言していたエビちゃんも、会長を引き受けた手前、しばらく退会しないだろう。

「これで新人生がやってくれば、会の存続も安泰だな」

塾の時間だと騒いでた花クジラとドリルは、エビちゃんの予想通り研究室を出て行って30分後に、お菓子とジュースを詰め込んだコンビニのビニール袋を持参して戻ってきた。

「新人歓迎会の食い物を調達してきたぞ」

「ずいぶんと買込んだが、資金の方は？」

「会長のポケットマネーだ」

なるほど、お金持ちの桜月院家とは、仲良くしておいて正解だ。

うまし棒と麩菓子と粉ジュースで、見た目の豪華さを演出した昨年の新人歓迎会とは、次元の違うクオリティではないか。俺は、歌舞伎揚げとペットボトルのジュースの並んだ机に、人数分の6脚の丸椅子を配置して、新人歓迎会の準備をしていた。

「ところで、タミちゃん先輩と主役の新人は、いつ来るのだ？」

「タミちゃんは、部活が終わってから途中参加するみたいだね」

花クジラは、エビちゃんが研究室に持ち込んだ冷蔵庫に、机に出したジュースを仕舞った。この研究室にある備品は、ほとんどが彼女から寄贈されたものだど、ドリルが教えてくれた。やはり持つべきは、友（金）である。

「相変わらずタミちゃん先輩は、研究会の活動がビリヤードの二の次になっているのか」

「いやいや最近、会長のおかげでビリヤード部より、研究会の活動を優先しているよ。まあ会長のおかげか、ゴロちゃんがいなかっ

たのか、じつは解らないけどね」

たった3日間（+1年間）会わなかっただけでドリルの奴は、嫌なことを言うようになった気がする。

「そ、それは、きつとエビちゃんのおかげだな、タミちゃん先輩は、不思議なことが大好きだから、面白道具を作れるエビちゃんのおかげだ」

エビちゃんは、照れくさそうにホワイトボードに『ようこそ超常科学研究会へ』と、大きな丸文字で書くと、機嫌良く花クジラと飾り付けを手伝った。彼女は、自分の発明品を褒められると弱いらしい。これは、良いことに気が付いた、いつか弱味に付け込んでやるう。

俺は、これから催される新人歓迎会の席順について、シュミレーションしていた。会のために置かれた長テーブルには、向き合った形で3対3で丸椅子を設置しており、会長であるエビちゃんは、ドアと反対側の一番奥に座ることになるだろう。そうならなければ「普通は、会長が上座だろう」と誘導するまでだ。

そして新人生で新人の女子は、会長と並びの席でドア側の一番手前の席に誘導する。この時点で女子と男子が向き合って座った場合、憧れのタミちゃん先輩が座る席は、中央しか残されていないはずだ。ここまでは、完璧にシュミレーションできる。

だが、それだけでは、タミちゃん先輩の隣の席に座るという野望達成に不完全だ。だから、最終的に「おいおい、お見合いじゃないんだから、男女交互に座ろうぜ」と決定打を提案する。これにより、男女混合の席順を作り出せば、中央の男女が入れ替わるって計画だ。

つまり俺が狙う席は、ドアから一番手前か奥の席！ここに真っ先に座ってしまえば、中央に座ったタミちゃん先輩の隣に座れる確率は、非常に高いポジションだと言える。この計画には、男二人も賛成するはずだ。なぜなら男女混合の席順ならば、一人がエビちゃんと、超可愛いと噂の新人生に挟まれて、両手に花でお食事が出るからだ。

俺が狙うのは、タミちゃん先輩の隣だけだ。奴らみたいに無計画な愚か者は、新人歓迎会だけの天下を楽しむがいいさ。俺が狙っている天下は、こんなところにはないのだ。アリとキリギリスは、最終的にアリが天下を取ると決まっているのだ。

しかし、このときドリルの奴らも新人歓迎会の席順をシュミレーションしているとは、気が付けなかった。エビちゃんと飾り付けをしていた花クジラは、俺のことをチラチラと覗き込むようにして、似たような席順を想定していた。だが、花クジラが狙っていたのは、タミちゃん先輩の隣ではなかった。

「俺が狙うのは、中央の席だ・・・ゴロちゃんの性格を考えれば、男女混合を提案するに決まっている。中央の席を確保してしまえば、俺の両隣が女子二人となる」

花クジラの狙いは、両手に花の中央だった。彼は、天井に折紙で作ったリボンと一緒に飾り付けている、エビちゃんのブラウスからブラジャーを盗み見ようと、かなり窮屈な格好で首を曲げていた。そして、そのような行為を目敏くみつける俺の視線を気にして、チラチラと見ていたのだ。

「やはり二人も、席順のことで策を練っているようだな（不敵な笑み）」

ドリルは、ビデオを三脚に乗せるふりをしながら、ニヤニヤとしている俺と、明らかに不信な態度で飾り付けている花クジラを撮影していた。このとき俺は、席順を想定しながら笑っていたわけだが、その視線の先が、脚立に登ったエビちゃんのハイソックスにあったのが不味かった。

「貴様たちの野望は、このテープと引き換えに終えるのだ。俺の決めた席順に従ってもらうぞ・・・この知将ドリル様には、お前たちのように偶然を気取った計画などいららないのだ」

切れ者ドリルは、エビちゃんを視漢する俺たち（俺は無実）を撮影して、新入生のルックスを確認してから、一番可愛い娘の隣に座ろうと企んでいたのだ。恐るべしドリル！

「タミちゃん先輩はともかく、新入生の登場が遅くないか？」

「新入生には、誰が声をかけたんだ？」

花クジラの問いかけに、ドリルが首を横に振ると、エビちゃんが手を挙げた。花クジラが「見えた！」と叫んで脚立から転がり落ちたが、彼女は「何が見えた？」と、気にする様子がなかった。

「歓迎会の用意が出来るまでは、図書室で待機しているようだぞ」

「図書室で待機？ 新入生は、文学少女なのか？」

「どうだろ？ 昔から本が好きで、大人しい娘だったが」

「エビちゃんと新入生は、お知り合いなのか」

「同じ施設で育ったからな・・・姉妹みたいな関係だ」

エビちゃんの表情が少し曇った。そういえば彼女は、桜月院家の実子じゃないと言っていたが、何やら複雑な事情でもあるのだろうか、それを問質するのは、まだ関係が浅い気がした。

「そ、そうか、新入生は、エビちゃんの妹みたいな奴か」

「どうせユリを見れば、先輩たちも気が付くと思うが、彼女は、星歓高校の理事長の孫娘で、昨年歌手デビューした星野ユリだぞ」

星野ユリ？ そんな歌手などいなかった気がするが、俺以外の二人が「なんだと！」と驚いていたので、それなりに有名人らしい。

「ほ、星野ユリちゃんが理事長の孫娘だとは、聞いていたが、まさか入学していたとは、知らなかった」

噂好きで早耳のドリルが、ことしの新入生に有名人がいたこと知らないなんて、そんなことあるのだろうか？ 初耳だと悔しがるドリルに、涎を垂らしながら喜ぶ花クジラ。一年間の記憶がない俺には、どんな可愛い娘か解らないが、二人の言動から察するに、超可愛い娘なのだろう。

「ユリは、歌っているときと普段のギャップがあるから、みんな気が付かなかったのだろう」

「いやいや、星野ユリが校内にいたら、絶対に気が付くよ！ あのブルーの髪、天使のような可愛いルックス、それでいてメタル系バンドを率いたパワフルなボイス。キャップこそ彼女の最大の魅力じ

やないか！」

俺は、ドリルの説明を聞いても、よく解らなかつたので、新入生の話を聞いて、気が抜けたみたいな花クジラに説明を求めた。

「星野ユリは、今年の夏にデビューしたRRSロリロックスのボーカルで、可愛い姿と裏腹に、ロック魂溢れる歌声なんだ。メタル系バンドのボーカルなんだけど、愛らしいルックスや、メイド服を意識した衣装から、そっち系（音楽関係）では、イロモノ扱いされているらしいよ」

「で、そっち系（音楽関係）じゃない花クジラの意見は？」

「彼女は、イロモノ扱いできない」

「で、どっち系（趣向性）だ？」

「RRSの名前のおり、小悪魔系の妹キャラだな」
す、すばらしい展開だ。

我が会には、母性愛溢れるお姉さん天然系のタミちゃん先輩、長身メガネのツンデレ系（今のところデレてない）のエビちゃん、そして、新入生が妹系の星野ユリ。か、完璧じゃないか・・・こんな布陣が存在するとは、まるで小説の世界じゃないか！

しかも男性の布陣も、メガネで撮影好きのドリル、力士マンの花クジラ・・・つまり、この俺様が主人公ってわけだ。あと我が会に欲しい人材は、ネコ耳で語尾が「にゃん」、ショートカットで一人称が「ボク」、純情ウブっ娘が揃えば、色んな意味でコンプリートだ。

「そ、そうか、妹系なのか・・・まあ俺は、タミちゃん先輩一筋だからな」

だが、期待せずにいられない俺。

「ゴロちゃんは、星野ユリを見たことないから、そんな強がっているんだ」

「確かに、今年の夏にデビューしたのなら、俺が知らなくても無理はない」

しかし、新入生がアイドルなのは、ちょっと計算外だった。どう

せならタミちゃん先輩と、新入生の真ん中で盛り上がりたい。ここにきて席順のシュミレーションを立て直すのは、不安だがトライするしかあるまい。そんな俺の焦りを感じ取ったのか、花クジラが密約を申し込んできた。

「ゴロちゃんには、タミちゃんがいるだろ・・・悔しいが俺には、ゴロちゃんのように、幼馴染という加点が無いので彼女のことは、とつくの昔に諦めていたんだ」

花クジラは、幼馴染が唯一の加点だと考えていたのか、俺の加点は、もつと沢山あるぜ。

「それに会長とドリルには、メガネキャラと言う覆し難い共通点がある」

俺は、自宅でコンタクトを外して、メガネを掛けているのだが・・・まあ、花クジラの話の続きを聞こうじゃないか。

「俺には、たつた今、決まったことなんだが、アイドルオタクという取り柄しかない・・・」

初耳だ。

「今後、タミちゃんとのこと、全力でサポートしてやる代わりに、新人歓迎会の席順では、星野ユリの隣に座れるように手配してくれなるほど、悪くない取引だ。しかし、こんなときトリッキーな動きをするドリルが、どう動いてくるのか。まずは、ドリルの動向を確認しよう、ドリルがメガネ仲間エリちゃんを好いていれば、問題がないのだが・・・ドリルは、俺たち二人が密談をしている姿を見て不敵に笑った。

「や、奴は、何かを狙っているぞ」

ドリルは、ビデオカメラからテープを取り出すと、俺たちの前にやってきた。

「お二人さんの密談は、どうせ席順のことだろう？」

「やはり、ドリルもか・・・で、お前は、どうしたいんだ？」

「ドア側、一番手前角の席をよこせ・・・隣は、タミちゃん、前の席は、星野ユリだ」

うん？ ドリルの意図が解らない。てっきりアイドルの星野ユリの隣を狙っていると思っただが、なぜ前の席なんだ？ それなら問題ない、一番手前からドリル、タミちゃん先輩、俺、反対の一番手前から星野ユリ、花クジラ、エビちゃん。本来なら、俺も星野ユリというアイドルの近くに座りたかったが、時間もなくなってきたので、ドリルの提案で丸く収めよう。

「ドリルの魂胆が解ったぞ！」

花クジラは、悔しがるように言った。

「こいつは、会長から一番離れた席で、なおかつ星野ユリと話しやすい正面に座る気だ！」

なるほど、初対面の星野ユリとは、隣よりも正面の方が話しやすい。よく考えれば、アイドル歌手の隣に座っても、話題がなければ自爆する可能性が高い。さすが知将ドリル、考えることが斜め上だ。しかし、なんでエビちゃんから離れたいんだ？

「まてまて、ドリルの提案した席順には、俺も同意する」

「ならば、会長とタミちゃんを交換してくれ」

な、なんだと花クジラ、それでは、ドリルと俺の間にエビちゃんが座ることになり、俺の正面にタミちゃん先輩になる。初対面なら正面の方が有利だが、気心知れた相手なら隣の方が、ボディタッチのチャンスも生まれる。それに、エビちゃんが至近距離にいるのは、『テレパシー的なもの』で心を読まれる危険もある。

「会長の隣に座りたくない」

ドリルは、頑なまでにエビちゃんの隣の席を拒んだ。ドリルは、俺が意識を失っていた1年間で、エビちゃんに愛の告白でもしてフラれたのか？ ここは協定を組もうじゃないか、俺たちの間には、タミちゃんだ。ドリルの提案でいこう。

「俺だって、会長の隣に座りたくない」

花クジラもエビちゃんを否定し始めた、誰もがエビちゃんの隣を拒んだため、議題は『誰が会長の隣に座るのか？』に変質した。どんだけ嫌われてるんだ、エビちゃん！

「俺は、お前たちがエロい目で、会長を視漢していたビデオを持っている」

ドリルは、花クジラが会長のブラジャーを覗こうと必死だった様子をビデオに収めていた。

「き、きたないぞ」

「俺は、べつにエビちゃんを見てないぞ？」

「ふふふ、ゴロちゃんがニヤニヤしながら、会長の足を見ていた証拠がここにある」

「な、なんだと、それは誤解だ」

「マスコミだって、多かれ少なかれ捏造してんだよ」

「おのれ、マスコミ」

とは、言ったものの、ドリル提案に賛成した俺は、べつにドリル案で構わない。

ちなみに俺たちは、興奮していたが、飾り付けが終わって一人で片付けているエビちゃんに、聞えない小さな声で討論していた。

「あれ、まだ新入生きてないの？」

タミちゃん先輩が戻ってきて「エビちゃんだけに片付けさせてるの？」と、片付け始めたので、三人も席順の談合を中止して、片付けを手伝わざるを得なかった。

俺は、片付けながら卑劣なドリルのことを考えていた。

『なるほど、じつに下らない』

頭の中でエビちゃんの声がした、片付けと考え事で、彼女が顔を寄せていたことに気が付かなかった。彼女の『二重かきかつこ』にも慣れたものだったが、読まれた内容が不味かった。

「ドリル先輩、ビデオテープ貸してください」

エビちゃんは、花クジラの視漢（痴漢）行為の証拠テープを無造作に引つ張りだすと、ゴミ箱に放り込んだ。

「席順は、フイーリングカップル方式で！」

エビちゃんの一言で、俺たちの男女混合方式が却下された。

「す、すまんな、エビちゃんが思考共有化範囲に近付いたことに、

気が付かなかった」

二人に詫びると、二人とも「気にするな」と慰めてくれた。

俺は、机の上に置かれたラジオペンチを見ると、薄ら血の滲んだ跡があった。俺は、二人がエビちゃん隣の隣を拒んだ理由^{わけ}を理解した。

『そうか、二人ともチャレンジしたのか・・・』

『むちゃくちゃ深く刺さってるから抜けないぜ』

俺たち三人は、顔を近づけて慰め合った。

おまけ【設定4】

>i32323<rubby><rb>3708<

星野</rb>><rp>>)</rp>><rt>>ほしの</rt>><

rp>>)</rp>></rubby>>HURRRSVer

透明人間的なもの 中篇

「さて、準備も整ったし、ユリを呼び出すか」

エビちゃんは、携帯電話を取り出すと図書室で待っている星野ユリに電話を掛けようとした。

「まてまて、図書室にいるの奴を電話で呼び出すな」

俺は、エビちゃんの手を抑えると、誰かが呼びに行くように言った。俺には、昨年夏にデビューした新入生の顔が解らないが、ドリルたちなら知っているはずだ。アイドルとお近づきになりたい彼らには、ここでポイントを稼いでおう。

「ならば、俺が迎えに行こう」

花クジラは、星野ユリを迎えに行こうとすると、ドリルがビデオを手に持った。

「俺は、その様子を撮影しよう」

案の定、男二人は、連れだって星野ユリを出迎えに行った。

いま研究室には、紙皿を並べているタミちゃん先輩と、かつたるそうに自分の肩を揉んでいる寿司ネタ女しかない。

「エビちゃん、申し訳ないのだが、我々の研究会にも名前ばかり顧問がいてね・・・」

「ウチの会にも、そんな奴がいたのか？」

「古文の小池勉蔵さんだ」

「ラーメンばかり食っている先生か？」

「いいや、教師のくせに学ランと下駄で徘徊する方だ」

「それで顧問とやらに、何か用があるのか？」

「新人歓迎会をやると、使用許可をもらってこい」

「ゴロ助がもらってきてよ」

「いいや、教師と生徒の橋渡しは、会長の仕事だ！」

聊か強引ではあったが、エビちゃんを追い出してタミちゃん先輩と二人つきりになれば良いのだ。

「午後8時までの使用許可なら、さつき申請しておいたよ」

さすがタミちゃん先輩は、どんな時でも完璧だ。がッ、こんなときは、「午前8時に間違えた〜」とか、「部屋番号間違えた〜」など、いつものように天然ボケを發揮して頂きたい。

「そ、そうか、ならば無問題もつまんたいだな」

エビちゃんは、思考共有化圏外にいたにも関わらず、必死な俺の心を察してくれたのか、ドアの方へと歩き出した。

「私、ちよつとトイレ行ってくる」

いや、単なる俺の思い過ぎだったようだ。

「おう、ゆつくり、しゃがめよ」

俺の余計な気遣いに、エビちゃんが真っ赤な顔して飛び出して行った。女の子に「ゆつくり、しゃがめよ」は、要らぬお世話だった。「ゴロちゃんは、変なこと言うのね？ 今どきは、洋式トイレだから、リバーズ（吐く）時しかトイレにしゃがまないよ」

さすがタミちゃん先輩は、俺のツボを心得た切り返した。昔から変わらないツツコセンスには、心を癒される。彼女との他愛もないやり取りで、小学校の遠足を思い出した。あれは、俺がバスに揺られて、吐き気もよおしたときだった……。

「ゴロちゃん大丈夫？」

「うん、ちよつと気持ち悪い」

「先生に、バス止めてって、お願いしてこようか？」

「いいや、もう少しだから我慢する……」

「気持ち悪くなったの恥かしいの？」

「……うん」

「わかった！」

小学生だったタミちゃん先輩は、バスの中で立ち上がると、大きな声で「先生！ ゴロちゃんがウコしたいって」と叫んだ。きつと彼女の中では、『リバーズ』より『人間の生理現象』の方が恥ずかしくないと、気を使ってくれたのだ。

「君のおかげでゲマンと呼ばれずに済んだよ（小学校のアダ名は

ウ チマン)」

「え、なんの話？」

「いや、ちょっと小学校の遠足のことを思い出してさ」

「ああ、ウ コ我慢してた話のことか、懐かしいね。あっ、ゴロちゃんもウ コなら、遠慮しないで行ってきていいよ。ただし、エビちゃんのトイレは、覗くんじゃないぞ（笑）」

「出ない、出ない（笑）。それに俺は、ウ コ我慢してないから、我慢してたのゲ だから、ウ コは、ブラフだからね」

みんなの前で話せない伏字だらけの気さくな会話、これが幼馴染の良い所だ。こんな思い出を一つ一つ積み重ねて、君との距離を縮めてきたんだね。小学校の友達は、君のことを「スカト口女優」なんて呼んで、二人でお似合いのカップルだと冷やかされたりしたけど、気が付いたら君のこと好きになっていたよ。

「みんな、なかなか帰ってこないね」

「アイドル新入生に声をかけられず、迷っているのかもしれないね」

「二人きりで話すのは、ずいぶん久しぶりだな・・・ねえ、入院しているとき、私たちの声とか聞えてた？」

「いや、気が付いたら1年後だったよ。3日前（+1年）の新人歓迎会から記憶は、全くないんだ」

「それは、少し残念だな。私たち交代で、枕もとで教科書とか読み聞かせていたのに、睡眠学習効果ゼロだったのか」

「えっ、そんなことしてたの？」

「うん、ドリルたちは、色々と悩み事なんか打ち明けたり、まるでゴロちゃんが生きてる（実際に生きてる）みたいに、色々と話しかけていたよ」

「なんの悩み事だったのかな？」

「うーん、よく知らないけれど、こいぼな恋話じゃないのかな？ ドリルと花クジラは、エビちゃんのこと、色々悩んでいたみたいだから」

たぶん恋愛相談じゃなくて、頭に埋め込まれたシャーペンの芯について、愚痴を言ってたと思われる。俺が意識不明だったとき、ド

リルたちも苦労していたのだな。

「そうか、けど嬉しいな、アイツらが俺のことを見捨てずに1年間もいたなんて」

「わ、私も見捨ててないからね・・・ゴロちゃん、本当に覚えてないの？」

な、なんだ、その憂いに満ちた眼差しは、寝ている俺に何を話したんだ？ いいや何かしたのか？ それも高校生男子が羨ましがするような、寝顔にチュー（接吻、口づけ、キス、キッス、kissの意）的な何かをしたのか。

「そ、その、俺に何をしたのかな？」

「うーん、恥かしいんだけど、写真撮ってあるんだ・・・見る？」

「み、見たい！」

タミちゃん先輩は、私物の置かれたロッカーから一冊のアルバムを取り出した。表紙には『ゴロちゃんとの思い出』と書かれていた。ゴロちゃん『の』思い出ではなく、ゴロちゃん『との』思い出と、2人の思い出アルバムの様な表現に、俺の心臓はトキメキMAXだ。『ゴロちゃんの寝顔を見ていて、悪戯しちゃったんだ』

「おう、俺は、悪戯されちゃったのか（笑）」

ワクワクしながら開いたアルバムの1ページ目、寝ている俺の額に書かれていたのは、『肉』の一字だった。

「懐かしい、これ初日に撮った写真だよ」

「こ、これキン マンだね・・・」

気を取り直して、次のページの2枚目と3枚目の写真を見ると、額に横に書かれた三本川と、鼻の下に書かれたチヨビ髭。

「これは、エビちゃんが書いた奴だ」

「そ、そうかバカボン パパだね・・・」

「うん」

俺は、俺たちのアルバムを閉じて「あとで、ゆっくり見るよ（苦笑い）」と、タミちゃん先輩にアルバムを返した。

「早く最後のページ見てよ」

「いや、見なくても想像が出来るし、これ以上の辱めは、御免だよ」

「・・・そうか、ごめんね」

「謝ることないよ、俺の器が小さすぎるんだ」

どうして、こんなことになったのだ？ せつかく2人きりになれたのに、こんな気まずい空気になったのは、きっと寝顔に悪戯されたことに、腹を立てた俺のせいだ。自分勝手に期待して、自分勝手に落胆する・・・俺は、いつだって自分勝手な男なんだ。

「エビちゃんがね、ゴロちゃんの精神は、一足先に1年後の未来に飛ばされたって、病院に寝ているのは、ゴロちゃんの魂の抜け殻だって。だから、何を話しかけても無駄だって言っていたのよ」

「俺は、ヘルメットをかぶった瞬間、光り輝くトンネルを抜けて、気が付いたら1年後の病院にいた」

「私たちを置いてけ堀にして、1人だけ未来（1年後）の世界に行くなんて、悔しいじゃない」

「タミちゃん・・・」

そうか俺は、タミちゃん先輩を一人ぼっちにして、自分勝手に未来の世界（現在の世界）に時間旅行をしていたのか。なのに俺は、目が覚めたら上級生になつていた彼女に、嫉妬までしていた。むしろ、俺が置いてけ堀にされた気がしていた。

「ゴロちゃんに、ちょっとくらい悪戯しても良いじゃない？」

「わ、わかつたよ・・・最後の1枚を見せてくれ」

俺は、涙目のタミちゃん先輩に弱かった。

アルバムの最後のページには、上半身裸の俺の乳首を、笑顔のタミちゃん先輩とエビちゃんが指で隠していた。傍らの彼女たちの笑顔と、見事に割れた腹筋が、なんとも男らしい。

「エビちゃんがね、精神が抜けていても肉体的に鍛えることが可能だから、ゴロちゃんとの思い出のために、2人で腹筋を鍛えようって頑張ったの」

「俺の腹筋は、君たちとの思い出か・・・」

「うん」

「このアルバムもらってもいいか？」

「いいよ（はにかんだ笑い）」

俺は、こんな恥ずかしいアルバムを焼却処分するため、タミちゃん先輩から受け取ると鞆に仕舞った。

「そうだ！ わ、私もウ コさんしてくるね（満面の笑み）」

タミちゃん先輩は、相変わらず人間の生理現象を恥ずかしいと思わない天然キャラだ。

彼女が研究室を出ていくと俺は、喉の渇きを感じて、冷蔵庫から飲みかけのペットボトルを見つけた。歓迎会が始まる前に、人数分用意された真新しいペットボトルを開封するのは、忍びなかったの
で、飲みかけのペットボトルをコップに開けて飲むことにした。

「ぶは、誰のジュースか知らんが、なんとも言えない甘酸っぱいジュースだった」

そういえば昼飯も食わずに、気絶していたので、乾いた体と空きっ腹に、あつという間に液体が浸み込んだようだ。

「お、おい！ そのジュースは？」

トイレから戻ってきたエビちゃんは、俺が手に持っていた空のペ
ットボトルを指差して、慌てた様子で言った。

「これ、エビちゃんのジュースだったのか？ 喉が渴いてて勝手に飲んじまった」

「やはり私の作ったジュースか・・・それは、単なるジュースではないぞ」

「ま、まさか、これもエビアン面白道具か？」

うん？ エビちゃんの服装がトイレに行く前と、なんだか違って
いる。学校指定の山吹色のベストを着ていない・・・いや着ている
が、全体的に透き通ってシースルーみたいな感じだ。

「それは、『透明人間的なもの』ジュースだよ」

「何！ 透明人間になるジュースなのか！」

そういえば、俺のワイシャツもだんだん透けて、乳首や腹筋が透

けて見えているではないか！ このジュースを飲むと、透明人間になるという面白道具に違いなかった。

「こ、こっちを見るな！」

エビちゃんは、慌ててホワイトボードの後ろ側に隠れると、俺に目を塞ぐように言った。

「どういう意味だ？ 見るなど言われて、見ない馬鹿がいるものか！」

ホワイトボードの下から覗いていたエビちゃんのスカートやハイソックスは、消えかかって素足があらわになった。肝心な下着は・・クソ、長身女めく。ホワイトボードからすらりと伸びた脚と、こちらの様子を伺うために出した上半身は、衣服はもちろんメガネすら付けていなかった。

「いいか、もう気付いてしまったかもしれないが、それは透明人間になるジュースではない・・人間を透明にするジュースだぞ！」

「つまり透明人間になれるジュースだな」

「違う！ 飲んだ人間には、全ての人間が透明人間に見える（見えなくなる）ジュースだ！」

ずいぶんと、ややこしい透明人間になるジュースだな。

「いいや、今のところ人間は、見えている・・見えなくなったのは、服だけだ」

「それは、実際に衣類を透過しているわけではない、人間も透明になるわけではない、人間（衣類も含む）の存在を認識できなくなるジュースなんだぞ」

「し、しかし服だけが消えるのは、どういった理屈なんだ？」

「その現象は、実在している物（人間）を消すことに脳が抵抗して外輪部から徐々に存在を消していく過程^{プロセス}だぞ。だから実際には、衣類も透過しておらず、お前の作り出した幻覚（実際には外界からの入力がない感覚を体験してしまう症状）だぞ」

な、なんですと、どうりで俺の衣類も透けて、素っ裸になっているわけだが、大事なところが実物より大きい・・脳内補完してい

るので、理想のボディラインを作っているわけか？

「そ、そうか、ならば俺が今見ている、エビちゃんの裸は、俺の幻覚ということだな・・・ならば、恥かしがらずに、その裸体を晒すべきだ！」

「ゴロ助のようなスケベに、私の裸を妄想させてたまるか！」

「俺は、純情ボーイだから、貴様の裸体なぞ妄想せんぞ！ 自主規制がかかって全身が黒塗りだ」

「先ほど“俺が今見ている”と、ゲロツたばかりだろうが！」

「俺は、ゲロなどせんと言っておろうが！」

おつ、俺自身は、完全な素っ裸になつたぞ、ホワイトボードの向こう側では、素っ裸のエビちゃんが拝めるってわけだな・・・実力行使するか？ いや、待てよ・・・良いことを思い付いたぞ。

「お、おい、エビちゃんの隠れているホワイトボード・・・ホワイトボードも透けてきたぞ」

「な、なんだと！」

慌てたエビちゃんが転がるように、人体実験用のベッド潜り込んだが、その刹那に見えた（単なる妄想）気がする。なかなか良いボディラインだったが、実物よりもナイスボディだった気がする。高校生男子の妄想力をなめんなよ。

「なんだか、その布団も透けてきたような・・・」

「もう騙されないぞ・・・どうせ、ここ以上の退避先がないからな」
「チツ」

俺は、舌打ちをすると自分の手が透けてきた。『透明人間のものの』の効果は、徐々に人間本体の存在を消し始めたようだ。

「エビちゃん、俺の体が透けはじめたのだが、他の奴らにも、俺が透けて見えるのか？」

「いいや、お前自身の脳内だけの問題だからな、私には、いつもと変わらぬゴロ助だぞ・・・ようやく本体まで到達したか」

つまり俺だけ人間が認識できなくなるだけで、皆には、俺が見えている。これは、全くツマラン現象だ。衣類の認識だけが消える状

態をキープすれば、物凄く面白道具に違いないのに。

布団から顔だけ出したエビちゃんは、なんとなく透けている感じだが、まだ認識できていたものの、先ほど俺が「透けはじめた」と言ったせいで、気を許したのか布団で前を隠しつつも、上半身を起こしてきた。彼女の肩口から黒いブラジャーが透けていたが、どうせ俺の妄想なのだと思うと、それほどテンションが上がらなかった。「ただいま」

タミちゃん先輩は、無防備な姿でドアを開け放った！ ナイスだ多美代！ 一気にテンションがMAXだ！

「し、しまった！ 先輩、入ってくるな！」

エビちゃんがタミちゃん先輩に、慌てて廊下へ戻るように指示したが、ベッドに寝ているエビちゃんと、呆然と立ち尽くしている俺を見た彼女は、何を勘違いしたのか、両手で口を塞いだ。

「い、いつの間に2人は、そんな関係になったの？ 私がトイレに行ってる間に？」

「そんな一瞬で、こんな関係（どんな関係？）になるかよ（苦笑）」

「先輩！ とにかく胸と股を手で隠せ！」

「えっ？ こうですか？」

タミちゃん先輩は、右手で両胸、左手で股を隠すと、なぜか俺の脳内で足元に阿古屋貝あこやがいが現れて『ビーナスの誕生（ルネッサンス期イタリアの画家サンドロ・ボッティチェリ作品のテンペラ画）』になっちゃった。

「チツ、大事なところは、俺の妄想力不足かよ」

エビちゃんが時計を見上げたのを最後に、俺の視界から人間の存在が消えた。

「よし、そろそろ私たちが透明人間になった頃だな・・・」

ベットの布団に人の気配が無くなると、誰かが俺の頭をコツコツと叩いてきたが、誰が叩いたのか、俺に認識することが出来なかった。

「なるほど、この『透明人間的なもの』ジュースは、飲んだ人間以

外が透明人間になる効果があるのだな・・・じつに面白い発明品だ」
俺には、見えないが、発明品を褒められたエビちゃんが頬を赤らめて喜んでるに違いない。とにかく、彼女を褒めちぎって解毒剤をもらって、こんな状況から脱したい。

「凄い発明だと思うか？」

「うん、思うから、早く解毒剤をくれ」

「ごめん、それ効果が切れるまで治らない」

「効果は、どれくらい続くの？」

「うーん、全部飲んじゃったから・・・8時間くらいかな」

「深夜1時頃まで、みんなが透明人間に見える（見えない）のか」

エビちゃんから事情を聞かされたタミちゃん先輩は、俺の体をお触りしたい放題触ってから、いいなー、いいなーと俺の状況を羨ましがった。

「なんで、私に飲ませてくれなかったの？」

「私も実検中に飲んでみたのだが、副作用があるから封印してた発明品だぞ」

「どんな副作用なの？」

「それは・・・」

うん？、彼女たちの会話が聞こえなくなった。姿も見えないのに、内緒話なんてされたら、この研究室に一人ぼっちみたいで、寂しいじゃないか・・・。

「すみません、お嬢さんたち、無言になるの止めてくれますか？」

研究室のドアが開いたが、誰かが入ってきたのか、出て行ったのか、全く解らないので不安になった。

俺は、ドアの方に近付くとドアノブを回そうと手を突き出した。

「きゃっ」

うん？ 聞き覚えのない女の子の悲鳴が、下の方から聞こえた。

「ゴロちゃん・・・何してんだよ？」

ドリルの声でした。

「お、俺の星野ユリちゃんに、なんてことを（怒り）」

花クジラの怒りに震える声があった。がッ、俺には、何に怒っているのか、全く理解できなかった。俺は、ただドアノブを掴もうと、こうして手を前に伸ばしただけだ（プニ）。

「きやつ」

うん？ また下の方から聞き覚えのない声と、プニプニした感触があった。

「これは、ス、スクープですよ」

「ゆ、許せん！」

花クジラ（たぶん）の張り手を喰らった俺は、長テーブルの手前まで弾き飛ばされた・・・がッ、プニプニしたもののおかげで、テーブルへの直撃が避けられた。なんだ、さっきからプニプニしたものは？

「きやつ」

これは、聞き覚えのあるタミちゃん先輩の声だ。

「ゴロ助の掴んでいるのは、先輩のオツパイだ」

エビちゃん（たぶん）は、俺の肩を掴んで一番奥の席に座らせると、皆に事情を説明してくれた。

「つまり俺には、皆が見えていないので、何を触って怒られたのかわからないが、全て不可抗力である」

開き直ったように言った俺は、ドアノブ付近のプニプニした物体が、新入生アイドルの特定部位に違いないと思った。

「わかった、わかった、とりあえず座って大人しくしていれば、とくに問題なさそうだな」

ドリルの一言で、新人歓迎会（ついでに俺の復帰）をはじめることになった。しかし、先ほどまで、こだわっていた席順も、こうして透明人間との食事会では、まったく無意味なものになってしまった。

星野ユリは、どんな顔をしているのだろうか？ 先ほどのプニプニと声の位置から察するに、背の小さい娘だと解るのだが、声を発しないのでいないも同然だ。

「まずは、自己紹介をしないか？」

周りの反応が解らないので、恐る恐る切り出した。

「そうだね、まず新入生の星野ユリちゃんから、時計回りに自己紹介していいっつ」

タミちゃん先輩は、皆の席順の解らない俺に、時計回りを提案した・・・星野ユリが何処にいるのか解らないのに。

「ボク、星野ユリです・・・」

ボクっ娘がキターー!!!

テンションの上がった俺は、隣に座っているだろう、花クジラかドリルの肩を叩こうと左手を肩付近に振り下ろしたが、スカツとかわされて、次にプニっとした。プニプニは、不味いだろうと考える間もなく、右ストレートが俺を貫いた。

「ゴロスケベ・・・」

どうやら俺の隣には、監視のためにエビちゃんが座っていたようだ。

フィーリングカップル方式だって、言ってたじゃないですか？

おまけ【設定5】

>i32266<rubby><rb>3708<

星野</rb>><rp>>(</rp>><rt>>ほしの</rt>><rp>></ruby>>ユリ)皆には見えてる)

透明人間的なもの 後篇

新人歓迎会がはじまって自己紹介も終わった頃、どうにか席順が薄ボンヤリ理解できた。ドアから右側手前には、星野ユリ、エビちゃん、俺が座っており、ドアから左側（反対側）手前には、ドリル、花クジラ、タミちゃん先輩だ。

「タミちゃん先輩が時計回りに自己紹介を提案したのは、俺に席順を知らせるためだったのか」

「・・・」

と、俺が言っても何の反応も返ってこない・・・みんないるよね？

「先輩、ウインクしてもゴロ助には、伝わらないと思いますよ」

「そうだったね（笑）」

どうやら俺の言葉にタミちゃん先輩は、目線で返答していたらしいが、『透明人間的なもの』ジュースのおかげで、研究室にいる皆が透明人間（俺の脳内だけ）になってしまったので、全く伝わってこなかった。

「これでは、俺が一人でお菓子を食べているみたいだ・・・」

俺は、目の前に置かれた歌舞伎揚げを取ろうと手を伸ばすと、誰かの手に触れた。

「ご、ごめん・・・どなたさん？」

「あつ、俺だよ」

花クジラが返事をした。

花クジラとドリルは、先ほどから星野ユリを質問攻めにしており、俺の症状のことなど気にも留めていないようだ。

「しかし皆の姿が見えんのは、非常に不便だな」

「ゴロちゃんには、私がお菓子を食べるところが、どういふ風に見えているの？」

タミちゃん先輩が聞くので俺は、紙皿から歌舞伎揚げやお菓子が、ぷかぷかと皆の口元辺りまで飛んで行くと、無音でスウーと消えて

行く光景をじっくり観察した。

「口元に近付くと、そこから先の存在が希薄になる感じだな」

「じゃあ、これは？」

今度は、ペットボトルが空中に浮かぶと、やはり口元辺りで薄ぼんやりして、斜めになると完全に消えた。

「やはり口元で消えるね」

「身に付けた衣類と同じで、そこに人間が存在しないのであれば、そこに存在することがない物は、全て存在しなくなるのだぞ」

「ほほお、ならば乗り物は？」

「例外があるのだが、自動車やバイクは、まず間違いなく透明になるぞ」

「例えば電車は、見えるのか？ もしも見えないのであれば、帰宅するのに困難だ」

俺は、電車通学だから深夜1時（効果切れ）まで電車に乗れないのであれば、自力で帰宅することが困難だ。しかし、それを口実に同じ最寄駅のタミちゃん先輩に、手を繋いで誘導してもらおう手もあるのだ。俺にすれば、どちらに転んでも確認しておきたいことだ。

「電車やバスなど、ある程度の大きさのあるものは、認識を拒むことが難しいからな・・・たぶん見えるんじゃないか？」

「たぶん？ エビちゃんは、実検中にジュースを飲んだとき、試してみなかったのか？」

「車が見えないのに外に出るのは、危険だから試さなかったぞ」

なるほど、確かに車が見えないのに外出するのは、大いに危険なことだろう。

「俺が帰宅するときは、誰かに送ってもらわねば、危険と言うことだな」

つまり、帰宅方向が同じタミちゃん先輩は、ここで名乗り出でくれるはずだ・・・名乗り出でくれるはずだ・・・名乗り出でくれな

い。
「・・・すいません、無視しないでもらえますか？」

「あつ、ごめんね、星野さんの話を聞いていて、ゴロちゃんの話聞いてなかった(汗)」

みんなの姿が見えないと言うのは、じつに不便で仕方がない。

「エビちゃん、ちょっと提案があるのですが、席を替わってもらえないでしょうか？」

「構わないけれど、ゴロ助は、ユリの隣に座りたいのか？」

「いいや、会話の中心にいたいので・・・」

「面倒な奴だな」

俺は、エビちゃんが席を引いたので、変わってくれと思って席を移動した。

おや？ 俺のお尻の下がフニフニしてるぞ？ それに丸椅子には、背もたれなんて無かった気がしたが・・・背中にプニプニしたものが？

「なんだ、エビちゃんまだ座っていたのか？」

「だ、誰が席を譲ってやると言った」

どうやら俺は、エビちゃんの膝の上に腰かけてしまったようだ。

彼女は、席を引いただけで俺に席を譲る気が無かったようだ。

「お、お兄ちゃん、ごめんなさい。ボクは、エビアンの隣の席が良いんだぞ」

「そ、そうか、すまないな星野さん・・・俺は、エビちゃんの膝の上でも構わないのだが」

初対面（俺は未対面）の俺に、お兄ちゃんだと！ さすが芸能人だ、ちゃんと組織の序列わかまを弁えているようだ。新人芸人が先輩芸人のことを「兄さん、兄さん」って親しみを込めて呼ぶやつだな。ちよつと違う気もするが。

「膝の上で構わないとか、どういう神経してるのだ？ 真ん中に座りたければ、花クジラ先輩と席を替わってもらえ」

エビちゃんが前に突き飛ばしたので俺は、つんのめる様に長テールに両手を付いた。仕方がないので、自分のペットボトルを持つと、反対側の席に移動した。

「花クジラ、話を聞いていたと思うが、席を替わってくれ」

「嫌だ、この席は譲れない・・・お前の席に移ったら、星野ユリから遠ざかる」

「俺は、星野さんに興味がない。けして、お前を裏切る真似はしないぞ」

この席は、話に参加しやすい中央の席であり、タミちゃん先輩の隣の席でもある。不可抗力（見えない）という武器を手に、隣の彼女をお触りするチャンスがある席だ。

「どうだろうな、お前は、彼女の胸をもみしだしている」

「あれは、不可抗力だ。ドアノブ付近に胸があるって、どんだけちびっ子なんだよ！」

「ボ、ボクは、まだ成長期前なんだぞ（泣）」

し、仕舞った、見えていないが本人の前で俺は、なんて失礼なことを言ってしまったのだ。

「お前は、女の子に胸の話をするなんて最低な奴だな」

花クジラの一言に、みんなが軽蔑の眼差しを向けたと思うと、み、見えない視線が痛い（矛盾）。

「まてまて俺は、星野さんの胸の話をしていない、彼女の身長の話をしていたのだ！」

「だから、ボクは、まだ成長期前なんだぞ（泣）」

「女の子の胸をもみしだくし、エビちゃんの膝の上に座る・・・今度は、見たこともない星野ユリの容姿にまで文句を付けるとは、本当に最低な奴だな！」

花クジラの奴は、俺を変態扱いしてまで、中央の席を確保したいのか、1年ぶりに再会（都合の良い時だけ1年間を強調）したと言うのに、親友であるはずの俺に席を譲らないつもりか。ならば、名前を書かれると死んでしまうノートを手に入れたら、『大勢の女子生徒に囲まれて、犯人はヤス、犯人はヤス、犯人はヤス、と3回唱えると、服を脱いで凍死する』と書き記そう。どんなに捜査しても殺された本人が『犯人はヤス』と言っている以上、この俺に容疑が

向くことがない。

「わかった・・・ここは、俺が全面的に降参しよう」

俺は、ベッドに潜り込むと「透明人間の皆さんで、引き続きお楽しみください」と不貞腐れて、横になった。どうせ、見えないなら近くにいっても意味がないので、寝転がりながら会話に参加してやる。「では、ゴロちゃんのお言葉に甘えて、私たちだけで会話を楽しみましょう」

タミちゃん先輩は、俺の心の痛みを察してくれない・・・俺の心がチクチク（切ない）するし、メラメラ（復讐心）するよ。不貞腐れているが、会話する権利まで放棄してないって。

俺が席から抜けると皆は、仕切り直しと言わんばかりに、新入生の星野ユリの話題で盛り上がった。

「星野さんは、RRSロリロックスのボーカルなんでしょう？ 凄いいね、こんなに小さいのに」

「ユリは、小さくても力持ちなんだぞ」
タミちゃん先輩やエビちゃんが、身長の高さを話題にするのは、なぜか許容されるようだ。

「想像よりも大人しい娘なんで、びっくりしたよ」

「うんうん、メタルクイーンって呼ばれてるのが、ウソみたいに可愛いね」

「ユリは、ステージで興奮すると別人みたいだぞ」

ドリルや花クジラは、完全に舞い上がっているみたいで、先ほどから可愛いを連呼している。そして、星野ユリへの質問は、全てエビちゃんが答えてしまって、ぜんぜんボクっ娘の声が聞けないのは、なんともさびしい。

「エビちゃん、少し自重しろ、星野さんに話させてやれ」

「うん、気にしないでお兄ちゃん。ボクは、あまり話すが、得意じゃないんだ・・・ぞ」

星野ユリが『ぞ』と語尾に付けるのは、たぶんエビちゃんの真似をしていると思われる。それほど、彼女のことを慕っているのだろ

う。

「おい、せっかく語尾に特徴を付けるのなら『にゃん』とか『わん』とか『ゲソ』みたいに、もっと特徴のある言葉にしろよ。エビちゃんの真似して『ぞ』キャラは、2人もいらん」

「ゴロ助、うるさい黙るカニ」

「そこは、うるさい黙るエビー！」

「ゴロちゃん、うるさい黙るタミ」

「タミ？　なんで急にキャラ立ててきたの？」

「うるさいでござす」

「ごわすって　ごわすって、誰だか解るけどね」

「黙るぞます」

「ぞますキャラじゃないけど、ドリル、ドリルだよね」

「黙るでござるよ、ニンニン」

「ニンニン？　誰？　誰か知らない奴がいるよ」

「お兄ちゃん、静かにしてにゃん」

「にゃん？　星野さん？　星野さんは、これから語尾『にゃん』でいいの？」

「ごめんだわん」

「わん、わんも捨てがた〜い！」

誰かがハリセンのようなもので、俺の後頭部を殴ったので、正気に戻ることが出来た。

「最初の頃は、面白かったが、長く続けるとツマラなくなるな・・・」

「

「遊んでやったのだから、少し大人しくしている」

エビちゃんに諭されると俺は、皆のいる方と反対向きになり、ベツドの壁側を睨み付けた。再びの不貞腐れポーズだ。「そんな奴、もうほっておけよ」と、ドリルの暖かい言葉に俺は、涙が出そうになった。

「お兄ちゃん、ごめんね・・・カァー」

な、なに、カァーって・・・俺は、まだ見ぬ新入生の星野さんの

ことが、ほんの少しだけ好きになりかけた。どんな娘なんだろう、背が低くて、力持ち（パワフルボイス）、俺のことをお兄ちゃん（年上の男性は全員）って呼んでくれる、ボクっ娘……。

俺は、目の前のコンクリートの壁に、まだ見ぬ星野ユリの特徴を書き留めた。

「星野さんの帽子、ぴよこぴよこした角が2本付いてて可愛いね」「うん、これエビアンに作ってもらった帽子なんだ」

> i 3 2 4 3 4 — 3 7 0 8 <

星野ユリは、角が2本生えた帽子をかぶっていると……メモメモ

「歌っているとき長髪だよね？ 図書館で見たときショートだから解らなかったよ」

「あれは、カツラだよ」

> i 3 2 4 3 5 — 3 7 0 8 <

星野ユリは、短髪のボクっ娘キャラなのか……メモメモ

「鼻がツンとしてて、可愛いよね」

「そ、そうかな（照れ）、ボクの鼻は、小さくて好きじゃなかったけど、なんだか嬉しい」

> i 3 2 4 3 6 — 3 7 0 8 <

星野ユリの鼻は、小さくて上向きなのか……メモメモ

「黒い瞳がキュートだよ」

「エビアンの碧眼に憧れていて、ステージでは、カラコン使うこともあるんだ」

> i 3 2 4 3 7 — 3 7 0 8 <

星野ユリは、黒い瞳・・・なんだか、嫌な予感しかない・・・
メモメモ

「・・・」

> i 3 2 4 3 8 — 3 7 0 8 <

星野ユリ【予想図】

「そのまんま鉄腕の人じゃないか!!!!」

俺の叫び声に、誰かが「キヌガサ？」と突っ込んでくれたが、それは『鉄人』だ。

「いいや、気にするな、俺の独り言だ」

「ずいぶんと大きな独り言だな、いい加減に静かにしているよ」

ドリルや花クジラは、俺が戦線を離脱していれば、自分のポイントが稼げると思っているだろうが、人を貶めても、けして自分の評価にならないと知るべきだ。

星野ユリ、ただのアイドルかと思ったが、とんでもないボクっ娘だった。確か先ほどの会話で、「エビちゃんに（帽子を）作ってもらった」と告白していたが、まさか原子力で動く、鉄腕の人（想像）だったとは、俺の予想を遥かに超えた逸材だ。

「いや？ ちょっと待てよ・・・」

そのとき俺は、気が付いてしまった。

「鉄腕の人には、プニプニしたものはない！」

俺は、危うく騙されるところだった。

低身長、一人称が『ボク』、目からビーム、お尻からバルカン。

これらの特徴は、星野ユリが鉄腕の人であることを如実に物語っている。

「しかし、プニプニがあるのならば彼女は、女の子である！」

2本の角の位置が、俺の想像と違ってはいるはずだ。

俺は、慌てて壁に書いた星野ユリ【予想図】に加筆して、より完璧なイメージを構築した。

「星野ユリは、女の子・・・」

> i 3 2 4 4 0 — 3 7 0 8 <

星野ユリ【完成図】

星野ユリは、鉄腕の人の妹だ！ これで完璧なはずだ。鉄腕の人に比べると、若干のパワーダウンは、否めないが、その代りセンサーの類が優秀だと聞いている。

いや、そんなことより凄いことに気が付いたぞ、星野ユリは、俺のことを「お兄ちゃん」と呼んでいる。まてまて、俺も、エビちゃんが作った鉄腕の人と言うのか？ そんな記憶なんて・・・ない！

「星野ユリのお兄ちゃんの俺は・・・」

> i 3 2 4 3 8 — 3 7 0 8 <

後藤六助【自画像】

「なんと！俺が鉄腕の人だああああ！」

突然、叫んだ俺にびっくりしたのか、ドリルも「俺がガダムだああああ！」と叫び返した。

「す、すまん・・・意外な事実には、ちょっと動揺してしまった」

俺は、たぶん注目をしているだろう、皆に向かって詫言った。

これ以上の失態を重ねれば、星野ユリが呆れて退会を申し出るかもしれない。せつかく6人集まった会員を1人でも失うのは、大きな損失となる。

「わ、わかった、俺は、もう会話に参加しないで、携帯のワンセグでも黙って見ているよ」

誰も返事をしないが、たぶん「勝手にしろ」ってことだ。

しかし最初のうちは、黙ってワンセグで広島の開幕シリーズを観戦していたものの、誰にも相手にされない、俺の中の悪い虫（性質の悪い虫）が疼き始めた。

「ツーアウト、ランナーなし・・・1対3で最終回ウラ・・・広島に逆転のチャンスがあるでしょうか？」

皆の声に掻き消されるくらい小さな声で、実況を開始した。俺の不審な行動に気が付いた花クジラは、声のトーンを上げてきた。まるで、俺の存在など無視するが如く、わざと大声で校歌を歌いだした。

「うるさい・・・ボクは・・・」

うん？ 花クジラの歌が気に食わなかったのか、星野ユリが「うるさい」と言った気がする。プロの歌手の前で、歌声を披露すれば、苛つかれても仕方がない。これは、いい気味だ。

調子づいた俺は、再び広島戦の実況をはじめた。

「ツーアウト、ランナー1塁に出ました。ついに赤ヘル打線が爆発するのか」

誰も俺の言動を気にも留めていなかったのか、誰も話しかけてこなくなつた。

「打ったあああああ！ 左中間を抜けてツーベースヒット！ これでツーアウト、二、三塁で、四番に回って来たぜ！ 走者一掃一打逆転のチャンスとなりました！」

だが、俺の魂の実況に誰か一人は、興味を持ってくれたようだ。

「おっ、誰か知らんが、一緒に広島戦が見たいのか？」

ベッドに横になっていた俺の横には、鼻息荒い奴が寝そべってワンセグの小さな画面を覗き込んでいるようだ。フンっフンっと、よほど興奮しているのか、俺の肩越しに鼻息は、どんどん荒くなつていった。誰だ？

「ク〜リ〜ハ〜ラ〜、ちいとも打たなかったら〜、死なすから〜」

な、なに、俺の上からワンセグ覗いてる人は、なんで怒っているの？

「ど、どなたさまでしょうか？」

「ちいと黙っててくれるか？」

「は、はい……」

俺は、肩越しの伝わるプシュー、プシューという鼻息に、まるで蛇に睨まれた蛙のように硬直した。

「いかん、赤ヘルのコウ子が出てきたぞ！」

エビちゃんの言った『赤ヘルのコウ子』とは、何者なのか理解できないが、トイレの花子さんみたいな、恐ろしげなネーミングだと思っただ。俺の頬に顔を寄せている奴は、お化け的な奴なんですか？

「赤ヘルのコウ子は、広島が勝てば静まるが、負けたときの荒れ方は、私でも沈めることが出来ない。試合結果が解るまで、全員室外に待機した方がいいぞ」

「な、なに、誰、誰なの？ 動けない俺は、どうなるの？」

「兄ちゃん、ホンマに静かにしてくれえ」

俺は、無言のまま頷くと、皆の足音で室外に退避している様子が見えた。

こ、怖い……よく解らないが、頼むぞクリハラ……打って逆転してくれ。

俺の期待も虚しく、クリハラの三振でゲームセットになった。

ガッツ！ ガッツ！ ガッツ！ と勢いよく丸椅子は、壁に向かって飛んで行った。

見えない誰か（赤ヘルのコウ子）が広島戦の負け試合に、丸椅子に八つ当たりをしているようだ……俺には、ポルターガイスト現象にしか見えない。

ガーン！ 赤ヘルのコウ子は、俺の寝ていたベッドの手摺りを蹴飛ばすと、その部分がベコリと凹んだ。とんだ怪力だ……このままだと、こ、殺される。

俺は、研究室のドアを開けようと走り出すと、ドン、ドガ、ガシ

ヤン、ドン、と物を破壊しながら、赤ヘルのユー子なる化け物が追いかけてきた。

「た、助けてくれ〜」

「ゴロ助、申し訳ないが、赤ヘルのユー子を野に放つわけにいない。悪いが、そこで食い止めてくれ」

エビちゃんの無情の一言は、俺の死を意味するものと理解した。

「ゴロちゃん、がんばれ〜！」

と、上級生（元同級生）の3人は、力いっぱい応援してくれた。

「せ、せめて姿が見えれば、この化け物から逃げ回ることも出来るのに……」

その瞬間、俺の脳は、赤ヘルのユー子なる化け物を人外（人間じゃない）と認識した。目の前には、丸椅子を持ち上げる赤鬼の姿が現れた。

「ひい〜、お、鬼だ〜、赤鬼がいる〜、角がある〜」

丸椅子が俺の脳天めがけて振り下ろされると、本日2度目の気絶となった。

情けない。

気が付くと俺は、誰かに背負われて帰宅の途中だった。

どうやら新人歓迎会は、終わったようだ。

月明かりの中、通学路に沿って浮遊する俺は、本当に情けなくて……

「もう気が付いたから、自分で歩くよ」

俺は、そいつの背中から降りると、そいつが黙って手を繋いでくれた。

夜風は、まだ涼しい。

「ゴロちゃんが戻ってきて、急に騒がしくなったね」

「落ち着きのない男で、申し訳ない」

「おかえり……まだ言っただけだね」

タミちゃん先輩は、俺の手をギュツとしてくれた。
俺は、誰もいない2人だけの街の中を歩いてきた。
なんだかドキドキが止まらない。

家路を急ぐ雑踏が邪魔したが、俺には、手を繋いでくれた彼女しか見えない。

「ただいま、もう何処にも行かないよ」

「うそつき、今日だけで2回も気絶したくせに（笑）」

俺が立ち止まると、タミちゃん先輩も歩くのを止めた。
なんだかドキドキが止まらない。

これは、チューしても許される雰囲気だ。

俺には、彼女が見えなくても、彼女には、俺が見えているはずだ。
「どうしたの？」

俺は、唇を突き出すようにして目を瞑ると、彼女が「おかえり」のチューをしてくれるのを待っていた。

「キスを要求するのなら、もっと場所を選ぶべきだぞ」
エビちゃんの声がした。

「ここまで背負ってやったんだ、まず感謝をしろ」
花クジラの声がした。

「今夜のビデオは、爆笑ものだ」
ドリルの声がした。

「お兄ちゃんたち、恋人だったの？」
星野ユリの声がした。

「うーん、恋人未満、友達以上かな」

なるほど、タミちゃん先輩と2人きりと言うのは、俺の妄想でしかたか。

外伝的なもの 【エビアンの追憶】（前書き）

この話は、エビアンが謎の施設から桜月院の養女となった話と、ゴロ助タイムスリップ中の病院のエピソードです。独立した短編となっております。

外伝的なもの 【ヒビアンの追憶】

> i32759 — 3708 <

【表紙】

桜月院^{おつげいん}エビアン・・・私が桜月院と呼ばれるようになったのは、もう十年前のことなのに、まだ慣れないと言ったら、世界中に散らばっている兄弟姉妹に笑われてしまう。桜も好き、月も好き、桜の舞う月夜は、寝てしまうのが勿体ないと思うほどなのに。

アメリカの研究機関で生まれた私は、物心が付く前から数か国語の言語と、微分方程式や行列計算を理解していた。コンピューターのお母さんは、たつぷり愛情を注いでくれたけれど、彼女の愛情が乱数列が作り出した幻だと理解できても、どれだけ異常なことが気が付かなかった。

「あの頃は、それが当り前の日常だったぞ」

私は、7歳になると飛び級テストに合格して、大学生活をスタートさせた。クラスメイトには、施設の子供たちも何人かいたものの、ほとんどが何かしらの欠陥を抱えており、コミュニケーションにも不自由していた。私たちは、コンピュータに育てられた、コンピュータみたいな人間だった。

私たちは、人間として欠陥品。天才を人工的に作り出す過程^{プロセス}において、特定能力に秀でた者を生み出していく研究機関は、ある穀物メジャーの遺伝子研究チーム内に存在していた。遺伝子レベルでデザインされる私たちは、生産効率の良い家畜と同じ扱いだ。

Future plan（未来計画）と名付けられた研究は、私が8歳になると突然の中止となり、それまで大勢の兄弟姉妹と過ごしていた研究機関は、合衆国政府により解体された。新しい大統領は、優生学的な研究分野に強い不快感を持っていたらしい。

合衆国の保護施設に移された兄弟姉妹は、すぐに里親に引取られ

ていったが、私を含む数人の子供たちは、それぞれ欠陥が幸いして奴隷商人どもが、買い手を探すのに苦労していた。未来計画により生まれた、天才的な頭脳と不安定な精神を持つ子供は、扱いが難しかったのだろう。

売れ残っていた私は、同じ売れ残りだった、成長しない少女を妹のように可愛がっていた。彼女は、テロメアの塩基配列を遺伝子操作されており、成長速度が常人の3分の1となっている。5歳のはずの彼女は、5歳の子供が出来ることなら何でも出来たが、見た目は赤ん坊のままだ。

生きた母親の愛情を知らない私が母性愛を語るのは、少し変な気もするが、彼女に接するときの気持ちは、姉というより、母親のそれを模倣していたと思う。コンピュータの乱数列を真似^{トレース}するのは、それほど難しいことじゃなかった。

「今日の里親候補は、日本からお見えになる。彼女は、私の古い友人のお嬢さんだ、みんな行儀よくしておくれよ」

奴隷商人は、パンパンと手を叩くと、私たちに自分たちの書いた絵や、お気に入りの本などを部屋から持ってくるように言った。このとき、主に身体能力を強化された子供たちは、歳相応の可愛らしい絵や、童話の絵本など、いわゆる普通の子供と見紛う物を持ち寄った。

「エビアンさん、フェルマーの最終定理なんて、面会的时候可以披露するのはお止めなさい」

「しかし、私の里親になる人物なんだ、フェルマーの定理くらい理解しておらねば、夕食の会話にだって困るだろう?」

「パワパフの話で盛り上がりなさいよ」

これが引き取り手が見つからない原因だと、私も理解しているし、多くの売れ残っている子供たちは、わざと気に入られないように工夫していた。私たち兄弟姉妹は、無機質な研究所のベッドから、乳臭い保護施設のベッドに変わり、やっと暖かな家を手に入れたのだ。偽物の両親なんて要らない……。

「エビアン、抱っこして〜」

「ユリは、見た目が赤ん坊でも、もう5歳なんだから、自分で歩けるだろう?」

「手足が短いから、上手に歩けないよ〜、おやつ時間に間に合わない」

「し、仕方のない奴だ、食堂までだよ」

私は、ユリに甘えられると、妹をあやしている姉のような、母親のような複雑な気持ちになる。こんな可愛らしい場面を見ていた奴隷商人は、私たちのやり取りを古い友人とやらに、こっそり見せていたらしい。お嬢さんとやらは、全員の面接を終えると、食堂でおやつを頬張っている私とユリのところにやってきた。

「ねえ、貴女たちは、本当の姉妹なのかしら?」

迂闊だった。いつもなら里親候補がいるときは、絶対に笑顔を見せないと決めていたのに、ユリに向けた笑顔を見られていたなんて。「オバサンの言っている姉妹の定義が、血統主義的な意味であるのなら、私たちの遺伝子レベルでの類似性が確認できず、本当の姉妹じゃありません・・・ですが、同胎の試験管『未来の入口(The entrance of the future)』から生まれたので、出生主義的に姉妹かもしれませぬ」

私は、出来る限り感情を殺して、無機質で機械的に言った。ユリと私は、実の姉妹でないことが何か問題でもあるのか。無神経なお嬢さんは、笑顔を絶やさずにいたが、私の返答に口角を引き攣らせていた。生意気な子供は、けして里親に引取られない。

「そうなの? エビアンさんは、多くの兄弟や姉妹がいるのね」

「私の妹は、ユリだけだ・・・」

このとき私に芽生えた感情は、俗物的な所有欲だったのかもしれない。私は、お嬢さんの狙っているのが、口の減らないガキではなく、純粹無垢な赤ん坊の容姿をしたユリだと、直感的に感じ取ったからだ。彼女は、私の許可も取らずにベビーシートに座っていたユリを抱きかかえた。

「ま、まだ、ビスケットがお皿に残ってる・・・」

「あらあら、もうお喋りが出来るのね、お利口さんだわ」

お嬢さんは、ユリに頬擦りすると、胸の位置に抱えたままでビスケットを口に運んだ。母親が娘に授乳するとき、その位置が正解なのだろうと思うと、なんだか悔しかった。

その様子を見ていた奴隷商人は、私たちのところに近付いて来て「その娘は、成長が遅いけれど、頭の作りは、常人と同じなのよ」と言った。まるで、ブティックの店員が「その服は、お客様に似合いです」と言うように。

「そんなことはないぞ、ユリは、私と同じ未来計画の子供だ。それに赤ん坊のくせに、言葉だって達者じゃないか・・・ユリは、私と同じ未来少女だ」

「エビアンさん、この娘が5歳だって面接前に確認しているのよ。面接のときは、不貞腐れて何も話さなかったけれど、貴女と遊んでいるユリちゃんは、とても可愛かったわ」

面接で気に入られぬようにユリを仕込んでいたのは、私なのだから、そんなこと言われなくても知っている。ユリが可愛いところだつて、私の方がたくさん知っている。お嬢さんの豊満な胸に興味を抱いていたユリは、ペタペタと彼女の顔を手で確認していた。本当に迂闊だった。

「この娘は、私の養女として引取るわ・・・こっちの娘は、私の友人で子供のいない夫婦がいるのだけれど、近いうちに顔を出すように言っわ」

お嬢さんは、ユリを奴隷商人に預けると、彼女を抱いた手で私の頭を撫ぜた。

ユリは、3日後のクリスマスの晩にお嬢さんに引取られて、日本へと旅立っていた。

ユリは、私が9年前に『未来の入口』から生まれた日、日本へと旅立っていた。

お嬢さんが近いうちに里親候補がくると言うてから、半年以上が

過ぎて、施設での生活も1年以上が過ぎたものの、なんの連絡もなかった。その間も私の兄弟姉妹は、次々と奴隷商人に売られていった。ついに未来計画の子供は、私が最後の一人になっていた。

「エビアンさんは、このまま施設の子供でいいのかしら？ 里親候補たちは、新しい子供から里子を選んでいくわ・・・なかなか貰い手の付かない子供は、それだけで欠陥品扱いなのよ」

奴隷商人は、私のことを『欠陥品』と呼んでいたが、私は、生まれたときから何かが壊れている。そんなことを再確認しなくても、解っていることだ。私は、心の中で何度も「うるさい」と、奴隷商人を罵っていた。

桜月院齋王爾おうげついんさいおうじは、自暴自棄になっていた私の前に、日本の伝統的な着物を着て現れた。彼は、ユリを引き取ったお嬢さんの知り合いだと言った。奴隷商人は、その井手達から「The traditioanal Mafia of Japan！」だと騒いだが、なんとも無知で滑稽な女だ。

「オジサンは、ヤクザなの？」

私は、チューインガムを噛みながら、齋王爾が最も嫌がるだろう質問をぶつけてみた。日本は、男尊女卑の国だと聞いている。彼のような格式ばった格好の日本人は、こんな生意気な口を聞くヤンキー娘が嫌いなはずだ。

「なるほど、なかなか気の強い娘だ。よし、私たちの養女において」

「はい？ 私より可愛い子供が、ここに大勢いるよ」

「親は、子供を選べない、子供も、親を選べない」

私は、膨らませたガムを口の中でパチパチと弄ぶと、齋王爾の意図を掴もうと必死だった。この男は、欠陥品扱いされている私のことを理解しているのだろうか？ 私は、隔離された部屋を与えられているほど、精神が不安定で夜泣きが激しい。私を引取る里親は、毎晩の安眠が妨害されるに決まっている。

「オジサンは、私のことを知らない・・・私も、オジサンのことを知らない」

「それで良いのだ、エビアンは、今日から桜月院家の子供だぞ」

「・・・日本にいるユリは、元気にしてる？」

「星野さんの引取った娘は、彼女の家が経営している星^{せい}歡^{かん}幼稚園の年長さんに通っており。男勝りの性格のようで、なかなか活発な娘だぞ」

「私とユリを同じ学校に通わせてくれるのなら、オジサンの娘になってもいいわ」

「幼稚園は、無理があるだろうから、彼女と同じ系列の星^{せい}歡^{かん}小学校に入学するといいぞ」

こうして大学の博士号を取得していた当時9歳の私は、3年遅れの小学校1年生として日本の学校に通うことになった。ユリとは、1学年先輩になってしまいが、彼女の里親が経営する系列校ならば、敷地が同じでいつでも会うことが出来るというので了承した。

「エビアンさん・・・これ・・・」

奴隷商人は、私が施設を出て行く日、ウズ救命丸を^{せんべつ}餞別にくれた。日本の伝統薬で、夜泣きに効くらしい。

「ありがとうございます、シスターもお元気で（棒）」

そして日本に到着すると、私を待っていたのは、黒塗りのドイツ車と、数人の黒いスーツを着た男たち、保護施設の何倍もある屋敷だった。

「ほお、おじさんは、ずいぶん金持ちじゃないか」

私の素直な感想に、斎王爾が大きな音を立ててビンタした。

「エビアン！ ワシのことは、パパないし、オヤジないし、お父ちゃんと呼べ！ もう他人ではないのだぞ」

「お父さんは？ お父さんでもいいよね？」

「うーん、よかろう」

いきなり叩くなんて、やはり日本人の男性は、どこか時代錯誤で野蛮な気がした。けれど、生まれて初めて叩かれた頬は、赤く腫れることもなく、心の中にだけ響き渡るような心地だった。後日談だが、このとき彼は、頬の辺りで自分の手を叩いて鳴らしたらしく、

叩かれたと思っただのは、音に驚いた私の誤解だった。さすが、私のお父様だ。

私が退屈な学校生活と、有り余る桜月院家の財産を湯水のように使って、発明品の制作に取組んでいたのは、夏休みの自由研究を両親が褒めてくれたのが、きっかけだった。小学校を卒業する年には、発明品の数が3桁になっていたものの、そのほとんどが何かしらの欠陥を抱えており、実用に耐える物が作り出せなかった。

「私の発明品は、私と同じで、みんな欠陥品だぞ……」

私は、中学校に進学すると、それまで打ち込んでいた発明を止めてしまい、コンピュータ部（PCゲーム愛好者の集い）に入部した。同じ学年には、男の子ばかりが登場するADVに偏愛を抱く高畠和子すこという友人も出来た。

高畠さんは、私の発明品『体感ゲーム的なもの』を気に入っていて、中学校3年間を彼女と2人バーチャル空間（ゲームばかり）で過ごすことになった。だが、私の発明品には、致命的な欠陥が存在していた。『体感ゲーム的なもの』は、家庭用ゲーム機のカセットに入力されている情報インフォから、室内にゲームの世界を構築するもので、人間の五感のうち『見る』『聞く』『触れる』を体感できるものだ。

体感者は、頭に巻いた鉢巻はちまきから発せられる電気信号の送受信のみで、その場を一步も動かずに、広大なゲームの世界を旅している気分になれるものだった。ただし、ゲーム内で死んだ者は、現実世界でも死ぬという強烈な欠陥があった。

高畠さんとは、『体感ゲーム的なもの』を使って、生死に関わるようなゲームに気を付けていたのだが、興味本位から始めたRPGから抜け出せずに、ついに友人がゲーム内で死を迎えることになった。外から眺めていた私が、寸でのところで電源を落としたのも、彼女は、意識不明の重体となり、三日三晩の昏睡状態となった。

「エビアンさんの発明品は、凄いから……悪いのは、死んじゃっ

ただだからね・・・」

目を覚ました高嶋さんは、私の手を握りしめて励ましてくれた。

「だから、お前で二人目だぞ」

私は、『タイムマシンのなもの』で精神だけが1年後に送られて、肉体だけが横たわる後藤六助（いとうろくすけ）の病室で、日課となっていた低周波による筋肉の収縮運動を行っていた。精神だけの時間旅行とは、なんとも間の抜けた発明品だった。

「1年間も肉体を放置しては、精神の時間軸に肉体が追い付いても、使い物にならないからな」

彼に話しかけても、単なる独り言でしかないのだが、眠っているだけの魂の抜け殻は、長い追憶の日々に文句を言わない、良い話し相手になってくれた。それは、彼の友人だった星歡高校の超常科学研究会メンバーも同様で、時間を見つけては、病室で彼の肉体に話しかけているようだ。

「ゴロちゃん先輩とやら・・・私は、お前のことなど知らないが、研究会の皆に慕われていることは、よく解ったぞ。お前の精神は、来年の4月20日19時15分45秒に、私たちより一足先にタイムスリップして未来にいる。そこは、どんな未来なのだ？　そこにいる私は、ちゃんと笑っているのか？」

私は、病室の廊下をパタパタと騒がしいスリッパの音が聞こえると、耳元に寄せていた顔を起こした。この桜月坂下病院の特別病棟には、病床がいくつもないし、ほかの入院患者はVIPだけで、騒がしい見舞客など、こいつ（後藤六助）の仲間くらいだ。

「エビちゃん、ゴロちゃん起きた？」

研究会の遠田多美代（おんだたみよ）先輩は、彼（精神）がタイムスリップして未来に行つたと、何度も説明しても理解せずに、いつか勝手に現在に戻つて来る（目が覚める）と信じている。

「先輩は、部活をサボって来たのか？」

「うん、もともとビリヤード部は、正式な部員じゃないし、遊ばせてもらってるだけなの。本当は、研究会の活動が出来ればいいんだけどね」

「そうなのか？ 私は、てっきり・・・」

「研究会の方が遊びだと思った？」

「超常科学研究会は、お遊びサークルだから」

「ブーっ、エビちゃん違うよ。研究会は、けっこう真面目に活動してるのよ」

「真面目に、ふざけてるだけだろう」

「『全力』を定冠詞にしたいくらいですよ」

研究会の上級生は、私が想定する高校生の枠に収まりきらないアホが多い。彼女の頭が悪いわけではない、言動の不安定さは、思春期のそれを大きくズレている気がする。彼らの『全力』は、人生のモラトリアムを謳歌していると呼ぶに、あまりに格好が良すぎている。

「先輩たちの生き方は、人生の息抜きだぞ」

「私たちも来年の今頃は、受験戦争真っ只中ですから（笑）」

幼稚園から続く星歓高校のエスカレーターは、四年制大学まで続いていない。

「本当は、もつとゴロちゃんと遊びたかったな・・・来年は、私たち受験生だからね」

先輩は、調子に乗って私の止めるのも聞かずに、『タイムマシンのなもの』を発動させたゴロちゃん先輩とやらの手を握っている。

最初の頃は、私の目を盗むように握っていたが、衣替えが済んだ頃には、もう隠すこともなくなっていた。彼らは、恋人同士だったのだろうか？

「先輩は、私のことが憎くないのか？」

「ぜんぜん（キッパリ）」

「結果的には、私の発明品が、みんなを不幸にしたようなものだぞ・

・・・」

「むしろ、ゴロちゃんのお世話を毎日している、エビちゃんに感謝したいくらいよ」

「こ、これは、『タイムマシンの改良して彼が目覚めたとき、過去（今年の4月20日）に戻すための研究の一環であつて・・・」

私は、何か良からぬ誤解を与えていたのだろうか？ 先輩は、私にウインクをすると、帰り支度を始めた。

「私は、これで用事があるから失礼するね」

「先輩、今来たばかりじゃないか？」

「よく解らないけれど、ゴロちゃんを目覚めさせる研究してるのでしょうか？ エビちゃんの邪魔できないよ」

先輩は、私の足元の紙袋を名残惜しそうに見ながら言った。私は、病室を出て行くこうとする先輩に、慌てて紙袋の中から林檎を2つ取り出して、彼女の手提げ鞆に押し込んだ。

「これ、見舞いの品ですけど、ご家族で食べてください」

「あらあら、いつもスミマセンね（笑）」

先輩の目当ては、見舞客の果物だったのか。

先輩は、病室の入口で背中を向けたまま、「ゴロちゃんが起きたら電話してね」と言った。やはり彼らは、恋人同士なのだろうか。

「そろそろかな？」

私は、腕時計を確認すると、持っていた鞆から注射器を取り出して、彼の静脈から血液をほんの少しだけもらった。24時間周期の採血や検温も手慣れたもので、一連の作業に全くの無駄がなくなっていた。

「ゴロちゃん先輩とやら、体の数値に異常はないぞ。肉体的な健康面は、全て正常値を示しているから、安心して時間旅行を楽しめ。そして目覚めたら、ちゃんと過去に送り返してやるぞ」

私が病室の電気を消すと、窓の外に街明かりが灯っており、雪が降り始めていた。

「そうか・・・今日は、私の誕生日だったぞ」

静かな特別病棟には、彼の心肺機能の動きを示す心電図モニター
の音だけが響き渡っていた。

「お前は、私の誕生日を祝ってくれるのか？」

私は、日課になっていたウズ救命丸を2粒飲むと、今年こそ夜泣
きを直すんだと、強く誓った。

外伝的なもの 【エビアンの追憶】（後書き）

こんな調子で徐々（不定期）にエビアンの素性を明かしていきたい
と思います。エビアンが言った『未来少女』とは？ 小説の中で夏
休みに突入する頃、明らかにになると思います。たぶん^^； 感想
をお待ちしておりますm m

体感ゲーム的なもの 序章

ゴールデンウィークを前にした俺は、2年B組の教室でエビちゃん（クラスメイト）と『毎年恒例の第1回 超常科学研究会GW強化合宿』の準備に追われていた。同合宿は、1年目が創立準備に追われて中止、2年目が俺の時間旅行のため中止、過去2回の開催することが出来なかった恒例行事だ。

「なので、今年のGW強化合宿は、ぜがひでも成功させねばならん」「なぜ初開催なのに、“毎年恒例”なのだ？ ゴロ助の説明は、矛盾だらけだぞ」

時刻表とニラメッコしているエビちゃんは、俺の方を見ずに言った。

「これから我が会の恒例行事にするため、“毎年恒例の”を含めたイベント名称にした」

「そんなことは、どうでも良いのだが・・・宿までの交通手段は、やはりJRと私鉄を乗り継いでも、1日で到着しないぞ」

「うむ、そうだろうな」

合宿先の宿は、けして関東から遠く離れた山奥ではないが、麓の廃村により交通手段が不便になった民宿を格安（エビちゃんのポケットマネー）で貸し切った。交通の便が悪いことは、GW直前になって決まった合宿だったので、そんな宿しか予約できなかったのだ。

「そんな理由なら、私が金を払えば解決する話だろう」

「否！ エビちゃんは、このままだと金と発明品で、なんでも解決しようとする、弱い心の持ち主になってしまう。ここは、当初の予定通りの不便な宿に、泊まることにしよう」

「他人の金と発明品で、なんでも解決しようとするゴロ助に、最も言われたくないことだぞ」

少なくとも俺は、エビアン面白道具に何かを解決してもらった記

憶がないのだが、この街で彼女（桜月院）を敵に回すのは、あまり得策ではないので、言い返さずにいた。

「まあ、今どき時刻表で交通手段を検索するのは、あまり頭が良いと言えませんね」

俺は、ワンセグ付き、おサイフ機能付きのスマートフォンを取り出すと、ルート案内用のアプリを立ち上げた。だが、やはり前日深夜バスで出発して、近くの街まで行っておかないと、当日の宿に到着できなかった。

「私がルート検索せずに、時刻表を調べていると思ったか？ 私が調べていたのは、GWに運行する臨時列車だぞ」

エビちゃんは、複雑に線が引かれたダイヤグラムのページを開くと、俺の顔めがけて投げつけた。

俺たちのやり取りを羨ましそうに眺めていたクラスの男子生徒は、時刻表の角で額から流血した俺をクスクスと笑った。

「エビちゃんは、クラスの男子生徒から人気がありますな」

俺は、ハンカチで額を押さえると、立ち上がって購買部に行くことにした。これ以上、クラスのマドンナを独り占めして、クラスメイト（主に男子）との距離を作りたくない。

「おうメガネ君、一緒にパンでも食おうぜ」

とりあえず俺は、近くで本を読んでいたメガネをかけた奴に声をかけて、親友よろしく肩を組んで教室を後にした。そんな俺には、教室を後にする後ろ姿をエビちゃんが、悲しげな表情で見送ったのを知るよしもなかった。べつに、彼女を避けたわけじゃなかった。俺は、女友達との距離感を測り兼ねているだけだと、やっかみの視線に耐えきれず逃げ出した自分に言い訳をした。

「あの、お弁当を持ってきてるので・・・」

メガネ君は、赤い弁当袋を差し出すと、肩を組んでいる俺を跳ね除けた。

「おいおい、パンの1つ、2つ食ったところで、弁当くらい食べられるだろう？」

「ええ、まあ食べられるかも・・・」

「ハッキリ言おう、俺は、あのクラスに友達がほしい」

「はぁ・・・」

「ハッキリ言おう、お前は、ネクラで友達がいなそうだ」

「そうですね・・・」

「俺たちには、共通の悩みがあり、それを解決する手段がある」

「後藤さんには、エビアンさんがいるじゃないですか？」

「あれは、友達と言うか・・・なんだろうね？」

「私が聞いているんですけど」

「エビちゃんは、俺の友達？」

「だから、なんで疑問形なんですか？ 私に聞かれても困りますよ」

「まあ細かいことを気にするな、とにかくお前は、2年B組の友達

第一号だ！」

「えーと、エビアンさんは？」

「お前も、エビちゃんのファンなのか？」

「クラスの男子生徒は、ほとんどエビアンさんのファンですよ」

「やっぱり高校生男子、赤毛の碧眼に夢見ちゃうのか（偏見）」

「彼女は、私の憧れの女ひとです・・・」

「そうか、メガネ君は、エビアンのことが好きなの？ 告白とかす

るの？」

「わ、私が、彼女のことを好きだと言えと思うの？」

「勇気を出して頑張れば、言えるよ」

「今のは、修辞疑問文だから答えなくて、けっこうです」

「修辞疑問文？」

「言えないってことを強調したんですよ」

「ああ、そっちの修辞疑問文かぁ・・・知ってるよ」

「知らなかったですよ？」

俺は、理屈っぽいメガネ君だったが、なかなか面白い人材だと思
った。ただ、残念なことに我が会には、既にメガネキャラが2人お
り、頭も良さそうだが、エビちゃんと比べれば秀才止まりで中途半

端だ。ツッコミの才能は、磨けば光る気がするものの、俺の仕事を半分くれてやることになる。

「ふっ、お前も運が無い奴だな、一芸に秀でていれば我が会にスウトしたのだが、我が会には、凡人など要らぬ（本日のお前が言うな）のだ！」

「我が会・・・もしかして超常科学研究会のことですか？」

「ご存知ですか、我が会のこと」

「後藤さんが重症のふりまでして、エビアンさんを獲得した、あの・超常科学研究会ですよね」

「なっ、それは、誤解だよメガネ君、わざわざ寿司ネタ女を獲得したくて、1年間も棒に振る（休学する）わけがなかるう」

「後藤さんなら、やりかねないと思います」

「そんなことはない、エビちゃんから頭を下げたから、入れてやったのだ」

「だいたい、どんな活動をしている同好会なんですか？」

「どんな・・・」

この手の質問は、俺が最も避けてきた質問だった。超常科学研究会の設立趣旨は、ほとんどオカルト研究会と同様のもの（もともとオカルト研究会の予定）だったが、既存のオカルト研究会と同じ設立趣旨では、新たな同好会の設立が認められなかった。そこで趣意書の最後に『自然と健康を科学する』と、一文を加えて提出したのだ。ほぼオカルト研究会だ。

「他人に言えないような活動をしていますよね・・・後藤さん？」

「おはようからおやすみまで、くらしに夢をひろげる活動だ」

「それは、ラ オンです。ちなみに自然と健康を科学するのは、ツラですよ」

「メガネ君は、我が会の活動を誤解しているようだ」

「いいでしょう・・・私が後藤さんのトモダチになってあげます」

「はい、よろしく願います」

俺は、よく解らないがメガネの奥から睨み付ける眼力に圧倒され

て、思わず友達になることを約束してしまった。そもそも俺から誘っておいで、今さら断るわけにもいかなかった。

「その代り、私のゲーム同好会と勝負してください」

「ゲーム同好会だと！（驚く必要はない）」

「エビアンさんは、もともと中学時代に私と同じコンピュータ部に所属していて、本来なら星歓高校では、一緒にゲーム同好会に入会するはずだったんです」

「そうか、エビちゃんと同じ中学校だったのか・・・しかし、なぜコンピュータ部ではなく、ゲーム同好会なのだ？」

「コンピュータ部とは、名ばかりのPCゲーム愛好者（アダルト含む）の集まりだったのです！」

「な、なんだと、アダルト含むだとおおおお！」

「そ、そこは、別に驚くところではありません」

「た、確かにPCゲーム愛好者にアダルトゲームは、欠かせないからな（偏見）」

「アダルトと言っても、レギュレーションに準拠したゲームしかやっていませんが・・・R15指定が解禁となった今こそ、エビアンさんが必要なのです（なぜ？）」

「・・・この展開は、もしかやエビちゃんを賭けて、ゲーム勝負を申し込まれるパターンだな」

「お察しのとおり、エビアンさんを賭けて、ゲーム勝負を申し込みます」

メガネ君は、一方的にエビちゃんを賭けて勝負を挑んできた。なるほど、このメガネ君もクラスでやつかみの視線を送っていた1人だったのか。

「よかろう、親友となったメガネ君の頼みなら、無下に断るわけにもいくまい」

「う、後藤さん・・・」

「俺は、儀に熱い関羽のような漢だぞ」

「今の約束を忘れるなよおおおお！」

そして、このメガネ君が、じつは、メガネちゃんだと気が付いたのは、連れシヨンを誘ったときだった。元上級生の俺に生意気な口を叩くメガネちゃんは、女子生徒が着ている山吹色のベスト（着なくてもOK）を着ておらず、オカツパ頭の短髪だったので、思わず男子生徒だと勘違いしていたのだ。生意気なメガネちゃんには、お仕置が必要だと思った。

「いきなり私をトイレに連れ込むとは、どういう見なんだ？」

「何を慌てている？ 親友なんだから連れシヨンくらい誘ってもいいだろう？」

「後藤さんは、ト、トモダチに、そんな破廉恥なことを強要するの？」

「友達同士で見せっこくらいは、強要するかもな・・・とくに拒まれると、無性に見たくなる」

「ないない、そもそも私には、見せる物が無い（汗）」

「俺には、あるぞ、お前に見せたい物があるぞ（笑）」

嫌がるメガネちゃんの手を引っ張って、トイレの中へ無理矢理に連れ込むと、彼女は、両手で顔を隠して、顔を左右に大きく振ってイヤイヤポーズをした。

「や、やめてえ、このヘンタイ！」

しかし、良く考えたらメガネちゃんには、見せっこするべき物がないのだ！ これでは、俺だけ見られ損じゃないか！ まるで罰にならない。

「よく見たらスカートじゃないか！ 俺を騙しやがって！」

じつは、トイレに入る前から気が付いていたのは、前述のとおりなのだが、俺を誑かした罰のために、男子トイレに引き摺り込んでみたのだ。

「後藤さんが、勝手に勘違いしたんでしよう！」

俺は、メガネちゃんから強烈なビンタをもらうと、個室まで飛ばされて洋式便器に頭を打ち付けた。

「絶対に気を失わんぞ！」

もう何処にも行かない（意識を失わない）と、タミちゃん先輩との約束を守るため下腹に力を入れて、遠退きそうになる意識を全力で引き留めた。男子トイレから走り去るメガネちゃんは、一度だけ振り返ったが、俺を助け起こしてくれなかった。

「メガネちゃんは、親友の俺を助けてくれないのか」

俺は、どうにか自力で立ち上がると、後頭部からの流血をハンカチで抑えた。今日は、ついていない日になりそうだと、前から後ろからの流血を交互に抑えながら、その様子を呆然と見ていた男子生徒に「見世物じゃねーぞ、ゴルア！」と凄んでみせたのが、余計に痛々しかった。

「メガネちゃん・・・これに懲りたら、高校生男子の純情を弄ぶなよ・・・」

勝手に同性と勘違いした拳句、何の罪のないメガネちゃんを男子トイレに連れ込んだ俺は、購買部でパンを買って教室に戻ると、クラスメイトの殺気立った視線に晒された。だが、もう皆の視線には慣れっこだ。

「ゴロ助・・・いつかやると思っていたが、クラスメイトの女子を男子トイレに連れ込んで、いったい何をするつもりだったのだ？」

エビちゃんの膝に追いつがる様にメガネちゃんは、肩を揺らして泣いていた。俺は「こいつチクリやがった」と、すぐに状況を理解した。

「俺は、悪くないぞ、悪いのは、紛らわしい格好している、メガネちゃんの方だ」

「私は、何も悪くないぞ」

エビちゃんは、ずり落ちたメガネの上から睨み付けた。

「違うよ、そこで泣いてるメガネちゃんだよ」

「ああ、ゴロ助にレイプされそうになった、高畠さんのことか」

たかはたかすこ

メガネちゃんは、エビちゃんと中学校からの同級生の高畠和子だと、メガネの下から差し込んだハンカチで、泣き腫らした目を擦りながら、自己紹介をはじめた。

「高畠さんとは、中学校のコンピュータ部で・・・」

「その件は、既に聞いている。それより、彼女からゲーム勝負の話
を聞いているか？」

「ゲーム勝負の話は、聞いているが、そんなスケベな企みに、私が
協力するわけないだろう」

「スケベ？」

「そ、その私を賭けてゲーム勝負だって・・・ゴロ助は、ゲームに
勝ったら、私に何をするつもりなんだぞ？」

なるほど、メガネちゃん改め高畠さんは、ゲーム勝負に勝ってエ
ビちゃん（景品）をゲーム同好会に入会させたい。がッ、それには、
エビちゃん本人の了解が必要だ。だから、この勝負は、エビちゃん
の意思など関係なく、勝った方が『エビちゃんを自由に出来る』と
解釈すべきなのだ。

俺が高畠さんの企みを理解すると、エビちゃんの太ももに顔を埋
めていた彼女が、顔を上げて俺の表情を探っていた。なるほど彼女
のエビちゃんに対する執着は、本物だと言わざるを得ない。

「高畠さんの気持は、よく解った・・・義を見て為さざるは、勇無
きなり・・・俺の嫁を賭けて、ゲーム勝負してやるおおお！ ド
グサレメガネええええ！」

俺の熱いゲーム魂で、俺のエビちゃんを玩具しようとするオタゲ
ー女の野望を打ち砕いてやるぜ。高畠さんは「後藤さんも、案外あ
まいようで・・・」と、両手を下げたまま立ち上がると、ニヤリと
笑った。

「私たちゲーム同好会が勝てば、エビアンさんにゲーム同好会の会
員になってもらいます。しかし、後藤さんが勝ったところで、何の
得にもならないのですよ」

高畠さんは、頭がいいのか、悪いのか、自ら墓穴を掘っているよ
うにしかみえない。

「た、確かに、俺が勝ったところで得る物は、ないかもしれない・・・
だが、男にはやらねばならない時がある」

静まり返る教室、響き渡る俺の台詞、すごく格好いいはずだ。教室には、少し遅れて拍手が沸き起こって「いいぞ、頑張れよ!」「応援してるぜ!」「そんな奴、ぶちかましてやれ!」と、クラスメイト達からの熱い声援が届いた。

「ふっ、クラスの男子生徒ども、やっと俺の魅力に気が付いたか・・・」

俺が振り返って、俺の雄姿を称えてくれたクラスメイトに両手を挙げて、ガッツポーズを見せた。なぜか声援がブーイングに変わり、「か・え・れ! か・え・れ!」と、帰れコールに変わった。

「お、おい、たぶんゴロ助への声援じゃないぞ」

エビちゃんは、俺の服の裾を掴んで座るように言った。

高畠さんは、メガネを取ると俺の机の上に仁王立ちをした。

「ゲーム勝負は、3回戦で2本先取した方が勝ちよ」

「お前らゲーム同好会だろ? 俺にハンデをくれよ・・・」

俺は、なぜか女子に見下ろされると弱い。まるで、蛇に睨まれた蛙だ。

「勝負するゲームは、貴方たちが2本用意してきていいわ。勝負日は、今度のゴールデンウィーク! 3対3で勝負しましょう!」

「ゲーム機は?」

「ゲーム機は、エビアンさんが中学生時代に発明した『体感ゲーム的なもの』!」

な、なんだと『体感ゲーム的なもの』とは、エビアン面白道具だな。

「って、どんなゲーム機なんだ?」

「16bit^{16ビット}ゲーム機用のカセットから、バーチャル空間を作り出して遊ぶ玩具だぞ」

「16ビットと言えば、初期の家庭用ゲーム機か? いったい、どういう仕組みなんだ?」

「それは、説明が面倒なので、実機を前にしたら説明してやろう。とにかく、懐かしのゲームを体感できる優れものだ」

メガネを外した高畠さんは、鼻の穴を広げて踏ん反り返るように、俺の返答を待っている。

「よかるう・・・ただし、ゴールデンウィークは、我が超常科学研究会の合宿が予定されている」

「あつ、それ中止だぞ。さつき、タミちゃん先輩たち3人が来て、3年生はゼミ合宿に参加するからと断つて来たぞ。ゴロ助、ちゃんと伝えてなかったらどう？」

えー！、凄く楽しみにしてたのに、タミちゃん先輩とお泊りするの楽しみにしてたのに、どうということだよ。恐るべし受験戦争だよ！

「そ、そうか・・・だが、毎年恒例なので中止は、絶対にしないからね」

「なら、参加するのは、私とゴロ助・・・」

えっ、2人つきりで旅行するの？ それ、それナイスアイデアだよ、寿司ネタ女なんて呼んでごめんよ、大事にするよハニー。

「・・・あとは、ユリの3人だぞ」

ですよね、一瞬夢見ちゃったよ。

「ちよつと待った！ その欠員3人の代わりに、我がゲーム同好会の全会員3人で参加させて頂こう！」

「な、なんだと・・・って、お前ら3人ってことは、専用部屋のないう“根無し同好会”かよ（笑）」

俺たちの星歓高校では、3人で同好会設立、5人で専用部屋が与えられる。昨年まで我が研究会も、俺の欠員により“根無し同好会”だった。“根無し同好会”は、学校から正式な同好会として認められるものの、活動や集会は、放課後の空き教室（事前申請制）に限定されており、新規会員を集めることが難しい。以前、アイドル研究会という“根無し同好会”が存在していたが、クラスを転々と活動を行う彼らに理解を示す者もおらず、結局2年と持たずに解散となった。

「なるほど高畠さん、いやゲーム同好会の魂胆が読めたぜ・・・エ

ビちゃんが入会すれば、もれなくRRSボーカルの星野ユリが付いてくる。つまり同好会が5人になり、専用部屋がもらえる」

俺が名探偵のように、人差し指を高畠さんの顔に向けると、彼女は「人を指差しちゃいけません」と、子供を諭すように言った。

「そのとおりだ、しかも2人が抜けた超常科学研究会は、再び“根無し同好会”となるのだ！」

「よし、来週のゴールデンウィーク2泊3日、合同合宿中に決着を着ける！ ゲーム同好会が勝つてば、エビちゃんを自由に出来る、俺たちが勝てば、高畠さんを自由に出来る、その条件でいいな！」

「望むところだ！・・・ち、ちよつと待て、わ、私に何をさせたいのだ？」

高畠さんも流石に馬鹿じゃないとみえて、俺がこつそり忍ばせた条件に気が付いたようだ。彼女みたいな生意気な女は、お・れ・の研究会に不要だ。ゆえに俺たちが勝ったところで、こんなネクラメガネは、要らないのだ。

「俺が勝ってエビちゃんを自由にしても仕方あるまい、彼女自身も一緒に闘うわけだからな。なので、俺が勝った場合、高畠さんには、連休明けに水着^{スクール}で授業を受けてもらうぜ！」

俺の提案には、男子生徒が全員スタンディングオベーションで拍手した。高畠さんは、メガネを外せば、そこそこの美形だった。彼女が水着で授業を受けるのであれば、男子生徒が俺を応援するのが必至！ 危機的状况を打開して、かつ男子生徒のほとんどを味方に付けた俺は、諸葛孔明と呼ばれた男だ。

「おのれ、孔明！ 謀ったな・・・よかろう、私が負けるはずがない。その条件で受けようじゃないか」

午後の授業開始のチャイムが鳴ると、廊下で腕時計を見ていた小池先生（担任）が古文の教科書を手に入ってきた。

「はい、みんな席について、高畠さんも机に乗っちゃ駄目でしょう」

小池先生が教卓をバシバシと、持っていた30センチ定規で叩き

ながら、デイスコクイーンよろしく机で仁王立ちしていた彼女を注意した。いい気味である。

『おい、ゴロ助・・・私は、合同合宿でも構わないが、ユリの奴は、反対するかもしれんぞ』

エビちゃんは、授業中の配慮から真後ろの席の俺と思考共有化するため、天を見上げるように首を傾げて『二重かぎかつこ』で話しかけてきた。

『星野さんなら、エビちゃんが行くところなら、喜んで着いてくるだろう?』

『どうだろうな・・・ユリは、基本的に人見知りだぞ』

『そうなのか? 新人歓迎会のときは、帰り道でも皆で仲良く話したよ』

『それは、ゴロ助が広島カープファンだからだ・・・ユリは、ゴロ助のことを気に入っている』

『そ、そうなのか? それは、光荣だな』

『それに、宿までの交通機関の問題も残っているぞ』

『その件は、俺が何とか都合しよう・・・』

エビちゃんは、授業開始から天井を見上げたままだった。

『桜月院さん・・・先生を見下し過ぎて、むしろ見上げているのかね?』

俺は、小池先生の渾身のギャグに、身が震えるほどの冷たい何かを感じた。

『そつえば俺は、まだ見えない新入生(星野ユリ)の顔を見たことがなかった。』

『まあ、花クジラたちから話を聞いているから、だいたい、どんな娘なのか解るけどな・・・』

ノートの隅に書いた落書き・・・

> i 3 2 4 4 0 — 3 7 0 8 <

俺の嫁

いやいや、やつぱり顔を見ていないから、どんな娘なのかハッキリしない。俺の妹（3歳児）が持っていた雑誌『めばえ』か、お袋の読んでいた『たまピヨ倶楽部』に、RRS特集が載っていたはずだ、家に帰ったら確認しようと思った。

さっそく帰宅した俺は、妹の読んでいた『めばえ』を取り上げたものの、RRS特集の写真が小さすぎて顔が確認できなかった。仕方がないので、お婆ちゃんが読んでいた『老人の友』を取り上げると、机の上にあった、柿の種もついでに頂戴した。

「その柿の種さえあれば、誰もが食料を奪い合うことも、争うこともない世界になる」

「うるせえ〜ババア、柿の種じゃ〜、柿の種じゃ〜」

「あ、明日が・・・明日が・・・ぐはっ」

お婆ちゃんの十八番“種もみじいさんごっこ”に付き合った後、「ごさそうさまでした」と、柿の種をもらったお礼を言った。お婆ちゃん、長生きしてね。

『老人の友』は、さすが目の悪いお年寄り向け雑誌、RRSポールの星野ユリが特大サイズで写っていた。確かに可愛い、花クジラやドリルが夢中になる気持ちも理解できた。

「俺は、こんな可愛い娘と合宿で3日間も過ごすのか・・・タミちゃん先輩、ごめんなさい」

ほのかな期待を胸にした俺は、合宿中に何かあるかもしれないので、心の中のタミちゃん先輩に先に詫びておいた。そして、お婆ちゃんに『老人の友』を返すと、お年寄りから赤ちゃん雑誌にまで取り上げられている、RRSの幅広い音楽活動に敬意を表したいと思った。

「星野ユリ・・・俺の嫁・・・は、ばずかちいー（照れ）」

まあ、だいたい合宿前の高校生男子（思春期男子）が見せる、はしゃぎっぷり（無駄な行動）を表現できたと思う。

おまけ【設定6】

> i 3 2 4 9 9 | 3 7 0 8 <

たかはたかずこ
高畠和子

体感ゲーム的なもの 深夜バスの出来事

「結局何も考えてなかったってことか・・・」

エビちゃんは、眠そうな目を擦りながら言った。俺たち超常科学研究会の1、2年生は、ゲーム同好会との合同合宿の目的地である辺鄙村^{へんびむら}まで、路線バスが出ている街へ深夜バスで移動するために、新宿駅のバスターミナルに集まっていた。

「高畠さんたちゲーム同好会の連中は、ちゃんとバスの出発までに来るのか？」

「ちゃんと集合時間は、高畠さんに伝えたぞ」

「集合時間は、乗車1時間前だと知っていて、まだ来ないのかよ」
時間は、既に午後10時を過ぎており、深夜バス乗車時間まで30分となっていた。

「ねーねー、お兄ちゃん、ノド乾かない？」

星野ユリは、俺の袖を引っ張ってジュースが飲みたいと訴えている。

「ジュースなら、その自販機で買えばいいだろう？ 小銭が無いのか？」

「違うよ、ノド乾いてるのなら、ボクがコンビニに行くから買ってくるよ」

「ならば、夜の紅茶（夜ティ）が飲みたい」

俺は、バリバリと財布を開けて、200円を取り出すと、星野ユリに渡した。

「お釣りで、うまし棒でも買いなさい」

エビちゃんと星野ユリは、コンビニでお菓子とジュースを調達してくると、バスの乗車時間に戻るからと言い残して、バスの待合室を出て行ってしまった。なんとも、自分勝手な集まりだ。

しかし、はじめて見る（新人歓迎会では見えなかった）星野ユリは、写真で見るよりも、ずいぶん幼く見えた。女子高生と言うよ

り、中学生？、いや小学生にしか見えなかった。彼女は、年齢より若く見られるのを嫌って、RRSロリロックスのステージでは、キツイ化粧メイクで誤魔化しているのだろう。

「ユリちゃんは、可愛い後輩ではあるが、俺のタミちゃん先輩には、及ばなかったな」

星野ユリは、確かに可愛いと思うが、この合宿中で俺が彼女と恋に落ちることは、「絶対にならない」と断言できた。想像のタミちゃん先輩に、先謝りしたものの、それが徒労に終わったと胸を撫で下ろした。

「何にせよ、彼女に身長と胸の話は、しない方が無難と言うことだな・・・」

俺は、まだ現れないゲーム同好会の三人を待ちながら、また独り言を呟いていた。

「す、すいません・・・」

2人が立ち去った待合室のベンチに座った俺に、ストレートの黒髪が印象的な女性が声をかけてきた。白いブラウスにサマーカーデイガンを羽織り、ロングスカートの装いは、避暑地で過ごすお嬢様を絵に描いたようだった。

「どうしました？」

「隣の席は、空いてますか？」

「あつ、どうぞ、どうせ連れは、乗車時間まで戻りませんから」

「有難うございます」

彼女は、重そうな旅行鞆を引き摺るようにベンチの脇まで運ぶと、席に座って溜息を吐いた。

「大きな荷物ですね？」

「ええ、2人分の着替えを、1つにまとめてしまったの」

どうやら彼女にも、連れがいるらしい。可愛い女の子が深夜バスで一人旅だと、考える方がおかしかった。

俺は、乗車前にトイレに行こうと立ち上がると、彼女が空いた席に自分の手荷物を置いた。連れの分の席を確保したのかと思ったが、

「戻ってくるまで、席を守っておきますね」と、笑顔で言った。

「あつ、あ、あ、ありがとう」

どうやら俺の席を確保してくれるらしい・・・俺は、急にノドが渴いたみたいに、声を詰まらせてしまった。彼女は、俺に気があるのだろうか（自意識過剰）。

俺がトイレから戻ると、ドグサレメガネこと高畠さんが、俺の座っていた席の前に立っていた。

「遅刻じゃないか、もう乗車時間になるぞ」

「駅で待ち合わせしていたのだが、行き違ってしまった。そっちだつて、まだ揃ってないのだろうか？」

「うちの2人なら、コンビニに買い出しに行ってるだけだ。お前らゲーム同好会のグズ共と、一緒にするなよ」

俺がゲーム同好会の連中を貶すと、なぜか座っていた彼女が、立ち上がった。「す、すみませんでした」と、頭を下げた。

「うん？ キミは、ゲーム同好会の人なの？」

「は、はい、2年A組の須羽ミツ子と申します」

ミツ子さんが自己紹介しながら、頭を下げる度に、甘い爽やかな香りが鼻腔を擦る。彼女のようなお嬢様が、ゲーム同好会にいたとは知らなかった。

「い、いや、べつにミツ子さんは、ドグ、高畠さんより先に来てるし、謝るのは、コイツだけで結構ですよ」

「おつ、ミツ代も来たぞ！ これで全員揃ったな」

どうやら、ゲーム同好会も全員が揃ったようだ。高畠さんが手を振る先には、ストレートの黒髪に、白いブラウスにサマーカーデiganを羽織り、ロングスカートのお嬢様がいた。あつ、あれ？ このフレイズ前にも浮かんだことがある。既視感デジャヴとは、実際に体験したことがないのに、既に体験したと感ずることだ。

「彼女とは、はじめて会った気がしない・・・まさに既視感だ」

高畠さんは、不思議な現象に動揺している俺の肩を叩いた。

「既視感と逆に、見たはずのものを未知と感ずることを、未視感ジャメウと

言うそつだ。ミツ代は、ミツ子の双子の姉妹だよ」

俺は、目の前のミツ子さんと、こちらに駆け寄ってくるミツ代を交互に見比べると、瓜二つの双子姉妹だった。

「未視感とは、聞いたことがなかった」

「1つ勉強になりましたね」

「こんな可愛い娘が、世の中に二人も存在するなんて、奇跡だな・
・恋の」

「どうです、なかなかの人材でしょう」

走って荒れた呼吸を整えたミツ代は、「高島さんが見つからなくて、ミツ子に先に行ってもらったの」と、遅刻の理由を話してくれた。

「結局、高島さんの遅刻が原因じゃないか？」

「まあ間に合ったから、良かったじゃないですか」

高島さんは、笑って誤魔化したつもりだろうが、俺は、こういう弱味に付け入るのが得意な男だ。

「高島さん、ゲームの商品を変更しようじゃないか・・・ウチが負ければ、エビちゃんとオマケ（星野ユリ）の2人がゲーム同好会に移籍することになる、ウチが勝っても、俺が自由に出来るのは、お前だけだ」

「な、何が言いたいのだよ」

「双子の美人姉妹の彼女たちは、ゲーム同好会に勿体ない人材だ。ウチが勝ったら、2人をもらうことにする。2対2のトレードならば、釣り合いの取れた話になる」

「ま、まてよ、2人がいなくなったら、ゲーム同好会は、解散になっってしまう」

「お前みたいなメガネ外すと、そこそこ美少女は、ギャップで可愛く見えるだけだ。我が研究会は、本物趣向だからな、美人双子姉妹の方が良いに決まっている。お前が抜けたところで、ゲーム同好会が存続できないのだから、たいした条件変更ではあるまい？ 闘う前から、負けたときのことを考える奴は、馬鹿だとアントニオも言

っていたぞ（ニヤリ）」

「我々3人がゲームで負けるはずがない・・・」

「高畠さん！ 後藤さんの挑発に乗っては、ダメですよ〜」

ミツ子とミツ代は、自分たちが商品になると解って、慌てて止めに入った。それにしても、同じ台詞で、同時にツッコミを入れるとは、さすが双子姉妹だ。

そこに戻ってきたエビちゃんと星野ユリは、俺たちに一瞥をくねると、深夜バスに乗り込もうとした。

「おい、もう乗車時間だぞ」

「お兄ちゃん、夜ティ買って来たよ〜」

2人に促されるように、バスに乗り込むと、右側の先頭から三列目までが我々の座席に、割り振られていた。先に乗り込んだ二人は、当り前のように先頭に座っており、星野ユリから夜ティを受け取ると、仕方がないので二列目の窓側に座った。

「お前の隣かよ・・・」

高畠さんは、窓の外を眺めながら、夜ティを飲んでいて俺に愚痴を零した。がッ、それは、俺の台詞だと思った。

「さっきの条件変更だが、やはり俺には、あの双子が諦めがつかない」

「須羽姉妹の件なら、本人たちの了承が得られないのだから、諦めてくれませんか」

「あんな隠し玉を見せられて、商品がお前の裸踊りぐらいじゃ、俺の気が収まらんわ」

「は、裸踊り？」

「そつだよ、お前を自由に出来たら、クラスで裸踊りだよ」

「汚い男だな」

「どうする？ どうせ勝てばいいんだよ」

「・・・須羽姉妹の件、善処します」

俺は、何処までも汚い男だ。魔法のランプが、三つ願い事を叶えてくれると言ったなら、三つ目の願い事は「あと三つ願い事を叶え

てくれ」だ。

「俺には、永遠にランプの精を解放する気がないんだぜ」

俺は、後ろの席の須羽姉妹と、お菓子との交換をはじめた高畠さんの後ろ姿に言った。

「うん？ 何か言いました？」

「今のは、独り言だから気にせんでくれ」

バスが発車すると、車内の注意事項と、運行スケジュールがアナンスされた。出発後に休憩は、深夜1時と4時にドライブインで、到着は、明朝6時半頃ということだ。

「しかし、今頃気が付いたのだが・・・」

俺は、顎に手を当てて考えている素振りをした。

「何に気が付いたの？」

高畠さんは、ポツチーを食べながら聞いてきた。

「この合宿には、俺以外に女子しか参加していない」

「ウチの両親には、後藤さんも女の子として、報告しておいたよ。

男の子が一人で、かえって良かったよ」

「なるほど、女子だけの方が、親の許可を得やすいかもね」

「だから、向こうで写真撮るときは、後藤さんがカメラマンね」

高畠さんは、そう言って自分のデジカメを俺に預けてきた。合宿中のカメラ撮影を俺がすれば、あたかも女子だけの旅行に見えるってことらしい。

「俺を思い出にフレームインさせない気だな」

「悪いけれど、そう言うことです」

「・・・高畠さんは、窓側と席を替わってくれないか？」

「いいですけど」

俺は、通路側に席を移すと、さっそく窓側に座った高畠さんの写真を1枚撮ってやった。

「よかるう、合宿中のカメラマンを引き受けてやるう」

「ええ、宜しく願いますね」

バスが走り始めて30分ほど経つと、消灯時間となった。

須羽姉妹は、暗くなると早々に寝てしまったのか、物音一つ聞こえなくなつた。俺は、通路から覗き込むように後ろを振り向くと、ミツ子とミツ代が頬を寄せ合うようにして、寄り添っていた。

「まるで、鏡があるみたいだな」

「ご、後藤さん、寝顔なんて覗いちゃダメですよ」

「あつ、そうだな、すまん、すまん」

「えーと、私も寝ますけど・・・」

「頼まれても覗かんから、安心して寝ろ」

「違いますよ・・・イビキかいたら起こしてください」

「高畠さん、イビキかくの？」

「寝てる時のことなんて、知りませんよ・・・もしもです」

「OK、OK」

高畠さんは、窓の方に体を預けて、バスに備え付けられていたタオルケットを頭からかぶってしまった。真つ暗な車内で、話し相手もいなくなつて退屈した俺は、前の席でコソコソ話しているエビちゃんたちに、混ぜてもらおうと前列の補助席を出して移動した。幸い左側前2列は、添乗員しか座っていない、注意されたら戻ればいだろう。

「こんばんわ・・・何を話してたの？」

「ユリと私が昔いた、保護施設の話だぞ」

「ボクが5歳のときだから、あまり覚えてなくって」

前のお二人さんは、深夜バスの車内で、ずいぶんと重たいテーマで話をしていた。エビちゃんは、桜月院の養女だと言っていたし、星野ユリが同じ施設で育つた、妹のような存在だったと聞かされていた。

「えーと、お邪魔なら戻りましょうか？」

「べつに邪魔じゃないぞ」

邪魔じゃないと言われても、会話に入れるとも思わないのだが、寝てしまった高畠さんの隣に戻るより、彼女たちの会話に参加することにした。

エビちゃんと星野ユリは、アメリカの研究機関で生まれ育ち、研究機関の解体と共に保護施設に身柄を移されて、桜月院家と星野家にそれぞれ引取られた。

「2人が生まれ育った研究機関は、何の研究をしてたんだ？」

「・・・主に2つの研究で1つは、天才を作り出すことだぞ」

「天才を作る？」

エビちゃんの作り出す面白道具は、どれも現代科学で説明できない、天才的な発明品だ。普通の娘ではないと思っていたものの、まさか作られた天才とは・・・どうやって作るの？

「もう1つは、人間の身体能力を強化する研究だぞ」

エビちゃんは、星野ユリの頭に手を置いた。彼女は、どう見ても小学生で、まさか身体能力が強化されているように見えなかった。

「2人とも面白そうな出生の秘密があつて凡人の俺には、羨ましい限りだよ」

「そうか？」

「サラリーマンの父親と、専業主婦の母親から生まれた俺には、誇れるような特徴もなければ、秘密なんてありやしない。2人の生立ちは、なんか俺にとっては、SFの世界だよ」

俺の素直な感想にエビちゃんたちは、少し照れていたようだ。彼女たちの悩みが、そこにあるのなら、俺だつて一歩踏み込むのに躊躇しただろう。

「ゴロ助みたいに言ってくれた友達は、今までいなかったから・・・なんか嬉しいぞ」

「ボクも嬉しいよ」

自分たちの生立ちを隠そうとしない彼女たちには、躊躇うことこそ失礼になると考えた。それに生まれながらにして特別と言うのは、何も持っていない俺にとって、本当に羨ましいと思つた。俺は、自分の席に戻ると、寝息を立てている高畠さんを起こさぬように眠りについた。

深夜1時を少し過ぎた頃、1回目の休憩場所に着いて前の席の2

人は、ドライブレインを満喫してきたようだ。彼女たちは、寝ていた俺の顔を覗き込むと、ドライブレインで買った夜ティを追加してくれた。

2回目の夜明け間近の休憩には、彼女たちだけがドライブレインで元気に降りて行った。「奴らは、いつ寝てるんだ？」と、眠い目を擦りながら2本目の夜ティを飲んだ俺は、添乗員の「ここから先は目的地まで休憩を入れません」とのアナウンスに、トイレに行っておこうと思っただけで外に出た。

「ゴロ助も寝てなかったのか？」

バスの外では、エビちゃんがガムを噛みながら、薄暗い夜明け前のドライブレインの風景を愉しんでいた。星野ユリは、買い物から戻っていなかった。

「いいや、ちゃんと寝てたよ・・・エビちゃんたちは、寝ないで大丈夫なの？」

「ユリは、3日に1晩だけしか寝ないんだけど、私は、眠くて仕方ないぞ」

「3日に1晩だけしか寝ない？」

星野ユリは、身体強化されていると言っていた。

「ユリは、常人の3分の1しか成長しない。理論値では、常人の3倍の寿命があるんだぞ」

「へえ、それは、長生きだな」

このとき頭が冴えていれば、もっと気の利いたことを言えたかもしれない。

「そうだな、ユリは、長生きだな(笑)」

「エビちゃんは？」

なんで、こんなツマライ質問をしたのか、頭が冴えていたら、もっと違った質問が出来ただろう。少し大人びた彼女の表情を見れば、なんとなく答えも想像できたはずなのに。

「私は、あまり長生きできそうにない・・・」

「そうか、長生きできないのか」

「体は、ともかく脳に過度のストレスを与えているのから、理論値では、常人の3倍で脳細胞も劣化するだろう。ユリには、成長するための時間が、私には、生きていくための時間が足りない・・・私たちは、きつと生まれたときから、何か足りないと思うんだ」

エビちゃんは、たまに遠くを見るように、呆けているときがある。明るく（表面上）話していた生立ちも、やはり彼女たちの重荷になっっていると感じた。

「もう一度、やり直せるのなら・・・いいや、なんでもない」

俺は、不用意な一言で彼女を傷付けるところだった。出自をやり直すことなど、不可能なことで、不可能を前提とした話など無駄なことだ。

「この話をしたのは、ゴロ助が初めてだぞ・・・誰にも言うなよ」

エビちゃんは、ガムを1枚取り出すと、俺の口に無造作に突っ込んだ。彼女の秘密がガム1枚とは、ずいぶんと安い口止め料だ。

「きつとエビちゃんのことだから、すぐに解決する発明品を作ると思っぜ」

「ゴロ助は、本当に面白い男だな」

「エビちゃんは、眠いのなら、ちゃんと寝ておけよ」

彼女は、手を挙げてバスに戻っていた。

俺の頬を照らす温もりで、夜が明けたことを知ると、バスが目的地に到着する寸前だった。深夜バスでの出来事は、あつという間だったが、乗り込む前と降りた後で、世界が少しだけ違って見えた。エビちゃんは、あれから寝たのだろうか？ 赤い目を擦っているの、星野ユリに付き合っただけ徹夜したのだろうか。

高畠さんは、タオルケットを畳んで膝の上に乗せると、俺の顔を睨み付けていた。

「高畠さんは、メガネかけていないと人相が悪いなあ」

「寝起きですから・・・ところで、イビキかいてました？」

俺は、耳を押さえてみせた。

「な、なんで、起こしてくれなかったんですか！」

「キミの寝顔を見ていたかったのさ(笑)」

俺の一言に照れる高畠さんに、後ろの須羽姉妹が「ぜんぜん、イビキかいてませんでしたよ」と、すぐにネタ晴らしをしてしまった。早朝にバスを降ろされた俺たちは、まだ朝靄あさむぎも晴れていない街の中で、時間を潰しながら、乗り換えの路線バスを待っていた。徹夜明けのエビちゃんは、眠そうにしていたので、星野ユリの面倒を交代すると、バス停のベンチで休むように言った。

「星野さんは、俺と探検さんほにでも行くか？」

俺は、星野ユリを誘って、まだ開店前の商店街を歩くことにした。なるべく、彼女を気にするエビちゃんから距離を取ろうと考えたのだ。ただ現役アイドルと二人きりで歩くは、さすがにスキヤンダルになったら不味かったので、高畠さんも誘った。

「少しは、エビちゃんを気遣って、寝かせてやれよ」

「うん？ ボクは、何度も寝るように言ったよ」

星野ユリの遊び相手で起きていたのではなければ、エビちゃんが寝なかった理由は、ほかにあるのだろうか。

「そういえば、中学校の修学旅行でも、エビアンさんが寝ているところ、見たことがなかったですね。彼女だけホテルの部屋が別だったし、何か秘密でもあるのかしら？」

高畠さんが、首を捻っていた。俺は、星野ユリを見ると、両手を肩のところ上げて、ボクも知らないよのポーズをしていた。

「この合宿でも、民宿を貸し切ることを提案したのは、エビちゃんだ」

「エビアンさんの寝姿には、何か秘密があるのかな？」

「ええ、エビアンがボクに隠し事なんて・・・」

俺たち3人は、バス停で休んでいるエビちゃんところに、急いで戻ると、離れたところから様子を見ていた。須羽姉妹は、彼女がウトウトしているので肩を貸していた。

「うーん、完全には、寝入っていないようだな」

「寝ると何かあるんですかね？」

「わ、分らんな・・・エビちゃんのことだから、何でもアリな気がする」

俺は、再び星野ユリを見ると、両手を肩のところに入れて、ボクに聞かれても困るのポーズをしていた。

「謎は、今夜まで解明されないと言うことか？」

「後藤さんには、エビアンさんの寝姿を見せるわけにいきませんよ」

「な、なんだと？」

と、俺が言うと高畠さんは、呆れた顔をした。

「当り前でしょう。まさか女の子と同じ部屋で、寝るつもりですか？」

「それでは、俺の気が収まらん・・・」

俺は、抵抗してみせたものの、星野ユリでさえ「お兄ちゃんとは、寝られないよお」と、色んなところに訴えかける声で言われたので、大人しく引き下がることにした。

街が動き出す午前9時を回ると、辺鄙村行き路線バスが到着した。バス停は便宜上、辺鄙村となっていたが、つい最近に廃村となっており、人が住んでいた痕跡すら感じさせないほど荒廃していた。我々が目指す民宿は、バス停から更に30分ほど山道を登ってところにあつた。

「ここが合同合宿でお世話になる、斉藤さんの家だ！」

「・・・」

「・・・」

まあ、斉藤さんの家を見て、皆が言葉を失うのも無理もなかった。廃屋と見紛う趣の民宿は、廃墟マニアの俺がセレクトした宿で、オカルトマニア垂涎の心霊スポットでもある。

「そういえば、超常科学研究会って・・・」

「そのとおり、この宿は、ほ・ん・も・の・だ」

「なに？ 何が本物なの！」

俺は、女子の恐怖に引き攣る顔を見て、溜息を吐くと、

「タミちゃん先輩なら、涙を流して感動してくれるのに、君らビビ

り過ぎで引くわ」

「ない、ない、ない。あり得ないから、こんな宿とか」

高島さんたちゲーム同好会は、今からでも別の宿を探そうと提案したが、エビちゃんが「ユーレイがいるなら、見てみるのも一興だぞ」と、意外にも俺の後押しをしてくれた。

宿の女将は、昨年の春に連れ合いを亡くした未亡人で、世界中の不幸を背負った顔をしていた。

「後藤様御一行宛に、荷物が届いておりましたので、言われたとおり大広間に運んでおきました」

「それ、私の発明品『体感ゲーム的なもの』だぞ」

民宿の大広間には、小型の冷蔵庫くらいの箱が置かれており、箱の中には、プラネタリウムのような機械と、人数分のヘッドセットが入っていた。使い方は、部屋に荷物を置いてから、ゆっくり聞くとしよう。

「なあ、エビちゃん、その箱なんだが、この合宿中は、大広間の隅っこに置いてくれないか？」

「別に構わないが、何がしたいのだ？」

俺は、空箱を部屋の隅に置くと、合宿中に箱に触れることを全員に禁じた。

「後藤さん、その呪いには、どんな意味があるの？」

箱を満足そうに眺めている俺に、全員が注目していた。

「俺は、タミちゃん先輩と旅行に来たかったんだよ」

「それで？」

高島さんは、意味が解らないと首を傾げている。

「……この箱の中には、中を確認するまで、タミちゃん先輩がいるものとする」

俺は、箱に油性マジックで『タミちゃん先輩在中【ナマモノ】』と書いた。

2泊3日、オカルト合宿のスタートである。

体感ゲーム的なもの 高畠さんの受難

合同合宿の舞台となる民宿は、母屋の一階が大広間と名ばかりの十八畳ほどの食事スペースと、二階に六畳間が四部屋、渡り廊下で繋がれた離れ屋に未亡人が住んでいる部屋があった。廃村となった宿の近くには、コンビニもなかったので、宿に二泊三日の軟禁生活を強いられることになる。

「貸切り甲斐のない宿だな」

俺と星野ユリは、部屋に荷物を置くと、探検と称して宿の施設を見て回っていた。

「この辺りには、ボクらしいかいないと思うと、なんかワクワクするよ」

「都会っ子の星野さんには、ワクワクする風景かもねえ」

都会の御令嬢で、アイドル歌手なんて職業をしていれば、人混みの生活から解放されれば、それだけで胸が躍るものがあるのだろう。だが東京都心から電車で、1時間以上離れている俺の自宅近辺は、ここまで牧歌的でなくとも、似通った風景の中にあつた。

「お兄ちゃんは、面白くないの？」

「うーん、一緒に、はしゃぐ相手がほしいって言うのか・・・女子五人に男一人は、逆に盛り上がらないんだよね」

ゲーム同好会の須羽姉妹を見たときは、恋の予感も絶好調だったが、深夜バスから宿までの道程で、彼女たちと会話もままならなかった。こんなとき、ドリルや花クジラがいたなら、彼女たちの争奪戦など馬鹿騒ぎして、けっこう面白い状況になるのだ。

「ボクと探検ごっこしても、面白くないのかな」

星野ユリは、俺の袖を掴んで引っ張っている。

あれ？ か、可愛いぞ、さすがに恋の予感は、感じないけれど・・・ここは、無理にでもテンション上げておきますか。

「い、いやあゝ、まだ探検してなかった、お風呂場でも確認しに行

きますかあ」

「この宿は、天然温泉らしいよ」

「おっ、では、どっちが先に見つけるか競争だぞ！ 負けたらシツペだからな！」

俺は、彼女と反対方向に走り出すと、大広間に続く縁側の先に暖の簾れんが掛つていたことを思い出した。たぶん、あの先にあるのが、風呂場だろうと当りをつけていた。

「一番乗り！」

暖簾に隠れてたガラス戸を思いっきり開けると、脱衣所があつて衣類籠が何個か積み上げられており、まさに風呂場に間違ひなかつた。当然だが、まだ宿に着いたばかりのエビちゃんたち、ほかの女子が入浴中などの嬉しいハプニングは、ない・・・はずだつた。

「ご、後藤さん？」

一糸纏わぬ高畠さんは、脱衣所の鏡を見ながらメガネの曇りを拭いていた。

「どわっ！ ふざけんなよ！ お前は、しずかちゃんかあ！」

「す、すいません！」

見たはずの俺が怒鳴りつけて、見られた高畠さんが謝るのは、どうにも理解し難い状況なのだが、とりあえず先手必勝で怒つてしまえば、相手が虚を突かれて謝つてしまうのも道理だ。

「お兄ちゃん、どうしたの？」

「な、何もない・・・何もないよ」

「なくないよ、だつて後ろの擦りガラスに、人影が写つてるよ」

なんなの、この宿は、脱衣所の入口が擦りガラスつて、よくある仕様なの？ と、混乱した頭で考えてみたが、民宿のように浴室が一つの場合、内鍵が閉まる様になっているし、入口から奥まった脱衣所なら、ガラス戸に人影を映すこともない。入浴状況が解るガラス戸は、案外よくある仕様と言えなくもなかった。

「ああ、このシルエツトは、たぶん高畠さんですね・・・俺は、名探偵なので、すぐに解りました」

背後を覗き込むようにしている星野ユリは、俺が慌てている様子に「ははあ〜ん」と、何かを思い付いたようだ。

「お兄ちゃん、高畠さんの裸を見て、動揺しているんだね」

さ、さすが見た目は子供 頭脳は大人の星野ユリです、俺の犯行をズバリ言い当てました。それも、ニヤニヤとした、厭らしい目をしながら。

「後藤さん・・・見たんですか」

「ナニもみてませんよ、そもそも高畠さんには、見せるべき物がないと、以前ご自身で言っていましたよ？」

擦りガラス越しに伝わる殺気に、思わず震え上がってしまった。

「それは、下の話であって、上には、見られたくない物が二つある」
た、確かに！ それは、見た気がする。がッ、ほんの一瞬で覚えられるはずが・・・しかし、不思議なもので数学の公式は、何時間見ても覚えられないのに、なぜか異性の裸は、コンマ数秒であっても脳裏に焼き付くものだ。相変わらず星野ユリは、ニヤニヤとしている。

「わ、わかった。見てしまったものは、素直にお詫びしよう。だが、鍵も掛けずに昼から入浴する高畠さんも、悪いと思うのだが？」

「深夜バスの移動で汗掻いたから、皆でシャワーを浴びるんですよ・・・エビアンさんたちのこと待ってるから、施錠できなかつたんです」

俺は、星野ユリの顔を見ると、首を横に振って「聞いていない」と答えたが、バスタオルを抱えたエビちゃん和須羽姉妹が現れて、部屋に戻ってくるのを待っていたと、星野ユリもお風呂に誘われた。「悪かつたな・・・ごゆっくりどうぞ」

高畠さんに何度か詫びた俺は、星野ユリと一緒に部屋に戻ることにした。

「しかし、とんだ災難だったな」

災難だったのは、高畠さんの方だけだ。

「・・・高畠さんの裸、どんなだった？」

「そうだな、けっこう着痩せするタイプだったな」

「おっぱいは？」

「横向いてたから、あんまり見えなかったな」

「どう思った？」

「お母さんとは、違ったな・・・高畠さんの裸が気になるなら、自分で見てくればいいだろう？」

星野ユリは、自分に割り振られた部屋の前で、胸に手を当てて立ち止まった。そういえば、彼女は、常人の三分の一しか成長しないと、エビちゃんが言っていた。

「ボクは、あとで入るよ、恥かしいから」

だけれど、彼女の肉体年齢が五、六歳かといえば、もう少し年齢が上に見える。小学生高学年に感じられるのは、理論値と実測値に環境による誤差が生じているのだろう。

「星野さんは、何が恥ずかしいの？」

「ボクは、そ、その皆と比べると、背が低いから・・・」

「そうなの？ 俺は、てつきり自慢なのかと思ってたよ」

「ボクの体は、自慢なのかな？」

「トップアイドルのRRSボーカル星野ユリ、そのボディが自慢じゃないの？」

彼女は、成長の遅れた体を友人に見られるのが、きっと嫌なんだと思う。エビちゃんが誘ってくれたのに、それを拒む理由は他にないだろう。

「お兄ちゃんはや？」

「星野さんの裸なら、一度見てみたいものですよ」

「ええ、ボクの裸も見たいの？」

俺が言うつと犯罪臭のある台詞だが、彼女が笑顔になったので正解だったのだろう。ただ『も』は、要らないから、高畠さんの裸見ちゃったのは、事故だからね。

星野ユリは、慌てて部屋に入ると、バスタオルと着替えを抱えて踵返しに飛び出してきた。

「ボクも、エビアンとシャワー浴びてくるよ」

彼女は、どうでもいい報告を意気揚々とする、目を瞑って右手を差し出した。俺は、目を細めて何かを待っている彼女を観察していると、への字に曲げて食い縛る口元から「は、早くしてね」と、甘い声が漏れた。

これって、ご褒美にチュー（接吻、口づけ、キス、キッス、kiss）とかしても良いパターンなの？ 何のご褒美か知らないけど、目を瞑って「早くして」って、そういう意味だよな。

「い、痛くしないでね」

え〜！ 痛いのか？ キスって痛いものなの？ 経験ないから解らなかったよ。俺が口をとがらせた瞬間、一階の大広間からタミちゃん先輩の声が聞こえた。

『ゴロちゃんの裏切り者お〜【ナマモノ】』

そうだった、アメリカ育ちの星野ユリにとってキスは、挨拶程度のことかもしれないが、日本男児の俺にとってキスは、愛の証だ。それを気付かせてくれるとは、さすがタミちゃん先輩【ナマモノ】だ。

俺は、彼女の肩に手を置くと、目を開けるように言った。

「こんなことで、君を傷付けたくない」

「ボクは、こんなことで傷付かないよ」

「今は、解らないだろうけど、後からジワジワと痛むものなんだ」

「えっ？ 後からジワジワって、そんなに痛いものなの？」

彼女は、突き出した右手の手首を擦りながら、表情を硬くした。

「だから今日は、お預けにしておこう」

「う、うん、お兄ちゃんのシッペが、そんなに痛いなら・・・」

シッペ？ 風呂場一番乗りの罰ゲームのことですか？ ですよ、ここでキスを要求とか、意味不明ですよ。俺の頭、本当にどうかしてるんじゃないのかな。

右手首をガードするように星野ユリは、俺から逃げるように階段を駆け降りた。

「なんだよ、走って逃げることないじゃん」

部屋に戻った俺は、四部屋の部屋割を確認すると、階段に一番近い部屋から俺の部屋、隣から順番に田畑さんと星野ユリ、須羽ミツ子とミツ代、エビちゃんとなっている。四部屋に六人だから一人部屋が二つなのは、納得できるものの、なぜエビちゃんと星野ユリの組合わせでなく、エビちゃんが一人部屋なのか？

「やはりエビちゃんには、皆と一緒に寝られない秘密があるようだな」

エビちゃんと星野ユリは、普段からベタベタするほど仲が良いのに、突き放すような格好になっても、一人部屋を選択する意図には、根深いものを感じずにいられない。

「人間だもの、隠されれば、見なくなるよね・・・みつを」

俺は、静かに部屋の襖ふすまを開けると、隣の部屋と繋がっていた。民宿の部屋の間仕切りは、よほどのことが無ければ、セキュリティなどの概念がないものだ。

「これでは、扉で部屋を分けている意味などないよね」

星野ユリは、慌てて着替えを取り出したのであろう、部屋に衣類が散乱していた。俺は、とりあえず衣類を踏まぬようにして、更に奥の襖を開けると須羽姉妹の部屋に辿り着いた。彼女たちの部屋は、星野ユリの部屋と対照的に、クローゼットに鞆なども仕舞われており、何も置かれていなかった。

「第二関門までの突破は、予想どおり容易だな・・・問題は、エビちゃんの部屋だ」

俺は、三枚目の襖の前に立つと、しばらく考えてから開けるのを止めた。エビちゃんのことだから、何か仕掛けがあるかもしれないと思った。そのとき、俺は、悪い予感がして二枚目の襖に戻って、足元を確認した・・・そこには、折れたシャーペンの芯が落ちていた。

「！」

や、やられた！ このシャープペンの芯は、いわゆる襖に差し込んで、侵入者が襖を開ければ折れる仕組みになっていた。女性陣は、俺が空き部屋を散策した場合、すぐに解るように仕掛けを施していたのだ。

「こ、これでは、下着を盗みに侵入したと、疑われかねないぞ・・・どうする？」

とりあえず自分の部屋から、シャープペンの芯を持つてくると、須羽姉妹の部屋の襖に差し込んだ。これで、ここの襖が開けられた証拠が無くなった。しかし、扉を開けて出て行けば、外から施錠することができずに、やはり侵入がバレてしまう。

「これでは、袋の鼠じゃないか・・・」

原始的なトラップに引つかかった俺は、自分の無計画さを恥じた。高畠さんの裸を見てから、既に二十分以上が経過しており、このまま須羽姉妹の部屋で悩んでいても、風呂上がりの彼女たちと鉢合わせしてしまう。

俺は、襖とシャープペンの芯を交互に見ると、襖の構造上、裏からシャープペンの芯を貫通させてしまえば、表から刺したように見えることに気が付いた。

「ただ問題なのは、シャープペンの芯の強度と、裏に残ってしまう刺傷だな・・・」

他に残された方法は・・・。

追い詰められた俺は、噴き出す汗を拭くことさえ、忘れていた。

俺が部屋からの脱出に頭を抱えていた頃、女性陣は、エビちゃんと高畠さんの中学時代の話で、大いに盛り上がっていた。

「二人とも同じ部活だったの？」

ミツ子は、内風呂の窓から露天風呂にいる、エビちゃんと高畠さんに話しかけていた。民宿の浴室は、五人が一度に入るに狭かったので、体を洗い終わった者から順番に、露天風呂へ追い出されていた。とはいえ、今シャワーで体を洗っているのは、遅れて入ってきた

た星野ユリだけで、残りの四人は、ゆっくり寛いでいるだけだった。「エビアンさんは、コンピュータ部の部長で、私が副部長だったのよ」

「ボクもコンピュータ部だよ」

高富さんが答えると、星野ユリも自分を忘れてくれるなよと、同じ部活だったと主張した。

「私たち（須羽姉妹）以外は、みんなコンピュータ部だったのね。でも、どうして超常科学研究会に入会して、ゲーム同好会に入らなかったの？」

ミツ代は、ミツ子の肩越しにエビちゃんを見ていた。

「それは・・・」

エビちゃんが伏し目がちに、言葉を詰まらせていると、

「私がエビアンさんの発明品で、事故を起こしたことがあってね。

それから彼女は、ゲームの類から距離を取るようになったのよ・・・ですよ？」

高富さんが、エビちゃん的心情を代弁するように言った。

「その発明品って、『体感ゲーム的なもの』ですか？」

「そのとおりだぞ・・・やっぱりゲーム対決は、中止した方がいいかな？」

エビちゃんは、高富さんとコンピュータ部で『体感ゲーム的なもの』を使用して、彼女を3日間ほど意識不明になったことがあった。高校進学してから同じクラスになっても、二人が積極的に話さなくなったのは、エビちゃんの自責の念からだった。

「ちゃんと使い方を^ル守らなかつた、私が全面的に悪かつたんです。プレイヤーの『死』に繋がるゲームは、危険回避のために厳禁だったのに、RPGをやりたいなんて、馬鹿なこと言つた私が悪かつたんですよ。あの発明品は、とても素晴らしいです」

高富さんは、のぼせてきたのか、湯船の淵に腰かけて足だけを温泉に浸していた。彼女がゲーム対決に『体感ゲーム的なもの』を指定したのは、エビちゃんが自分を避けている原因が、あの事故にあ

ると感じていたからだ。被害者だった彼女が、再び発明品を使用したなら、また以前のような関係に戻れると思っていた。

「けど、後藤さんは、凄い人ですよね」

「えっ、どこが凄いの・・・ミツ子？」

「今のは、ミツ代ですよ」

「ああ、ミツ代か？」

「私も、後藤さんは、凄い人だと思う」

「今のは、ミツ子かな？」

今の発言がミツ子なのか、ミツ代なのか、二人が同じ浴槽に浸かっているの、本人以外に誰も解らなくなっていた。どちらにせよ須羽姉妹は、ゴ口助を凄い人だと、何の前触れもなく褒めている。

「えーと、今の話で、後藤さんが凄いと思える発言が、どこにあったのかな？」

高畠さんは、長い髪が湯船に浸からぬように、タオルで髪を上げている須羽姉妹に聞いた。

「後藤さんのおかげで、合同合宿ができたのでしょうか？」

「きつと高畠さんの想いを感じ取って、二人の仲を近付けてくれたんですよ」

須羽姉妹は、ニコニコとしながら合同合宿が開催できたことをゴ口助の成果だと褒めた。

「アイツは、私を男だと勘違いしていたし、私が事故にあった事実も知るわけがない・・・」

高畠さんは、続いて「私のエビアンさんへの想いも知るはずないと、言おうとして止めた。もしも言葉にしてしまうと彼女は、高校進学してからの1年間、エビちゃんとの壊れかけた友情を、自ら埋め合わせる努力を、全て放棄していたと、宣言するに等しいからだ。」「私は、ゴ口助に感謝しているぞ」

エビちゃんは、立ち上がると腰に手を当てて、少し足を開いた状態で露天風呂からの景色を眺めた。前を隠せエビちゃん！ 皆の視線を釘付けにしているぞ。

「ゴロ助は、いつもツマライ顔した奴を見つけて、ちよつかいを出しているからな。あのときも存外、高畠さんの心情を読み取って、購買部に誘ったのかもしれないぞ」

ゴロ助に話しかけられたとき、彼らのやり取りを羨うらやんでいた高畠さんは、きつと嫌な顔をして睨にらんでいたに違いなかった。彼が誘ったのは、偶然ではなかったのだろうか。

「私は、後藤さんに感謝すべきか・・・まさかな」

彼女たちが風呂上りに大広間を経由すると、民宿の女将が冷たい麦茶を用意していた。

「後藤さんは、私が呼んで来るよ。彼も、シャワーを浴びるかもしれない」

ゴロ助に声をかけるのを志願したのは、先ほど裸を見られて気まずい関係となった高畠さんだった。彼女は、須羽姉妹やエビちゃんの話を鵜呑みにしていなかったが、合宿中、裸を見られた気まずさが続くのを避けたかった。

さて、ここで問題になるのは、ゴロ助こと俺が、無事に自分の部屋に戻れたのか？

「後藤さん、私たちお風呂出て、下の部屋で麦茶飲んでますよ」

高畠さんの扉をノックする音に反応するように、室内でガタガタと慌てる様子があった。

「わ、わかった・・・俺も下に行くよ」

「どうかしたんですか？」

「だ、大成功！！！」

俺は、手品師が切断された箱から、何事もなく飛び出すように、両手を広げて部屋から飛び出した。効果音を入れるのなら『ジャジャーン！』だろう。

「何が大成功なんですか？」

「俺、大成功とか言った？ 独り言だから気にせんでくれ」

「すごい汗かいてますね・・・部屋で何やってたのよ」

俺は、彼女たちのシャーペントラップを回避するため、力仕事を

してたとは言えなかった。

「ああ、自主トレだから気にするな」

「そんな、汗かくほどトレーニングしてるんですか？」

高畠さんは、俺の脇から室内を覗き込んだ。

「そ、そんなことよりゲーム勝負だけど、そろそろ始めないか？」

と、俺が言つと高畠さんは、何か疑るように仕草をしていた。

「そうですね、夕食前に『体感ゲーム的なもの』を起動しますから、後藤さんもシャワー浴びたらどうですか？」

時計の針は、既に午後2時を回っていたが、確かに一人だけ汗臭いのは、申し訳ないのでシャワーを浴びてくることにした。

大広間では、エビちゃんが小型プラネタリウムのような『体感ゲーム的なもの』を設定しており、星野ユリが体操着に赤い鉢巻姿で立っていた。

「おっ、なんだか運動会みたいだな」

「ユリのパーソナルデータを読み取って、ゲーム内のアバター（自分の分身）を作っているところだぞ」

エビちゃんは、本体から伸びたコードを鉢巻の先端に付けられたコネクト部に差し込んだ。その瞬間、星野ユリの瞳から生気が抜けて、何もない中空を見つめていた。

「おい、星野さん・・・」

「なに？ お兄ちゃん」

呼びかけに応えた星野ユリは、虚ろながらも俺の方に視線を向けた。

「意識が無いわけじゃないのか」

「設定中だから意識は、あっち（設定画面）と、こっち（現実）を両方認識している状態だぞ」

「体操着に着替える必要は、あるのか？」

俺は、脱衣所から出てきた須羽姉妹も体操着なのが気になって聞いた。俺は、動きやすい服装と言われたので、ジャージの上下を用意してきたものの、体操着を持って来なかったからだ。

「べつに動きやすい服装なら構わないが、コンピュータ部で使っていたときは、いつも体操着だったから、高畠さんが体操着を持ってくるように伝えたんだろう・・・私も体操着だぞ」

エビちゃんは、そう言いながら須羽姉妹には、白い鉢巻を渡した。紅白の鉢巻を締めている彼女たちは、ますます運動会の装いとなった。

「そういうことならば、俺もシャワーを浴びて、ジャージに着替えてこよう」

俺は、誰もいないことを確認して、脱衣所のガラス戸を開けると、シャンプーの甘い香りが広がった。思春期の高校生男子には、この鼻腔を擽る甘い香りが毒になる。

「花の香り・・・ラベンダー？」

俺は、鼻を摘まむと、余計なことを考えないようにしてシャワーを浴びた。つい先ほどまで女子が浸かっていたと思うと、スケベ心が疼いてしまう。急いで体を洗うと、髪を乾かすのもそこそこ風呂場を後にした。長湯なんかしたら、何をしていたかと勘繰られてしまうからだ。

「ずいぶんと早湯ですね？」

「誰が早漏だ！」

「早湯だと言ったんですよ！」

高畠さんも体操着に着替えて、白い鉢巻を巻いていたが、彼女だけ体操着の上着を下げていた。

「高畠さん、体操着の上着を引つ張り過ぎだろう・・・パンツ穿いてないみたいで、なんかエロいよ」

「な、なんで、この格好が、エロいんですか？」

「ちゃんと上着を中に入れるよ、だらしないぞ」

「その親が・・・間違えちゃったんです」

高畠さんは、頬を赤らめて小さな声で言った。

「はぁ？ 何を間違えたんだよ」

「・・・中学校の・・・」

「はあ？ 聞えないよ」

「中学校の体操着ブルマと間違えたんですよ！」

高畠さんの上着の裾から見え隠れする紺色の物体は、公立校で2004年、私立校でも2005年を最後に、日本から指定校が消滅したブルマだった。

「中学校の体操着ブルマと言うのは、ちよつと無理があると思つぜ」

「なんでですか？」

「日本では、90年代後半にブルマ着用が多くの学校で廃止されており、俺が実物を見るのは、これが初めてと言うことだ。ブルマ着用に処罰を与える学校だつてあるんだぜ」

「ず、ずいぶん詳しいですね」

「お前は、それを俺に見せびらかすために、穿いているに違いない。ゆえにエロい」

「違いますよ、本当に星歓中学校は、ブルマが学校指定だったんです」

俺は、高校受験で編入したので、付属中学の体操着を知らなかった。高畠さんは、エビちゃんを指差して、聞いてみると言った。

「指定じゃなくて選択制だったぞ。ウチの学校は、水着もワンピースとセパレートを選択できるし、その辺は、けっこう自由に選べたぞ・・・私は、短パンだったけど」

「ほら、中学校の体操着がブルマでも、ぜんぜんエロくないだろう？」

「ブルマは、ちよつとエロいぞ」

エビちゃんが裏切ったああああ！

高畠さんは、開き直って上着をブルマに仕舞うと、大広間の椅子の上に仁王立ちした。

「これは、あくまで体操着だ！ エロいと思つた奴が、エロいんだ！」

俺は、鬼気迫る勢いの女に弱かった。

「す、すまなかつた、ブルマに罪はない・・・エロ目線でブルマを

語った、俺が全面的に悪かった」

「分ればいいんですよ」

高畠さんは、興奮気味に答えると、立っていた椅子に腰かけた。

『ブルマは、エロいよ、ゴロちゃんは、悪くないから【ナマモノ】』

タミちゃん先輩在中【ナマモノ】から聞こえた声は、俺が悪くないと励ましてくれた。現在ブルマは、オーバーパンツ（下着）として生産しており、堂々と見せつけているのは、グラビア女優やAV女優くらいなものだ。やはりブルマは、エロスの象徴だと言える。

ただ、いい加減なところで引き下がっておかないと、俺の旗色も悪くなってくる。それを気付かせてくれるとは、さすがタミちゃん先輩【ナマモノ】だ。

「あと未設定なのは、ゴロ助だけだぞ」

俺は、エビちゃんから赤い鉢巻を受け取ると、頭に巻き付けた。

キイイインと、耳鳴りの様な高い音が、頭の奥に響き渡ると、少し不安になった。

「ちよつと、怖いな・・・俺の声、聞えているのか？」

「き・・・えているぞ」

エビちゃんの声は、遙か遠くの方で聞こえた気もするし、耳元にいる小さな彼女が囁いた気もする。それに視界は、物凄く濃いサングラスをかけているようだ。薄暗い上に、なんだか靄が邪魔して、手前より数メートル先が真っ暗だ。

「視界を・・・左右に・・・」

エビちゃんは、左右に視界を動かすように言っていたが、やけにゆっくりとした話し方だった。まるで自分以外は、全員スローモーションで動いているみたいで、なんだか気持ちが悪い。

俺は、エビちゃんの指示に従って、体を色々と動かすと、その動きすら自分の感覚より、数秒のタイムラグがあるように感じた。潜

水夫が深海を歩くとき、水圧の影響で手足の自由が奪われるが、体が思った通りに俊敏な行動をしないのは、どうにも気持ちが悪かった。

鉢巻からコードを無造作に引き抜かれると、急に視界が明るくなって、目の奥に差し込む光が痛かった。それと同時にスローモーションの世界は、通常通りに動き出した。

「これで準備は、全て整ったぞ」

エビちゃんは、人数分のヘッドセットを取り出して、それを配り始めた。ヘッドセットには、ヘッドホンから伸びたマイクと、視界を遮るような目隠しが付いていた。

「こんな簡素なヘッドセットで、VR空間バーチャルに入れるのか？」

「ヘッドセットは、聴覚と視覚を補助するだけで、そこに映像を投影したり、実際の音声をやり取りするわけではない。基本的には、頭に巻いたハチマキ（正式名称）で、脳とVR空間の情報をやり取りするんだぞ」

「では、ゲーム中に俺の本体（実体）は、どうやって操作（コントロール）するんだ？」

自分の体を動かすことをコントローलと呼ぶのは、変な感じだが、設定中の不自由さを考えれば、まさに外から操作（コントロール）するとの表現が適切だった。

「ゲーム中は、現実世界の時間を1として、VR空間での時間が10に設定してある。必要に応じてGM（ゲームマスター：管理者）は、実際の空間で10分の1の速度で、体を動かすことが可能だぞ」
なるほどゲーム中は、GM以外のプレイヤーは、現実世界で動きが取れない状況になるのか。確かに、VR空間の動きが現実世界とリンクしては、思わぬ事故を招きかねない。ゲーム内の進行時間が10倍の体感速度だったから、設定中に皆の動きがスローモーションに感じていたのだと納得した。

「VR空間で10時間ほどゲームをしても、現実世界では1時間と考えていいのかな？ ゲーム内なら10倍長く遊べる仕組みだな」

「そのとおりだけど、現実世界で1時間過ぎると強制解除して、再起動まで6時間稼働できないシステムで、連続稼働も出来ないから1ゲーム10時間以内が目安だぞ」

「体感速度を上げれば1時間で、何十時間でも遊べるだろう？」

「設定次第で体感速度は、上げられないこともないが、あまりお勧めできないぞ」

「なんで、お勧めできないんだ？」

俺がエビちゃんを質問攻めに行っていると、業を煮やした高畠さんが会話に割り込んできた。

「10倍でも強制終了するのに1秒かかれば、ゲーム内で10秒のタイムラグが生じます・・・不測の事態に対応できなくなるんです」

俺は、とりあえずの疑問が片付いたので、夕食前にテストしようと提案した。論じるより体感してしまっただ方が、手っ取り早いと考えたからだ。テスト用のゲームは、3回戦勝負に含まれないと念を押してから、エビちゃんに持ってきたカセット『アフリカ横断ウルトラクイズ』を手渡した。

「クイズならば、人が死ぬこともあるまい」

俺たちは、それぞれ椅子に腰かけると、紅白の鉢巻の上からヘッドセットを付けた。

このとき俺たちは、まだ『体感ゲーム的なもの』の凄さを半分も理解してなかった。

中学生のエビちゃんと高畠さんが、熱中したゲーム機は、まさに夢の発明品だった。

あの耳鳴りの様な高い金属音が止むと、

テッテッテッテレー　　テレッテレー

「ようこそ、VR『アフリカ横断ウルトラクイズ』の世界へ！」

俺は、広い野球場の外野席で、本選出場を賭けた予選クイズの出题を待っていた。

目の前に広がる数千人のクイズ参加者は、VR空間に現れたモブと思えなかった。

「な、なんじゃ、こりゃあああ
「!」

体感ゲーム的なもの 振り払えぬ疑惑

テツテツテツテレー テレツテレー

「ようこそ、VR『アフリカ横断ウルトラクイズ』の世界へ！」

野球のスタジアムで呆けている俺は、目の前に広がるVR空間の光景に圧倒されていた。俺の想像していたNPC（ノン・プレイヤー・キャラクター）は、よく出来たポリゴン程度と考えていたが、クイズ参加者たちの会場を揺らす雄叫びは、まさに生きた人間だった。

「ゴロ助、ちょっと落ち着けよ」

と、立ち上がって辺りを見渡している俺に声をかけたのは、隣に座っていたエビちゃんだった。よく見ると俺の右側には、鉢巻を巻いて体操着姿のエビちゃんと、星野ユリがちよこんと座っており、反対側には、腕組みをして堂々とした高畠さんと、その奥に目を白黒させた須羽姉妹が座っていた。

「いや・・・この球場がVR空間で、前の座席でイチャついているカップルがNPCだと言われても・・・現実ではないのだけど、現実感に乏しいよ。これは、素直に『凄い』としか言い表せない」

「私の発明品は、気に入ってもらえたのか？」

エビちゃんは、照れくさそうに鼻の頭を掻くと、VR空間の説明をしてくれた。

「このVR空間は、家庭用ゲーム機のカセットから基本情報呼び出して、それをプレイヤー各自のイメージと同化させるんだぞ。今回の『アフリカ横断ウルトラクイズ』では、野球場、参加者数千人で予選大会、×クイズ、クイズ内容などが、カセットの基本情報となっている」

「まあ16bitゲームでは、それくらいの情報が限界だろうね・・・しかし、球場や数千人のNPCは、どうやって作っているんだ？ あんな小型の本体で、これほどの演算処理は、不可能だろう？」

俺は、顎に手を当てて『体感ゲーム的なもの』の仕組みを理解しようとして、頭をフル回転させていた。

「VR空間の球場や、参加者数千人のNPCなどの情報は、プレイヤーの思考を読み取って、本体で再構築している。つまりVR空間のリソース（情報資源）は、私たちの頭の中にあるイメージだぞ」

なるほど、先ほどからイチャついていてるカップルは、公園で見かけたバカカップルそのものだ。それに、後ろの席で興奮気味に雄叫びを上げている中年男は、帰宅時の電車で騒いでいた酔払いだった。「予選参加者のNPCは、俺たち（プレイヤー）の頭の中にいる人物で構成されており、本体で作り出す必要が無い。この球場が広島ドームに似ているのは、カープファンの俺と星野ユリのイメージが作り出している・・・理論的には、プレイヤーの想像力次第で、無限のバリエーションに対応できるわけだ」

俺が納得したように頷くと、偉そうに腕組みをしていた高畠さんは、まだ事情を呑み込めていない須羽姉妹に、さらに説明を付け加えた。

「このゲーム機は、簡単に言えば『夢』を共有して、その中でゲームを愉しめる発明品です。ゲーム機が処理しているのは、カセット（ルール）に従ってゲームを進行する、審判員みたいなものですよ」高畠さんの『夢』に例えた説明の方が、俺の解説より解り易かったのだらう、事態を把握した須羽姉妹は、落ち着きを取り戻したようだ。

「それからゲーム内での怪我など『外傷』は、完全終了すれば、ログアウト実際に影響することがないが、ゲーム内の『死』だけは、残念ながら影響がある・・・脳が死んだと判断すれば、実体が『死』を受け入れてしまうんだ」

エビちゃんは、高畠さんの顔を見ずに説明を続けた。

「ただゲームには、『死』を連想させる物が多いものの、ライフポイントが複数（3機など）あるものは、影響を受けないぞ。例えば、シューティングゲームの『ゲームオーバー』は、本体が『ゲームオ

「バー」。「死」と認識しないためだ。あとバトルゲームも、「YOU lose（あなたは負けました）」。「死」と認識しないぞ」彼女の説明では、ほとんどのゲームが安全に遊べると言うことだ。気を付けるのは、いわゆる『デッドエンド（DEAD END）』と呼ばれるゲームで、「YOU DIED（あなたは死亡しました）」と表示されるゲームだ。

高島さんが意識不明となったRPGは、モンスターと闘って負けてもセーブポイントから、やり直しが出来たので、負けても『何度でも闘える』。「不死身」と考えていた。だが、ゲーム内で戦いに敗れた高島さんは、お城の王様に「死んでしまうとは、なさけない・・・」と、死亡を宣告された瞬間、昏睡状態に陥ったのだ。

「その点は、開始前に検証すれば安全に遊べるから、気にしないで大丈夫です」

高島さんは、腕組みを解かず、硬い表情で言った。もしかすると彼女は、VR空間での事故を思い出して、身を竦めているのかもしれない。

「ゲームを強制終了したり、現実世界でトラブルを解決できるのは、GMの権限となっており、ゲーム中に権限の委譲が出来ない。GMは、経験者の私と高島さんが交代で行うぞ」

エビちゃんは、このとき初めて高島さんと目を合わせた。彼女たちは、黙ったまま見つめ合って頷いた。なんだか、スポ根マンガのヒロインが「行くわよ！」と、必殺技を繰り出す瞬間のようだった。さて、俺たちが長い説明を聞いている間に、横断クイズの予選会がスタートしており、客席にいた大勢のNPCが一斉に、グラウンドに描かれたxを目掛けて走り出した。客席に残された俺たちは、その様子を眺めていたが、エビちゃんが腕時計を確認して、そろそろゲームを終了すると言った。

「その時計は？」

「現実世界の時間を表示する、唯一の道具だぞ」
アイテム

俺は、自分の手首に巻かれたリストバンドを確認すると、そこに

デジタル表示で時間が刻まれていた。ただし、1秒が現実世界の0.1秒、10秒が現実世界の1秒で換算されていた。VR空間では、10倍で時間が進行しているのが、よく解るアイテムだ。

「GM以外のプレイヤーに、強制終了の権限がない理由は？」

安全性を考慮するのなら、個別に終了できるのが望ましく思えた。「強制終了は、あくまで最終手段であって、頭痛を伴う吐き気など負担が大きいぞ」

「死ぬよりマシって程度だな・・・」

ほかにVR空間で、現実世界の動向を確認できるのもGM権限となっていた。

「痛みとか・・・私たちは、痛いのが苦手なんです」

須羽姉妹は、またも見事なハーモニーで質問をしてきた。双子の彼女たちは、打ち合わせもなく二人同時に、それも一語一句同じ台詞を思い付くものだと感心させられる。

「当り判定が必要なゲームでは、シッペ態度の痛みを感じるぞ」

「シッペですか？」

ミツ子は、ミツ代の手にしッペをしてから、全く痛みを感じないと言った。するとエビちゃんは、俺の顔面を正拳突きで殴った。

「！」

うん？ いきなり殴られたので驚いたものの、痛みを感じることも、後ろに吹き飛ばされる事もなかった。物凄いフカフカの枕で殴られたみたいに、衝撃さえ感じなかったが、エビちゃんの拳の体温だけが、しっかりと鼻筋に残されていた。

「痛覚情報は、緩和されているようだ・・・ガッ、いきなり殴る必要ないだろう？」

「VR空間では、シッペ程度の痛みなど感じるのも難しいぞ。鉄砲で撃たれても、シッペ程度だと考えれば、痛みに対する恐怖心がなくなるぞ」

須羽姉妹が安心したように、溜息を吐くと、エビちゃんがゲームを終了したようだ。

設定時には、目の奥に痛みを感じるほど眩かった光も、ヘッドセットに付けられていた目隠しのおかげで、快適に現実世界に戻ることができた。VR空間では、説明などを聞きながら30分程度を過ごしていたので、現実世界で3分間ということだ。

『体感ゲーム的なもの』の再起動には、6時間の休憩が必要だから、次の軌道が夜遅くなるね。ゲーム勝負は、深夜バスの移動疲れもあるし、明日の午前中に1回戦、午後に2回戦、合宿最終日に3回戦で行いたいのだが・・・」

俺は、目隠しを付けたまま、向かいに座っているだろう高畠さんに言った。

「私は、そのスケジュールで構わないですよ」

高畠さんは、既に部屋を歩き回っているのか、想像より遠い所で声がした。その後、階段を駆け上がる音が聞こえたので、部屋へ着替えに行ったのだろう。俺は、恐る恐る目隠しを取ると、須羽姉妹がエビちゃんと賑やかに話していた。

「凄い発明品ですよ（キラキラ）」

「そ、そうかな（たじだし）」

「VR空間の時間設定は、どのくらい加速させることが可能ですか？（キラキラ）」

「時間設定は、48倍（1時間で2日間）まで加速できるぞ（たじだし）」

「VR空間で勉強したら、効率良さそうです（キラキラ）」

「確かに、そうかも（たじだし）」

須羽姉妹は、目を輝かせながらエビちゃんに詰め寄っていた。彼女たち姉妹に気圧されたエビちゃんは、困った顔をしながら俺の方を見ていたが、俺は、素っ気ない仕草で顔を背けた。

エビちゃんは、面白道具を褒められると弱いので、自分に向けられた真直ぐな尊敬の眼差しに、少し動揺している。大人しい須羽姉妹は、初めての体験に興奮しており、明るい笑顔ではしゃいでいた。エビちゃんも須羽姉妹も、透明感のある女の子なのに、どこか達

観したような印象を与えている。エビちゃんの強張った表情、須羽姉妹の貼りついた笑顔、彼女たちに共通点があるとすれば、友人に對して、常に他人行儀に接していることだ。

俺は、笑顔を絶やさない須羽姉妹が、高畠さんに向けても同じ笑顔だったことに、彼女たちの笑顔には、若干の拒絶も含まれていると感じていた。愛想笑い。エビちゃんは、表情を作るのが苦手で、他人との距離感を掴めずにいる。そんな彼女たちは、表面上対極であり、正反対のいるにも関わらず、なぜか似ていると感じた。彼女たちの微笑ましい交流は、お互いが打解けるのに必要な通過儀礼だと、見守ることにしたのだ。

「お兄ちゃん、ちょっと相談があるの……」

星野ユリは、少し怯えた顔をしていた。

「なんだ？」

「さっきの野球場に、知っている人が……ううん、本当は、知らないはずの人がいたの」

「えーと、星野さんの知り合いがいたの？」

「知ってる人だけど、知らない人」

俺は、星野ユリが言っている意味が理解できなかった。エビちゃんの説明では、VR空間のNPCがプレイヤーの見知った人間で構成されていると、説明を受けたばかりだ。彼女は、エビちゃんたちに聞かれたくないのか、息を殺すように小声で囁いていた。

「エビちゃんに聞かれたくない人物……俺の部屋で続きを聞こうか？」

星野ユリは、小さく頷くと、先に階段を上がっていた。俺は、机に並べてあった麦茶のコップを手にして、一呼吸置いてから部屋に戻った。

コンコンと、扉を叩く音がして星野ユリが部屋着に着替えて現れたが、その表情は、やはり曇ったままだった。VR空間で見た人物は、彼女にとって好ましくないと、すぐに理解できた。

「高畠さんは？」

「部屋でテレビ見てたよ」

隣の部屋から微かな笑い声が漏れていた。どうやら高嶋さんは、バラエティ番組の再放送が見たくて、誰よりも早く部屋に帰ったようだ。彼女がテレビを見ているのなら、襖一枚隔てただけの隣部屋の様子は、気にならないだろう。

「それで星野さんがVR空間で見た人物は、誰だったの？」

「ボクとエビアンが生まれた、アメリカの研究機関にいたゲロルシユタイナー博士」

「VR空間のNPCは、俺たちのリソースで構成されるのだから、二人の知っているゲロ博士が登場しても不思議じゃないだろう？」

「ボクが知っている博士は、もっと若かったんだ・・・NPCは、白髪で老眼鏡をかけていたし、すごく年老いて見えた」

うん？ 記憶の中の人物が老化していたのなら、確かに奇妙な話だ。同窓会で小学校の同級生にあつたとき、たつた5年ばかり会わないだけで、記憶にある姿形や雰囲気などと違って驚くことがある。脳から直接情報を取得している『体感ゲーム的なもの』で、記憶が補正（経年劣化）されるのだろうか。

「似た人物と見間違えたとか？」

「ううん、ゲロルシユタイナー博士には、額に傷があつたけど、NPCにも傷があつたよ。それに・・・博士は、ボクのことを睨んでいた気がする。あの眼は、モルモットを観察する、あの眼は、ボクらを連れ戻しにきたに違いないよ」

「モルモット？」

星野ユリは、自分の肩を抱きしめると、体を振るえぬよう保とうとした。よく解らないが、ゲロ博士なる人物は、彼女たちにとって最悪な人物だと感じた。そんな出会いたくない人物がVR空間にNPCとして登場するのは、愉快的現象ではないと思つた。脳天気な俺でさえ会いたくない人物の1人や2人いる。

それに彼女たちは、研究機関でどんな仕打ちをされていたのか。

星野ユリの動揺している様を見れば、トラウマになるような扱いを

受けていたのだろう。

「ボクは、博士から Ageless（不老）の子供と呼ばれて……」

「仮にゲロ博士だとしても、VR空間のNPCには、何もできるはずがない。睨んだと感じたのは、星野さんの思い過ごしだよ」

俺は、健気に耐えている星野ユリを引き寄せるように、背中を手を回した。小さい彼女は、抵抗することなく体を預けてきたので、正面から抱きしめる格好になった。たぶん、ほんの数秒の出来事だったが、彼女が落ち着きを取り戻すと、両手で俺の腹筋を押して距離をとった。

「ボクは……ボク以外の誰かが、博士と通じていると思うと怖いんだ」

VR空間に登場したNPCが星野ユリのリソースとは、限らないと気が付いた。つまりVR空間のNPCは、プレイヤー6人のリソースから構成されており、彼女が怯えている博士は、俺を含む誰かの記憶かもしれない。

「俺は、ゲロ博士なんて見たことも、聞いたこともないが……」
「うん」

俺は、星野ユリに信頼されている、広島ファンに悪い奴はいないので当然だ。

「ゲーム同好会の奴らだって、そんな変態博士を知ってると思えないが……星野さんは、エビちゃんを疑っているのか？」

星野さんは、首を大きく横に振ったものの、目に涙を浮かべていた。否定しきれない負の感情は、彼女を混乱させていた。

「すみません……話し聞えてました。NPCが誰の記憶なのか、確かめる方法ならありますよ」

襖の向こう側から高畠さんが話しかけてきた。やはり、民宿の仕切りなどあっても、ないようなものだと思っただと改めて思った。

「高畠さんは、どこから話を聞いていた？」

と、俺が言うと高畠さんは、襖を開けて部屋に入ってきて、涙目

の星野ユリに「ごめんね」と詫びてから「全てです」と言った。彼女は、暗い顔で部屋に帰ってきた星野ユリが、隣の部屋に入っている音が聞こえたので、襖に耳を当てて様子を伺っていたのだ。

「ゲロルシユタイナー博士は、ドイツの遺伝子工学の権威で、エビアンさんたちを生み出した研究機関『Future plan（未来計画）』の総責任者だった男ですよ。研究機関が解散されてから、行方知れずになっているはずですよ」

高島さんは、中学時代のエビちゃんと親友で、星野ユリの先輩だった。彼女が俺よりもエビちゃんや星野ユリの出自に詳しくても、何の不思議もなかった。

「ボクのように身体能力を強化された子供は、潜在能力を引き出すために、生まれてすぐに色々な実験をされたんだ・・・」

『成長をしない少女』と呼ばれた彼女は、常人の3分の1の成長速度だと言っていた。彼女は、研究機関で実験動物のような扱いを受けており、そのことが幼かった彼女の脳裏に恐怖心を植え付けていた。研究機関が解散された今でも、博士の影におびているのは、保護施設に移されてなお、多くの子供たちが研究機関の元研究員に引取られた事実があったらしい。

「元研究員は、なんで研究機関の子供たちを引取っていたの？」

「『未来計画』は、米国政府に解体されたものの、研究の存続を望んだ多くの研究者たちが、地下組織を作って研究を続けていたんですよ。『未来計画』で誕生した多くの少年少女たちは、養子として研究機関の元研究員に引取られたみたいです」

「エビアンは、その事実気付いて、ボクが（元研究員に）引取られないように、保護施設で助けてくれていたんだ・・・」

その地下組織の親玉ゲロ博士（現在）が、VR空間にNPCとして登場したならば、星野ユリが怯えるのも無理のない話だ。それにエビちゃんがゲロ博士と通じているのなら、彼女にとって裏切りを意味している。

「『体感ゲーム的なもの』のNPCは、些細な記憶から再現する場

合もあるのです、誰と知らずに、私や後藤さんがすれ違った人物かもしれない。」

前の席でイチャついていたNPCや、後ろで叫んでいた酔払いのNPCは、俺のリソースから再現されたものだが、とくに知り合いと言つ間柄の人物ではなかった。ならばゲロ博士は、電車内で乗り合わせたドイツ人で、俺の潜在記憶に保管されていた人物かもしれない。

「ゲロ博士を知っている可能性があるのは、エビちゃんだけじゃないわけだ。合同合宿のメンバーの誰かが、道ですれ違っただけの可能性が高いよ。」

彼女の記憶にある博士は、10年以上前の姿なのに、ゲーム内に現在の博士が登場したなら、博士の姿を知る誰かが、この合同合宿のメンバーにいるからだ。ただし高畠さんの説明通りなら、偶然すれ違った人間だった可能性も十分に考えられる。

「なんで、博士が日本にいるの？」

そんな場当たりの説明で、星野ユリが納得するはずもなく、元氣娘の彼女に笑顔が戻ることはなかった。それに、日本に博士がいるのなら、日本人に引取られた星野ユリやエビちゃんが、目当てに違いないからだ。

「ほかの3人にも、確認してみるかい？」

俺は、エビちゃんや須羽姉妹にも、この事実を告げて確認することを提案した。

「ボクがエビアンを疑ったと思われる・・・そんなの嫌だよ。」

俺たちが考えあぐねていると、エビちゃんと須羽姉妹が階段を上がって、自分たちの部屋に帰ってきた。俺が星野ユリを見据えると彼女は目を逸らして、口を真一文字に閉ざしてしまった。姉のように慕っているエビちゃんと、彼女を一方的に疑っている自分の気持ち、上手く整理が出来ないのだろう。

「星野さんの気持ちは、解りました。『体感ゲーム的なもの』には、ゲームを続きから遊ぶために、終了直前の記録ログがあります。エビア

ンさんには、内緒で6時間後の再起動可能になったら、私たち3人で『アフリカ横断ウルトラクイズ』のVR空間にログインしましよ
う」

高畠さんは、落ち込んでいる星野ユリの手を取って励ました。

「高畠さんは、あの発明品の操作できるの？」

「中学校のときは、二人交代でGMをやっていましたから、NPCのリソース元（誰の記憶か）特定も出来ますよ」

「よし、6時間後なら深夜に決行しよう。エビちゃんは、朝から眠そうだったし、たぶん今夜は、グツスリ寝るだろう」

俺は、相変わらず塞込んでいた星野ユリの口角を指で持ち上げて、強引に笑顔を作った。

「元気出せ、コノヤロウ（笑）」

「わ、分ったよ（笑）」

俺たちの仕草が微笑ましかったのか、高畠さんは「何それ？」と、クスクスと笑っていた。とりあえず星野ユリにも笑顔が戻ったので、今夜の詳しい計画を話し合った。

計画は、深夜1時に3人で大広間に集合して、『体感ゲーム的なもの』にログインする。高畠さんの説明によると、終了直後の状態でVR空間に入れるので、そこでゼロ博士のNPCを見つける。NPCには、どのプレイヤーの情報リソースなのか？ いつ頃の記憶なのか？ 大まかに2つの記録がGM権限で開示できる。ゼロ博士のNPCが誰の記憶なのか、それがハッキリすれば、エビちゃんの疑いも晴れる。

「もしもゼロ博士のNPCがエビちゃんの記憶だった場合、必ず彼女の真意を確かめると約束してくれ。彼女が星野さんに秘密にしている理由は、絶対にあるはずだからね」

星野ユリは、小さく頷いて「約束するよ」と言った。エビちゃんに何かの目的があって、博士との密会を内緒にしているのなら、それを明らかにするのは、得策ではないかもしれないが、彼女たちが不信感でいる方が、100倍辛いことだと思った。俺たちは、作戦

決行まで普通に過ごすことを誓って解散した。

午後6時を過ぎた頃、女将さんの夕飯の呼び出しで俺が部屋を出ると、浴衣姿の須羽姉妹と廊下で一緒になった。温泉旅館やホテルの寝間着代わりの浴衣ではなく、白地に淡い色で朝顔が描かれた可愛らしい浴衣だ。女性の泊り客に用意された浴衣は、鄙しひびた民宿に不釣り合いな、気の利いたサービスだった。

「2人と同じ柄の浴衣なんだね」

「私の帯は、赤だけど、ミツ代の帯は、黄色なんですよ」

「なるほど、2人の見分けがついて良いね」

「私たち見分けが付きませんか？」

彼女たちの同時に話すハーモニーには、双子の神秘を感じさせる。

「うーん、じつは、君たちを見分ける方法が1つだけあるのだが……」

俺は、ミツ子さんの頭に顔を近付けて、微かに香るシャンプーの残り香を嗅いだ。

「(クンクン)ミツ子さんのシャンプーは、ラベンダーの良い香りがするね。(クンクン)ミツ代さんも同じ物を使っているのか……」
「ただ、ミツ子さんは、民宿の備え付けの固形石鹸、ミツ代さんがボディシャンプーで体を洗ったでしょう？」

「えっ、そうですか？ そんなに強い香しないとと思うけど(クンクン)」

俺は、風呂場に漂っていたラベンダーの香を思い出して、彼女たちから香るラベンダーにウツトリした。俺が唯一自慢できるのは、調香師級の嗅覚くらいなものだ。この特技を披露すると大抵の女子は、なぜか気分を害するのが、不思議でたまらない。本当は、もっと淡い香りも嗅ぎ取ることが可能だが、あまり詳しく解説すると、たぶん全員から変態扱いされてしまうので、封印しているのだ。

「ミツ子さんは、石鹸の香り、ミツ代さんは、ボディヒープの香りだ」

「それって、見分けていると言うより、嗅ぎ分けているんですよ（笑）」

相変わらず彼女たちの笑顔は、嫌な感じてではないものの、どこか余所余所しさがある。

「鼻が良いとは、ゴロ助にも意外な特技があるぞ。ここから夕飯のメニューも、嗅ぎ分けられるのか？」

エビちゃんは、黒地に紫の濃淡縞模様の浴衣を着ていた。大広間に用意されている夕飯は、焼いた鱒、海老しんじょうのお吸い物、根菜の小鉢、ローストした鴨、魚沼産のコシヒカリ・・・西瓜のような香りは、岩魚のお刺身だろう。それから柑橘系のシャーベットが、食後のデザートに用意されている。

「いや、そこまで解らないよ」

本当は、解っているけど、そこまで言い当てたら、あなたたち引くでしょう？ 俺の特技を知った女子が、それ以降近付こうしなくなるのは、何度も経験済みなんだ。例えば、須羽姉妹と星野ユリは、たぶん甘いもの好きだと解っている。なぜならミツ子さんは、カカオ系の甘い香り、ミツ代さんは、シュガー系の甘い香り、星野ユリは、ミルクの香りがするんだぜ。ちなみに高畠さんは、焦げた醤油（せんべい）の香りがする。

「たいした特技じゃなかったな・・・ほれ、ご飯を食べに行くぞ」

な、なんだと、よくも俺の唯一の特技を一笑に付せてくれたなあ・・・と、怒るほどのことでは、ないから、どうでもいいけどね。ウズ救命丸の香りがする生薬臭い女に、俺の鼻の凄さを理解してもらえなくても、ぜんぜん悔しくないからね。

夕飯の並んだ席には、既に星野ユリと、高畠さんが座って待っていた。彼女たちは、俺のジャージ姿を見て「お兄ちゃんは、浴衣着てこなかったの？」と聞いてきたので、俺に用意されていた浴衣は、背中に大きく民宿の名前が印字されていた、センスの欠片もない浴衣だったと、不貞腐れて言い返した。

「星野さんのピンクの浴衣は、なかなか可愛いね」

「有難う（照れ）」

「しかし高畠さんの群青色ぐんせいしょくの浴衣は・・・まあ、とくにコメント要らないか（笑）」

「なんかコメントしてください。それから群青色ではなく、濃紺と表現してください」

敵である俺に意見を求めるとは、なんて図々しい女だ。

「では、濁点が多い方が、高畠さんらしいよ」

「群青色に対するコメントじゃないですか!」

高畠さんは、敵意剥き出しの眼差しで俺を睨み付けた。そうだとグサレメガネ、俺とお前が敵同士であることを忘れるなよ。裸の付き合いをした（一方的に見ただけだが）親友だが、ゲーム勝負が決着するまで敵なのだ。

夕飯が終わってデザートの手作りシャーベットに舌鼓を打っていたとき、ミツ子さんが俺に内緒話をしてきた。

「後藤さん・・・私たちがシャワー浴びているとき、部屋に入っただしょう?」

「!」

俺の偽装工作は、完璧にシャーペントラップを回避していたはずだ。なぜ、部屋への侵入が、バレたのだらう。あの神経質な高畠さんでさえ、俺の偽装工作を見破れなかったのに。

「1度目は、皆に黙っていてあげます・・・もう黙って部屋に入らないでくださいね（笑）」

「それは、どうも有難うございます（噴き出る汗）」

「それで、お目当ては、私ですか? ミツ代ですか?」

顔を寄せたミツ子さんは、チヨコレートのような香りで俺を誘惑した。ごめんなさい、今の表現は、高校生男子の妄想だと思えます。

「み、ミツ子さんです・・・」

「どうして、私なんですか?」

「さ、最初に見たときから決めてました」

「私たち瓜二つの双子なのに? 私の方が気になりますか・・・私

たち見た目が同じだから、そういうこと言われると、勘違いしちゃいますよ」

ミツ子さんは、俺の耳に息を吹きかけるように、口を尖らせて内緒話を続けている。彼女の言動が大胆な気がするけど、夕飯のときアルコール（お酒）でも飲んだの？

「ちよつと、その2人離れなさいよ！」

高畠さんは、フライング・ボディアタックで俺とミツ子さんの間に飛び込んできた。

「前から気になってたけど後藤さんは、行動がエロいんですよ」

って、俺のせいだよ！ 明らかにミツ子さんから俺に話しかけてたよね？ 空き部屋に侵入した俺には、言い返す言葉がないけどさあ。

「私のお風呂は覗くし、ミツ子に色目を使うし、星野さんと抱き合ってるし、私のお風呂は覗くし、エビアンさんは独り占めするし・・・」

お風呂覗くしが2回出ましたよ、絶対に根に持ってるよね、お風呂覗いたのは事故だからね。

「ゴロ助とユリが抱き合ってる？」

ほら、エビちゃんが誤解してるよ。

「ミツ子に色目って、私の立場は？」

ほら、ミツ代さんも変なスイッチ入ってる。

「ボクは・・・」

星野ユリ、頼むから誤解を解いてくれ！

「・・・お兄ちゃんとのこと、見られてたなんて恥かしいよ（顔真っ赤）」

駄目！ そういう意味で抱きしめたわけじゃないよね、もっと慰める感じと言うか、男女の関係を感じさせる抱擁じゃなかったよね？ 慌てた俺は、もう何を否定していいのか解らないので、大きな声で「俺が悪いのかよおおお！」と叫んで、部屋に引き籠ってしまつた。俺のセーフティゾーンは、一人になれる部屋だけだ。

「ゴロ助は、けっこう傷付きやすいぞ」

エビちゃんは、鼻息荒い高畠さんに、あまり俺を責めるなど諭してくれたいらしい。

「だけど、私に対する態度がムカつくんですよ」

「ゴロ助が高畠さんに突っかかるのは、照れ隠しだと思っぞ」

「なんで、私に照れるんですか？」

「はじめて出来た、クラスメート（同級生）の親友だからだろう」

「親友・・・そんなこと言ってましたね」

エビちゃんには、要らぬフラグを立てないでほしかった。

俺は、部屋で作戦決行までの時間をテレビを観ながら過ごしていると、午後10時を回った頃、隣の部屋の2人がテレビを消して寝たフリを始めた。何もない田舎の民宿だから、静かにしていれば須羽姉妹も、エビちゃんも深い眠りに着いてくれる。

「そつえば昼間は、慌ててシャワー浴びたから温泉に浸かってなかった。まだ時間があるから、一風呂浴びてくるか」

俺は、消灯時間を過ぎて真っ暗な廊下に出ると、足音を殺して風呂場に向かった。脱衣所の明かりも消えており、脱衣籠も全て空なのを確認してから、風呂場の戸を開けた。

消灯時間後も内風呂にこもっている熱気は、沸かし湯ではなく天然温泉の証だ。硫黄の匂いに鉄とナトリウムが混じって、温泉特有の匂いが漂ってきた。さすがに昼間のように女子の残り香（ラベンダーの香り）が、変な衝動を刺激することもなかった。

「なるほど、良い泉質じゃないか」

俺は、体を軽く流して内風呂に深く浸かると、静かに目を閉じた。温泉を楽しむには、1回の時間を短くして、1日3〜4回に分けて浸かる方が効果的だ。

ガタッ

うん？ 露天風呂で何か音がしたようだが、俺しか入浴していな

いのは、何度も確認済みだった。

「誰かいるのか？」

も、もしかするとお化け？ もしそうならば、タミちゃん先輩のために写真の一つでも撮らねば！ 俺は、急いで脱衣籠に戻ると、デジカメを風呂場に持ち込んだ。デジカメに防水加工があるのか、高畠さんからの借物だから解らないが、この際、知ったことではない。

カメラを構えた俺は、露天風呂の戸を少しだけ開けると、そこに人影らしき塊が湯船の脇に蹲すまっていた。この時点で相手が人間なら、何かしらのリアクションがあるものだが、その塊は息を殺して微動だにしなかった。

パシャ！

フラッシュの眩い光に浮かび上がったのは、裸で膝を抱えて座り込んでいる女子だった。自分に向けられたファインダーから手で顔を隠しても、あの特徴的なストレートの黒髪は、須羽姉妹だと分かった。ミツ子さん？ いやミツ代さんかもしれないが、彼女たちのどちらかが人目を忍んで入浴中だった。

「須羽さん？ なんで隠れてるの（素っ裸で）？」

「お、脅かすつもりは、な、なかったけど・・・後藤さんが入ってきたから、出られなくて・・・」

須羽姉妹は、声だけで見分けが付かず、温泉の匂いで嗅ぎ分けるのも難しい。とりあえず名字で呼んでおけば、間違えることはないのだが・・・。

「脱衣籠を確認したけど、浴衣とかなかったよね？」

俺は、内風呂に浸かると、彼女の方を見ないで聞いた。俺は、変態紳士じゃないからな。

「夜は・・・」

須羽さんは、浴衣のない理由を言い澀よどんだ。

「・・・何も着ないの」

「夜は、何も着ない？」

彼女は、風呂場まで何も着ずに（素っ裸で）歩いたのか？

「そう、裸で過ごすの」

「裸で！」

その瞬間、裸で戯れる美貌の双子を思い浮かべた。

須羽さん、あんた天女様だよ。

体感ゲーム的なもの 振り払えぬ疑惑（後書き）

なーこは、読んで頂いてる方と意見交換がしたいので、ツイッターで読了宣言や@nacocoをフォローしてくれると涙流して喜びます^^ 次話も宜しくお願い致しますm

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2216x/>

超常科学研究会 - 未来少女エビアン -

2011年10月25日03時12分発行